

八郎瀉町文化財調査報告書

# 館ノ下遺跡 第2次調査

高岳地区農地集積加速化基盤整備事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

2024年3月

八郎瀉町教育委員会

たてのした  
館ノ下遺跡 第2次調査

高岳地区農地集積加速化基盤整備事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

2024年3月

八郎潟町教育委員会



調査前の状況【220506撮影、南東→】遺跡は写真中央、中央奥が高岳山、右手奥が浦城跡



調査前の状況【220506撮影、北→】左手の集落（五城目町浦横町字館ノ下）の右側が今回の調査区  
中央の東西道路奥が令和3年度に五城目町教育委員会が調査した箇所（浦横町字大堰西）



調査後の状況 [221003撮影、真上→] 写真の上が東、家屋が位置するところが館ノ下集落



調査後の状況 [221003撮影、北東→] 遺跡上空から八郎湯・日本海方面を臨む  
縄文時代前期、左手の現水田地帯の多くは海水面下にあったと想定できる

## 序

八郎潟町では、昭和31年に真坂字沢田地内で発掘調査が実施され、縄文中期の遺跡である沢田遺跡が確認されております。

また令和2年に、八郎潟町高岳地区ほ場整備事業に伴う白ケロV遺跡発掘調査が実施され、縄文時代の石筥などの石器、縄文土器、平安時代の土師器・須恵器、中世の青磁、近世陶磁器などのほか、中世の古銭も出土しました。

さらに白ケロV遺跡と同じく、高岳地区ほ場整備事業に伴う試掘調査の結果、館ノ下遺跡の範囲が南西側（五城目町）と北西側（八郎潟町）に拡大することが判明し、令和3年に五城目町が南西側の第1次調査を行い、令和4年に八郎潟町が北西側を第2次調査として発掘調査を実施しました。

調査により得られた資料は、縄文時代、平安時代（古代）、鎌倉・室町時代（中世）、江戸時代（近世）にまで及ぶ各時代から、約59,000点もの遺物が出土し、中からは、北海道や青森県日本海沿岸で産出する黒曜石が出土しております。

本書は、開発行為に係る埋蔵文化財である館ノ下遺跡の調査結果をまとめたものであります。文化財の保存と普及啓発活動、そして地域の郷土学習の歴史教材として、児童生徒や地域住民、広く遺跡等に興味・関心の高い方々から活用されることを通して、埋蔵文化財の保護の一助となることを心から願っております。

最後になりましたが、現地での調査から本書の刊行に至るまで、ご協力とご支援をいただきました秋田県教育委員会並びに秋田県埋蔵文化財センター、併せて発掘調査に長期間ご尽力くださいました調査員・作業員の皆様には感謝と御礼を申し上げます。

令和6年3月

八郎潟町教育委員会

教育長 江 島 廣

## 例 言

- 1 本書は、高岳地区農地集積加速化基盤整備事業に係る館ノ下遺跡の発掘調査報告書である。同遺跡は八郎潟町と五城目町に跨って位置しており、上記の整備事業に伴い五城目町教育委員会が令和3年度に遺跡南西側地区の発掘調査を実施している。このことから八郎潟町教育委員会が令和4年度に実施した遺跡北西側地区の報告は、第2次調査としている。
- 2 発掘調査ならびに本書作成にあたり、次の団体より多大なる協力・助言をいただいた。記して謝意を表する（順不同、敬称略）。  
NPO法人「浦城」の歴史を伝える会 八郎潟町立図書館 五城目町教育委員会  
秋田県立博物館 秋田県埋蔵文化財センター 秋田市立秋田城跡歴史資料館  
秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室
- 3 縄文土器の分類は、新海和広（秋田県埋蔵文化財センター資料管理活用班長）、石器・剥片の分類・石質同定は、吉川耕太郎（秋田県埋蔵文化財センター調査班長）両氏の指導と助言に基づく。
- 4 礫石器類の石質同定は、渡部 均・鈴木照洋（秋田県立博物館地質部門）両氏の肉眼観察による。
- 5 本書に掲載した遺物の一部は、株式会社ラング（岩手県盛岡市）に業務委託した成果品である。
- 6 黒曜石の産地推定は、株式会社パレオ・ラボに業務委託しており、その分析報告は第3章第4節に示した。
- 7 本書の執筆は、第1章を八郎潟町教育委員会の鎌田大輝が、第2章以降（第3章第4節を除く）は、八郎潟町教育委員会調査指導員である高橋 学が担当し、全体編集は高橋が行った。

## 凡 例

- 1 本書に使用した地図は、八郎潟都市計画用途地域図（昭和57年編集、平成3年修正、1/10,000、第2図）、八郎潟都市計画図（平成4年測量、1/2,500、第3図）、国土地理院 電子地形図25000「五城目」（第5図）である。
- 2 本書に掲載した平面図の方位は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による座標北を示す。
- 3 遺構番号は種類毎に略記号を付し、種別を問わずに検出順に連番とした。また、遺物番号は遺構の内外・種別を問わず出土順に連番とした。遺構・遺物の略記号は次のとおり。  
SD 溝跡 SK 土坑 SR 土器埋設遺構  
RP 土器・陶磁器 RQ 石器・剥片 RM 金属製品・鉄滓 RN 自然遺物
- 4 遺構実測図及び遺物実測図には、それぞれスケールを付して表示した。
- 5 遺跡の基本層序番号にはローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・・・）、遺構内堆積土層番号はアラビア数字（1・2・3・・・）を使用した。
- 6 基本層序・遺構内堆積土の色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』23版によった。

## 目次

### 巻頭図版1・2

序

例言・凡例

目次・挿図目次・表目次

### 第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯…………… 1

第2節 発掘作業と整理等作業の体制…………… 2

第3節 発掘作業の経過…………… 2

第4節 整理等作業の経過…………… 3

### 第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境…………… 6

第2節 歴史的環境…………… 8

### 第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法…………… 14

第2節 基本層序…………… 15

第3節 遺構と遺物…………… 17

第4節 黒曜石製石器の産地推定…………… 154

第4章 総括…………… 158

報告書抄録

## 挿図目次

第1図 遺跡の位置と立地…………… vi

第2図 館ノ下地内周辺の試掘・確認調査位置図…………… 4

第3図 館ノ下遺跡の推定範囲と調査区…………… 5

第4図 遺跡周辺の地形分類・表層地質図…………… 7

第5図 館ノ下遺跡と周辺の主な遺跡…………… 10

第6図 基本土層図…………… 15

第7図 グリッド配置および遺構配置図…………… 16

第8図 検出遺構 S K 11・15土坑と出土遺物…………… 19

第9図 検出遺構 S K 13・16土坑…………… 20

第10図 S K 13土坑出土遺物…………… 21

第11図 検出遺構 S R 17土器埋設遺構、S D 18溝跡…………… 22

第12図 遺物出土分布図 (1) 出土遺物全体重量…………… 24

第13図 遺物出土分布図 (2) 石器類全体点数…………… 32

第14図 遺物出土分布図 (3) 石鏃・石鏃未成品点数…………… 33

第15図 遺物出土分布図 (4) 石槍・石槍未成品点数…………… 34

第16図 遺物出土分布図 (5) 石籠・石籠未成品点数…………… 35

第17図 遺物出土分布図 (6) 石匙・石匙未成品点数…………… 36

第18図 遺物出土分布図 (7) 削器点数…………… 37

第19図 遺物出土分布図 (8) 搔器点数…………… 38

第20図 遺物出土分布図 (9) 石核点数…………… 39

第21図 遺物出土分布図 (10) 黒曜石石器点数…………… 40

第22図 遺物出土分布図 (11) 磨製石斧点数…………… 41

第23図 遺物出土分布図 (12) 石錘点数…………… 42

第24図 出土石器 (1) 石鏃…………… 43

第25図 出土石器 (2) 石鏃未成品…………… 44

第26図 出土石器 (3) 石槍 (1)…………… 45

第27図 出土石器 (4) 石槍 (2)…………… 46

第28図 出土石器 (5) 石槍 (3)、石槍未成品 (1)…………… 47

第29図	出土石器 (6)	石槍未成品 (2)	48
第30図	出土石器 (7)	石槍未成品 (3)	49
第31図	出土石器 (8)	石槍未成品 (4)	50
第32図	出土石器 (9)	石槍未成品 (5)	51
第33図	出土石器 (10)	石槍未成品 (6)	52
第34図	出土石器 (11)	石槍未成品 (7)	53
第35図	出土石器 (12)	石籠 (1)	54
第36図	出土石器 (13)	石籠 (2)	55
第37図	出土石器 (14)	石籠 (3)	56
第38図	出土石器 (15)	石籠 (4)	57
第39図	出土石器 (16)	石籠 (5)	58
第40図	出土石器 (17)	石籠未成品 (1)	59
第41図	出土石器 (18)	石籠未成品 (2)	60
第42図	出土石器 (19)	石籠未成品 (3)	61
第43図	出土石器 (20)	石籠未成品 (4)	62
第44図	出土石器 (21)	石籠未成品 (5)	63
第45図	出土石器 (22)	石籠未成品 (6)	64
第46図	出土石器 (23)	石籠未成品 (7)	65
第47図	出土石器 (24)	石匙 (1)	66
第48図	出土石器 (25)	石匙 (2)	67
第49図	出土石器 (26)	石匙 (3)	68
第50図	出土石器 (27)	石匙 (4)	69
第51図	出土石器 (28)	石匙 (5)	70
第52図	出土石器 (29)	石匙 (6)	71
第53図	出土石器 (30)	削器 (1)	72
第54図	出土石器 (31)	削器 (2)	73
第55図	出土石器 (32)	削器 (3)	74
第56図	出土石器 (33)	削器 (4)	75
第57図	出土石器 (34)	削器 (5)	76
第58図	出土石器 (35)	削器 (6)	77
第59図	出土石器 (36)	削器 (7)	78
第60図	出土石器 (37)	挿器 (1)	79
第61図	出土石器 (38)	挿器 (2)	80
第62図	出土石器 (39)	挿器 (3)	81
第63図	出土石器 (40)	挿器 (4)	82
第64図	出土石器 (41)	石錐 (1)	83
第65図	出土石器 (42)	石錐 (2)	84
第66図	出土石器 (43)	ノッチ	85
第67図	出土石器 (44)	両面調整石器	86
第68図	出土石器 (45)	石製品、その他の剥片石器	87
第69図	出土石器 (46)	二次加工ある剥片	88
第70図	出土石器 (47)	微細剥離痕ある剥片、剥片	89
第71図	出土石器 (48)	石核 (1)	90
第72図	出土石器 (49)	石核 (2)	91
第73図	出土石器 (50)	石核 (3)	92
第74図	出土石器 (51)	石核 (4)	93
第75図	出土石器 (52)	石核 (5)	94
第76図	出土石器 (53)	石核 (6)	95
第77図	出土石器 (54)	石核 (7)	96
第78図	出土石器 (55)	石核 (8)	97
第79図	出土石器 (56)	石核 (9)	98
第80図	出土石器 (57)	石核 (10)	99



第81図	出土石器 (58) 石核 (11) .....	100
第82図	出土石器 (59) 石核 (12) .....	101
第83図	出土石器 (60) 石核 (13) .....	102
第84図	出土石器 (61) 石核 (14) .....	103
第85図	出土石器 (62) 石核 (15) .....	104
第86図	出土石器 (63) 石核 (16) .....	105
第87図	出土石器 (64) 石核 (17) .....	106
第88図	出土石器 (65) 石核 (18) .....	107
第89図	出土石器 (66) 黒曜石製石器 .....	108
第90図	出土石器 (67) 磨製石斧 (1) .....	109
第91図	出土石器 (68) 磨製石斧 (2) .....	110
第92図	出土石器 (69) 磨製石斧 (3) .....	111
第93図	出土石器 (70) 石錘 (1) .....	112
第94図	出土石器 (71) 石錘 (2) .....	113
第95図	出土石器 (72) 石錘 (3) .....	114
第96図	出土石器 (73) 石錘 (4) .....	115
第97図	出土石器 (74) 石錘 (5) .....	116
第98図	出土石器 (75) 半円状扁平打製石器 (1) .....	117
第99図	出土石器 (76) 半円状扁平打製石器 (2) .....	118
第100図	出土石器 (77) 半円状扁平打製石器 (3) .....	119
第101図	出土石器 (78) 敲石 (1) .....	120
第102図	出土石器 (79) 敲石 (2)、礫器 .....	121
第103図	出土石器 (80) 凹石、砥石 .....	122
第104図	遺物出土分布図 (13) 縄文土器重量 .....	135
第105図	出土縄文土器 (1) .....	136
第106図	出土縄文土器 (2) .....	137
第107図	出土縄文土器 (3) .....	138
第108図	出土縄文土器 (4) .....	139
第109図	出土縄文土器 (5) .....	140
第110図	出土縄文土器 (6) .....	141
第111図	出土縄文土器 (7) .....	142
第112図	出土縄文土器 (8) .....	143
第113図	遺物出土分布図 (14) 須恵器点数 .....	145
第114図	遺物出土分布図 (15) 土師器点数 .....	146
第115図	遺物出土分布図 (16) 陶磁器点数 .....	147
第116図	遺物出土分布図 (17) 鉄滓類重量 .....	148
第117図	古代以降の出土遺物 (1) 須恵器 .....	149
第118図	古代以降の出土遺物 (2) 須恵器、土師器 .....	150
第119図	古代以降の出土遺物 (3) 陶磁器 .....	151
第120図	古代以降の出土遺物 (4) 金属製品 .....	152
第121図	石錘散布図 .....	162
第122図	瑛状耳飾の分類模式図と 秋田県内出土の円形・縦円形をなす瑛状耳飾 .....	164
第123図	館ノ下遺跡第1次調査出土の弥生土器 .....	166

## 表目次

第1表	館ノ下遺跡周辺遺跡一覧表 .....	11
第2表	報告書掲載石器観察表 (1) ~ (10) .....	123 ~ 132
第3表	報告書掲載縄文土器観察表 .....	144
第4表	古代以降の報告書掲載遺物観察表 .....	153
第5表	秋田県内における石製瑛状耳飾出土遺跡一覧 .....	165



## 第1章 調査の経過

### 第1節 調査に至る経緯

館ノ下遺跡は、五城目町浦横町字館ノ下地内における携帯電話基地局建物設置工事に先立ち、平成18年に五城目町教育委員会が行った試掘調査により発見された遺跡である（第2図参照）。

令和元年、高岳地区農地集積加速化基盤整備事業に伴い、事業主体者である秋田県秋田地域振興局（以下、地域振興局）は、令和2年度から4年度の事業予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地である館ノ下遺跡、塞ノ神I遺跡、塞ノ神II遺跡が隣接していることから八郎潟町教育委員会及び五城目町教育委員会に対して、工事計画の切土範囲を対象とする遺跡分布調査を依頼した。両町教育委員会は、秋田県教育委員会（以下、県教育委員会）の協力を得て、遺跡の分布を確認するための試掘調査及び遺跡の範囲・内容を確認するための確認調査を令和2年度から実施した。館ノ下遺跡周辺におけるこれら調査の調査主体及び実施日、試掘坑位置は第2図のとおりである。このうち、八郎潟町教育委員会（以下、町教育委員会）が実施した調査の経過は次のとおりである。

・令和2年11月26日試掘調査（第2図③、22～26）

重機（バックホー）を用いて対象地区内に計5箇所の試掘坑（掘削面積1～2㎡）を開け、その結果、26から多数の石器片が出土した。同地点は館ノ下遺跡に近接することから、後日周辺範囲の確認調査が必要と判断した。22～25の範囲については、水田造成に伴う客土中から少量の石器と須恵器片が出土したのみであったため、埋蔵文化財包蔵地としては扱わないこととした。

・令和3年3月22日～29日確認調査（第2図⑤～⑨、43～108）

前年11月の調査結果を受け、非農用地として施工から除外された区域を除く圃場整備範囲について、確認調査を実施した。調査は重機（バックホー）を用いてトレンチ（掘削面積3～20㎡）を66本開け、土層の堆積状況や遺構・遺物の有無についての確認を行った。その結果、調査範囲の南東側で石器類を中心とする出土が多数見られ、107において柱穴様ビットの検出があった。南東側以外の範囲では数箇所遺物の出土があったものの、いずれも水田造成に伴う客土中から少量の出土であった。よって、多数の遺物及び遺構が確認された対象地区の南東側については、出土遺物の内容から、隣接する周知の埋蔵文化財包蔵地「館ノ下遺跡」の拡張範囲と判断し（令和4年2月21日付、八社教発第112号で町教育委員会から県教育委員会へ遺跡範囲の拡張を通知、八郎潟町域分を新規登録）、南東側以外については埋蔵文化財包蔵地としては扱わないこととした。

以上2回の調査結果を踏まえ町教育委員会は、館ノ下遺跡の範囲のうち、圃場整備の面工事または水路掘削により、遺物包含層以下に掘削が及ぶ範囲については工事前の本発掘調査が必要と判断し、工事による掘削が浅い範囲や盛土施工となる範囲を除く、南東側約3,700㎡を本発掘調査範囲に確定させた。これを受け地域振興局は、文化財保護法第94条第1項に基づき、令和4年4月1日付、秋農-1203で県教育委員会に土木工事等のための発掘の通知書を提出し、県教育委員会は令和4年4月1日付、教生文-369で地域振興局に館ノ下遺跡地内における土木工事等について、工事着手前の発掘調査実施が必要なことを通知した。

その後、地域振興局と八郎潟町は、高岳地区農地集積加速化基盤整備事業業務委託として、埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、町教育委員会が発掘調査を担当することとなった。

以上の経緯により、町教育委員会は令和4年5月11日から10月14日まで館ノ下遺跡発掘調査を実施した。調査にあたり八郎潟町は、発掘調査（整理作業を除く）について業務委託することとし、入札の結果、株式会社イビソク秋田営業所が八郎潟町の指示・監理のもと業務を受託することになり、事業を実施した。

なお、令和2年に五城目町教育委員会が館ノ下遺跡（当初の遺跡範囲）の南西側に近接する地区で行った試掘調査（第2図①②1～21、④27～42）においても多数の遺物の出土があり、こちらも同じく遺跡範囲の拡張に至っている。これを受け、五城目町教育委員会は、工事計画により切土される1,237㎡を対象に令和3年7月から9月にかけて発掘調査を実施した。そして、令和4年6月には五城目町文化財調査報告書「館ノ下遺跡」が公開された。

結果的に、館ノ下遺跡は二つの自治体により2度の発掘調査が実施されたことになり、調査年次順に、五城目町を第1次、八郎潟町は第2次調査として位置づけた。

## 第2節 発掘作業と整理等作業の体制

遺跡名	館ノ下遺跡（遺跡番号：363-27-57、遺跡略記号：TNS）
所在地	秋田県南秋田郡八郎潟町浦大町字脇平（第2次調査地区）
調査期間	令和4年5月11日～10月14日 調査面積 3,130㎡
調査主体者	八郎潟町教育委員会
調査体制	八郎潟町教育委員会教育課社会教育担当 教育長 江島 廣 課長 齊藤 嘉生 課長補佐 波部祐一郎 主任 鎌田 大輝（調査担当） 調査指導員 高橋 学（調査担当） 業務受託者 株式会社イビソク秋田営業所 調査支援員 菅井一希（調査担当）

## 第3節 発掘作業の経過

令和4年5月11日、調査担当者立ち会いの下、重機による表土掘削を開始。調査区の北東側から着手した。早くも遺物や微細な炭化物が確認できる。12日、調査区東端では表土下10～20cmで地山面に到達する。17日、調査区南西側は表土層（盛土・耕作土）が厚く1m近く掘削した箇所もあった。20日、本日で重機による表土除去は終了となった。

5月30日、本日より作業員による人力の掘削作業を開始。主にジョレンを用いた遺構検出作業であり、調査区の北側から進めた。

6月8日、出土遺物について、トータルステーションを利用してその位置を記録して取り上げる（点上げ）こととした。初日で407点を記録した。15日、点上げ遺物の総数は2,000点に達した。遺物は

割片や石鐘が目立つ。23日、点上げ遺物4,000点を超す。27日、降雨のため調査区が冠水、周囲の側溝からも雨水が逆流し、以降3日間作業ができなかった。

7月4日、現場再開。遺構検出に向けた作業を行う。6日、点上げ遺物は5,000点、14日には7,000点を超した。25日、遺構検出に向けての作業ではあるものの、いわゆる遺物包含層面における出土遺物の確認・記録(点上げ)に時間がかかり、容易に遺構検出面に到達できない状況である。

8月5日、遺物包含層からの出土遺物は縄文時代の割片が主であるが、同一面から古代の土師器や須恵器も混在する状況である。24日、L H61とL I 61グリッドの境目付近にて、土坑と思われるプランを1基検出する(S K11)。25日、点上げ遺物は10,000点を超す。

9月14日、L J 78グリッドにて土坑1基(S K13)を検出した。22日、9月12日に検出していた土坑1基(S K12)は、半截を実施するも人為的な掘削が認められず遺構ではないと判断した。同日、八郎潟小学校4～6年生17名、総合学習の一環で来跡する。

9月26日、調査区全体の清掃作業を行い、翌27日にはドローンを用いての全景写真撮影を実施した。10月3日、調査区の全体図や等高線図作成のため計測作業を開始する。6日、新たに検出した埋設土器(S R17)の検出写真撮影、半截、断面写真の撮影までを実施する。掘り下げの結果、埋設されていた土器は、その高さ2～5cm程度であり、上部が削平を受けていたことが明確となった。

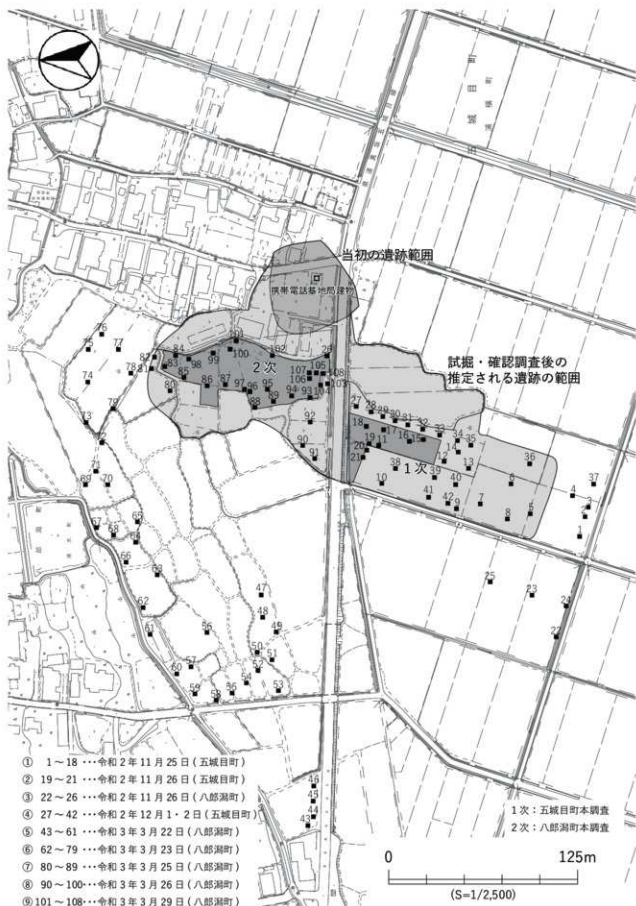
10月13日、事業主体者である秋田地域振興局担当職員、調整機関である県文化財保護室職員立ち会いの下、現場の引き渡し協議を行う。14日、本日で野外調査は終了する。現地で点上げた遺物の総数は12,623点であった。

#### 第4節 整理等作業の経過

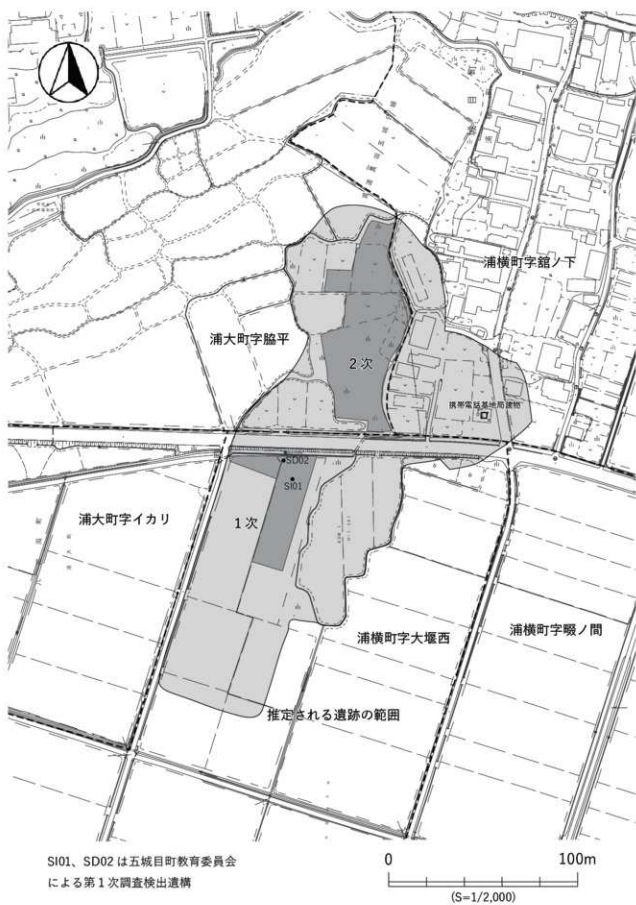
整理・報告書作成作業は、令和2年3月末で閉校となった町立八郎潟小学校の教室を埋蔵文化財整理室として利用した。遺物の洗浄は、野外調査時の雨天日にも実施していたが、本格的に整理作業として開始したのは、令和4年10月17日からである。遺物洗浄は12月7日で終了し、以降は遺物、主に石器類の選別・分類と集計・計量を実施した。石器類については接合・復元を行った。次いで報告書掲載遺物の抽出と集計データの入力も並行させた。

遺構の平面・断面図等は、イラストレーター 2023を利用してデジタルトレースを行った。また、出土遺物の図示は、その作業時間と経費面での効率化と共に従来手法の実測や拓本に比べて客観的な資料提示を考慮し、株式会社ラングに委託した“PEAKIT画像”を採用することにした。PEAKITは、ラングが考案した考古資料に特化した三次元データの表現方法であり、報告書に掲載した石器類・縄文土器の全点はPEAKIT画像である。PEAKIT画像の編集、イラストレーター等を利用した挿図・写真図版作成は令和5年11月末に、以降は報告書の文字原稿作成に終始し同年12月末で完了させた。

なお出土した遺物は、報告書掲載の有無、種別により分けた上でコンテナ198箱に収納し、遺物台帳を作成した。



第2図 館ノ下地内周辺の試掘・確認調査位置図



第3図 館ノ下遺跡の推定範囲と調査区

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

館ノ下遺跡が所在する南秋田郡八郎潟町は、秋田県の沿岸中央部、かつて琵琶湖に次ぐ国内第2の湖であった八郎潟の東岸城南側にある。海水と淡水が混じる汽水湖であった八郎潟は、国営干拓事業として昭和32年に着工、昭和39年には干陸となり大潟村の誕生、昭和44年事業完工、昭和52年の全事業終了という経緯をもつ。

八郎潟町は、昭和31年に一日市町<sup>ひといちまち</sup>と面潟村<sup>おもかたむら</sup>が合併して誕生し、町域の東から南側は五城目町、南西隅で井川町、西は八郎潟唯一の面影を残す東部承水路を挟んで大潟村、北側は山本郡三種町（旧琴丘町）とそれぞれ隣接する。その面積は17km<sup>2</sup>と県内25市町村では最小であり、南北・東西ともに一辺6km四方内に収まる。一方で人口密度は県内最大値（令和2年国勢調査、328.4人）を示している。町域の西側を南北に縦断するJR奥羽本線八郎潟駅を起点とすれば、遺跡は北東方向に約3.3kmの位置となる。

遺跡周辺の地形を東方の出羽山地側から俯瞰する。秋田市仁別と井川町境に位置する<sup>まいたやま</sup>俎山（722m）を主峰とする俎山山地、その北側に続く薬師山山地・赤倉山山地（五城目町）が当域内の出羽山地を構成する。南北方向の延長性をもつ山地の西側に接続して丘陵地、その西側に沖積低地、そして日本海に連なる八郎潟へと高度を下げていくが、丘陵地と沖積低地の境界域に森山（325m）と高岳山（221m）という二つの火山岩地であり残丘状の山地が認められる。

遺跡は森山と高岳山の中間、高岳山の南麓にあたる最低位の砂礫段丘（段丘GtIII）先端部に立地する。標高は7m前後である。

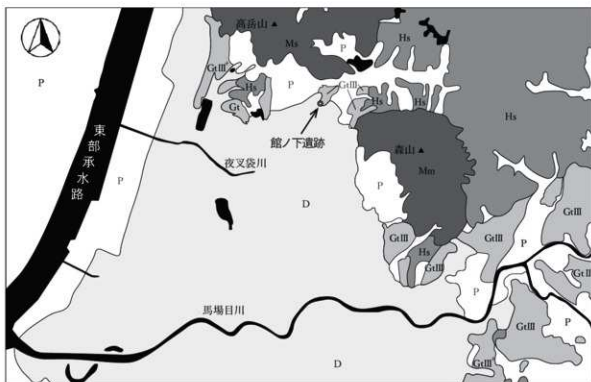
表層地質的には、段丘堆積物である砂および礫（tr）と湖東沖積低地（泥がち堆積物、ma）の境界域にあたる。また遺跡地の土壌は、段丘面の下部および広い緩傾斜地に出現する適潤性の土壌、褐色森林土壌（Ma-3b、俎山3統b）である。

本遺跡の範囲は、五城目町教育委員会および八郎潟町教育委員会が実施した試掘・確認調査および周辺域の踏査・遺物散布状況により、南北約280m、東西約140m、面積約22,000m<sup>2</sup>と推定される。（第3図参照）。

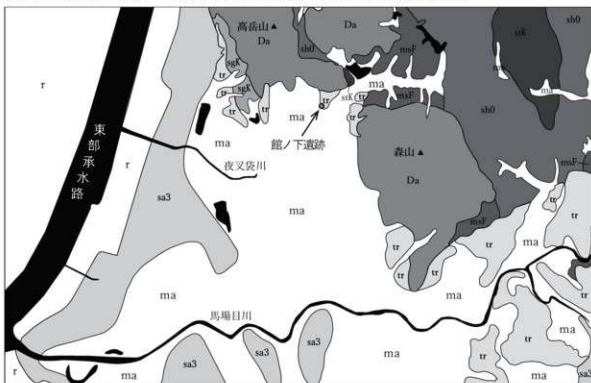


右奥が森山、左手が高岳山に連なる浦城跡 [220929撮影、西→]





地形分類図 Mm：中起伏山地（起伏量400～200m）、Ms：小起伏山地（起伏量200m未満）、Hs：丘陵地Ⅱ（起伏量100m未満）、Gt：砂礫段丘（中位GtⅡ、低位GtⅢ、最低位GtⅢ）、D：三角州および湖岸平野、P：谷底平野（扇状地・自然堤防および砂堆の低地、干拓地・人工改変地を含む）



表層地質図

未固結堆積物=r：泥・砂および礫、sa3：砂がち堆積物3、ma：泥がち堆積物、tr：砂および礫、stK：砂礫層（含泥炭層、潟西層）、固結堆積物=msF：泥岩（船川層）、sh0：珪質頁岩（女川層）、stK：礫岩・砂岩・頁岩および凝灰岩（小谷沢層）、火山性岩石および深成岩=Da：石英安山岩

0 2km  
(S=1/50,000)

上図は、秋田湾大規模工業開発地域「土地分類基本調査五域目」（秋田県1973）所収の「地形分類図」と「表層地質図」を一部改変後にトレースしたものである。

第4図 遺跡周辺の地形分類・表層地質図

## 第2節 歴史的環境

館ノ下遺跡周辺の歴史的環境について、第5図内に所在する遺跡を中心として紹介する。なお、遺跡名次の《 》内数字は、第5図の遺跡番号に対応する。

【旧石器時代】 当該期の遺跡は図幅中には存在せず、最も近くでは館ノ下遺跡から北約4.8kmにある堂の下遺跡（三種町鹿渡、秋田自動車道八郎潟SA周辺）でナイフ形石器や石刃が出土している。

【縄文時代】 町城の北西部にあたる真坂地区の沢田遺跡が知られる（現在は沢田Ⅰ遺跡《19》として登録）。明治時代から石器類の出土が知られ、秋田の郷土研究の先駆けとされる真崎勇助〔1841～1917〕が著した『雲根録』には、明治8年〔1875〕11月の記録として「秋田郡真坂村八幡林ノ辺り」から「畑ニ矢ノ根石イト多クアリ」とある。八幡林あるいは八幡台は、沢田地区一帯の通称とされる。同著所収で明治19年〔1886〕の「秋田縣鐵石産地一覽表」には、真坂村「八幡林ノ辺」から鐵石（石炭）44点の記載がある。また、昭和31年には秋田大学歴史研究室と八郎潟町教育委員会により、「秋田県中央部に於ける縄文中期文化の編年の研究」を目的とした沢田遺跡の学術調査が実施された。その結果、縄文前期末から中期末にかけての土器群が出土し、米代川流域以北に分布の中心をおく円筒上層式土器と秋田平野以南に分布の中心をもつ大木式土器が共存する形で確認された。次いで、昭和47年には八郎潟干拓地における宅地造成に供する土砂採取に係る緊急調査が、秋田県教育委員会と八郎潟町教育委員会により実施された。その結果、縄文時代中期の竪穴住居跡2軒等が検出された。出土遺物には北陸の影響を受けた土器や土偶も認められた。さらに発掘資料ではないが、鉢形土器（秋田県指定有形文化財、考古資料）や、翡翠製大珠（秋田県立博物館所蔵）などの遺物もある。現在も耕作などで沢田遺跡及びその周辺から発見される遺物が、近くにある八郎潟町地域史料館に持ち込まれ保管されている。

沢田遺跡の南側に位置する塞ノ神遺跡（現在は塞ノ神Ⅱ遺跡《22》として登録）は、平成12年に「塞ノ神農村公園」整備に伴う範囲確認調査が実施され、明確な縄文時代の遺構は確認できなかったが、沢田遺跡同様に中期の土器片が出土した。



白ケロV遺跡で確認された噴砂痕跡〔200831撮影、南東→〕

館ノ下遺跡と同様に高岳地区では場整備事業に先だって発掘調査が行われた白ケロV遺跡《6》は、縄文時代の石器・剥片が多数出土した。ただ、それら遺物の多くは調査区外の丘陵地から洪水等により二次的に移動させられた特異な出土状況を示している。

町城の南東部、小池地区及び五城目町岡本に所在する下台遺跡《31》は、弘前大学人文社会学部による「八郎湯沿岸の縄文時代晩期末の様相解明」を目的とする発掘調査が平成25年に実施された。その結果、縄文時代晩期末の竪穴住居跡6軒等が検出され、東北では数少ない当該期の集落跡が確認された。

また詳細は不明だが、町城北西隅にあたる真坂字三倉鼻の「オドド洞窟」(夫殿洞窟)には貝塚があったことが昭和37年刊行の「秋田県史」(第1巻 古代・中世編)に記録されている。

**【弥生時代】** 五城目町野田の北遺跡《27》から後期の甕形土器片が出土している。また、令和3年に五城目町教育委員会が調査を行った館ノ下遺跡《1》では、遺構外から弥生土器が8点出土し、うち3点が図示されている。時期は弥生時代中期の前葉～中葉のようである。

**【古代】** 奈良時代以降に遺跡数は急増する。町城南東部川崎地区の貝保遺跡《30》、隣接する開防遺跡《29》と細越館遺跡《32》、馬場目川南岸には石崎遺跡《36》と中谷地遺跡《37》が所在する。貝保・開防遺跡は鍛冶関連の集落跡、細越館遺跡は須恵器窯跡と土師器焼成の窯跡が認められる。石崎遺跡は、用水路中に露出していた径80cmの丸柱の発見を契機として、昭和42年から48年にかけて3次の発掘調査が実施された。その結果、柵列や築地土塼とされる遺構が検出され、同遺跡の調査成果を再検証した村上義直氏によれば、「秋田郡衙の可能性が高い」とする。石崎遺跡の東側に隣接する中谷地遺跡は、秋田自動車道建設に伴い平成11年に発掘調査が行われた。その結果、蛇行する小河川を利用した区画内に掘立柱建物跡等が検出され、河川跡からは大量の土器類とともに木製祭祀具も出土した。祭祀遺物と石崎遺跡との関係から、官衛的性格の強い祭祀遺跡と位置付けられる。

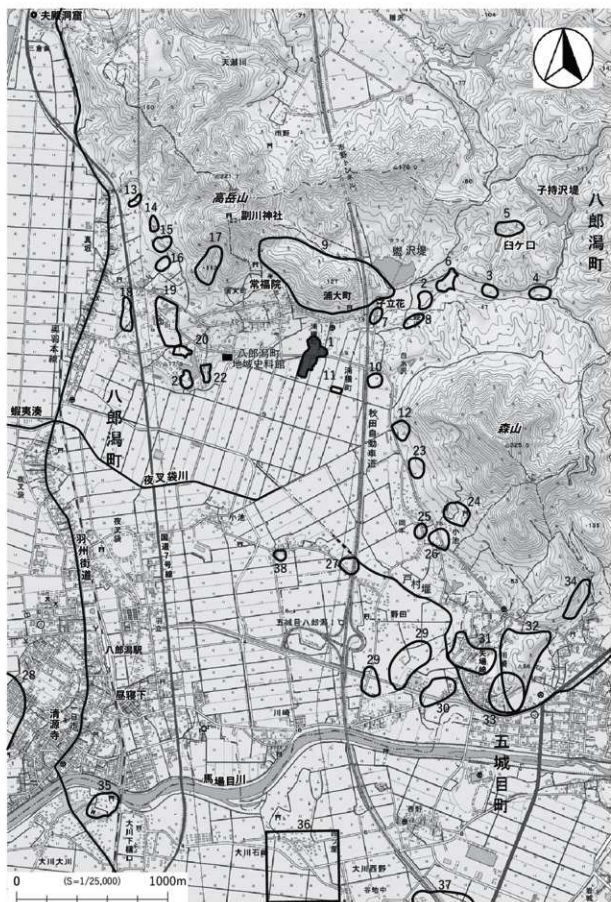
一方、町城北側の真坂・浦大町地区では製鉄・鍛冶に関する資料が見いだされている。先に紹介した沢田遺跡からは鉄滓が採取され、塞ノ神遺跡の範囲確認調査において、検出された竪穴状遺構内からフイゴの羽口や土師器が出土している。館ノ下遺跡が位置する高岳山南麓には鉄滓が多く見つかる鉄深沢があったとの記述が、昭和11年に発行された『面湯村郷土史』にある。

また、古代との明確な根拠は示せないが、八郎湯に注ぐ夜叉袋川の河口にあたる「蝦夷湊」は、かつて馬場目川の河口であったとされ、阿倍比羅夫東征時の上陸地との伝説とともに語られている。

**【中世】** 城館跡として浦大町・真坂地区の浦城跡《9》と石塚Ⅲ遺跡《17》、森山南西麓の岡本城跡《24》、馬場目川河口付近の押切城跡《28》、大川城跡《35》が知られる。浦城跡は、高岳山東方の丘陵尾根部を利用し、東西方向に複数の郭面とそれぞれに帯郭が巡る山城である。その西限には深さ約9mの



左奥が高岳山、中央が浦城跡、遺跡は浦城跡の麓に位置する〔200822撮影、南西→〕



第5図 館ノ下遺跡と周辺の主な遺跡

第1表 館/下遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡地図番号	遺跡名	住所	種別	時期	遺構・遺物等	文献番号
1	361-25-58 363-27-57	館ノ下	五城目町浦横町字館ノ下、 大塚西 八郎潟町浦大町字脇平	集落跡・ 石器製作 跡・散布地	縄文/弥生/ 古代/中世/ 近世	縄文土器(早期・前期・中期)、石器剥片/ 弥生土器/土師器・須恵器/陶磁器(白磁・ 青磁・須恵器系陶器など)/近世陶磁器	28 本書
2	363-27-50	白ヶ口Ⅰ	八郎潟町浦大町字白ヶ口	散布地	縄文	縄文土器(後期)、石器剥片	29
3	363-27-51	白ヶ口Ⅱ	八郎潟町浦大町字白ヶ口	散布地	縄文	石器剥片	
4	363-27-52	白ヶ口Ⅲ	八郎潟町浦大町字白ヶ口	散布地	縄文	縄文土器(後期)、石器剥片	
5	363-27-53	白ヶ口Ⅳ	八郎潟町浦大町字白ヶ口	散布地	縄文	石器剥片	27
6	363-27-56	白ヶ口Ⅴ	八郎潟町浦大町字白ヶ口	散布地	縄文/古代/ 中世/近世	縄文土器(中期・後期・晩期)、石器 剥片/土師器・須恵器・鉄滓・伊賀/ 青磁・須恵器系陶器/近世陶磁器	29
7	361-25-49	小立花	五城目町浦大町字小立花	散布地	縄文/中世	石器剥片/陶磁器、須恵器系陶器	14
8	361-25-54	鏡ノ沢	五城目町浦大町字鏡ノ沢	散布地	縄文	石器剥片	27
9	363-27-24 361-25-59	浦城	八郎潟町浦大町字里ヶ久 五城目町浦横町字館ノ下	館跡	中世	空堀、郭、青磁、黄瀬戸、越前系陶器	12・26
10	361-25-50	山際道ノ下	五城目町浦横町字山際道ノ下	散布地	縄文/古代/中世	石器類/土師器/須恵器系陶器	14
11	361-25-62	蝦ノ間	五城目町浦横町字蝦ノ間	散布地	縄文	石器剥片	27
12	361-25-5	東谷寺	五城目町小池字森山下	寺院跡	中世か	石造物	11・12
13	363-27-1	大沢Ⅰ	八郎潟町真坂字大沢	散布地	縄文	縄文土器、石器剥片	27
14	363-27-2	大沢Ⅱ	八郎潟町真坂字大沢	散布地	縄文	石器剥片	27
15	363-27-3	石塚Ⅰ	八郎潟町真坂字石塚	散布地	縄文	縄文土器、石器剥片	27
16	363-27-6	石塚Ⅱ	八郎潟町真坂字石塚	散布地	縄文	縄文土器、石器剥片	27
17	363-27-49	石塚Ⅲ	八郎潟町真坂字石塚	館跡	中世	空堀、帯郭	13
18	363-27-10	沢田Ⅰ	八郎潟町真坂字沢田	散布地	縄文	石器剥片	27
19	363-27-9	沢田Ⅱ	八郎潟町真坂字沢田	散布地	縄文/古代	堅穴住居跡、縄文土器、石器、土偶/鉄滓	6・9
20	363-27-16	鳥谷崎	八郎潟町浦大町字鳥谷崎	散布地	縄文	石器剥片	2
21	363-27-17	塞ノ神Ⅰ	八郎潟町浦大町字塞ノ神	散布地	縄文	石器剥片	27
22	363-27-18	塞ノ神Ⅱ	八郎潟町浦大町字塞ノ神	散布地	縄文/古代	縄文土器、石器剥片/鉄滓、羽口	15
23	361-25-55	森山下	五城目町小池字森山下	散布地	縄文	土器	27
24	361-25-7	岡本城	五城目町小池字森山下	館跡	中世	空堀	11・13
25	361-25-56	家ノ下	五城目町小池岡本字家ノ下	散布地	縄文	石器剥片	27
26	361-25-9	岡本	五城目町小池字森山下	散布地	縄文	堅穴住居跡、縄文土器(後・晩期)、土偶、石器	11・13
27	361-25-51	北	五城目町野田字北	散布地	縄文/弥生/ 古代/中世	縄文土器(後・晩期)/弥生土器(後期)/ 土師器、須恵器/井戸跡、須恵器系陶器	16
28	363-27-44	押切城	八郎潟町字中嶋	館跡	中世	堀、板跡(貞和5年(1349)銘)	12・13
29	361-25-53	開防	五城目町小池字開防	集落跡・生跡	古代/中世	堅穴住居跡、掘立柱建物跡、鍛冶炉/井戸跡	19・20
30	363-27-54	貝保	八郎潟町川崎字貝保	集落跡	古代	掘立柱建物跡、鍛冶炉、大溝	20・23
31	363-27-55 361-25-10	下台	八郎潟町小池字岡本下台 五城目町岡本下台	集落跡	縄文/中世	堅穴住居跡、縄文土器(晩期末)、 土偶、石器/青磁	25
32	361-25-12	細越館	五城目町小池字岡本下台	窯跡・館跡	古代/中世	須恵器窯跡、土師器窯跡/郭面、空堀	11・19
33	361-25-11	細越	五城目町七倉	散布地	縄文	縄文土器(晩期)	27
34	361-25-13	神明前	五城目町字神明前	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)	27
35	361-25-2	大川城	五城目町大川字東屋布	館跡	中世	板碑	11
36	361-25-3	石崎	五城目町大川下樋口字道ノ下	城柵跡	古代	柵列、柱脚、土師器、須恵器、鉄製品、 木製品	10・24
37	361-25-52	中谷地	五城目町大川谷地中谷地	集落跡	古代	掘立柱建物跡、板材列、土師器、 須恵器、木製祭祀具、漆絵文書	17
38	363-27-41	萱戸家群碑	八郎潟町小池字萱戸家	板碑	中世	板碑	18

空堀が位置する。築城時期に関する時期は不明ながら、天正16年〔1584〕頃に安東氏に攻め込まれたことで落城したとされる。遺跡は現在「NPO法人 浦城の歴史を伝える会」による管理と手作りの整備が進められている。発掘調査の履歴はないが、採集された遺物は八郎潟町地域史料館に収蔵・展示されている。

集落跡では、先に紹介の北遺跡〔27〕がある。馬場目川の旧流路によって形成された自然堤防の一角に占地する遺跡は、秋田自動車道建設に伴い平成11年に発掘調査が実施され、主たる時期を13世紀代とする井戸跡15基等が検出された。出土遺物には、中国産の青磁や白磁、国産の須恵器系陶器や古瀬戸碗がある。

また、八郎潟町の中世を語る上で欠くことができない資料として、板碑を初めとした石造物が挙げられる。萱戸家碑群〔38〕は、小池板碑群として古くから知られ、文化6年〔1809〕に現地に足を運んだ菅江真澄〔1754～1829〕は、日記『夷舎奴安装碑』（ひなの遊び）に「関佛庵（石佛庵）の周囲に環状に配置された石碑群の図繪と、その説明に「田の中をうかちて古碑を百あまり掘得たり」と記している。萱戸家碑群（小池板碑群）には現在、板碑を含む石碑が72基存在する。板碑には紀年銘が刻まれているものもあり、いずれも南北朝時代〔1336～1392〕北朝側の元号が認められる。なお、板碑群の保護施設（建屋）が平成30年11月に完成し、内部には板碑56基が納められている。

小池板碑群以外にも、町内には多くの中世石造物が分布する。遺跡登録分として、小池地区の中島で板碑5基、真坂・浦大町地区で板碑8基・五輪塔2基・宝篋印塔2基、夜叉袋地区で板碑10基、一日市・川崎地区で板碑5基がある。

保護施設内の小池板碑群  
〔210330撮影〕

【近世】館ノ下遺跡が位置する浦大町（八郎潟町）と浦横町（五城目町）は、戦国期から近世にかけて小立花村に属していた。同村は、慶長6年〔1601〕の『秋田実季侍分限（秋田家文書）』に、「卅八石六斗八升四合 湖東通 小立花村」として初出する。近藤甫寛



〔1735～1809〕が寛政12年〔1800〕に久保田藩庁に献上した『領中六郡紀行』（後に『久保田領郡邑記』として周知）の「小立花村」には、「・高八五石七斗五升・免六ッ・家居七戸・人三八口・馬五頭」とあり、宝永7年〔1710〕「浦大町付加村」との記述もある。

小立花村は明治9年〔1876〕に浦大町村に合併となり、明治11年〔1878〕の郡区町村編制法で浦大町村の小字として残ることとなった。明治22年〔1889〕の町村制施行に伴い、浦大町村は近隣6村と合併し面湯村の大字となった。昭和31年の八郎潟町誕生に伴い面湯村は消滅し、八郎潟町浦大町字小立花となる。しかし、その2年後に行われた旧面湯村地区の住民投票の結果、小立花は五城目町に編入され五城目町浦横町の小字となり、今回の調査区である八郎潟町浦大町字脇平とは行政区画が異なることとなった。

【参考・引用文献】第1表の文献番号と対応。

- 1 高岡尋常小学校1936『面湯村郷土史』
- 2 秋田県1960『秋田県史』考古編
- 3 秋田県1962『秋田県史』第1巻 古代・中世編
- 4 三浦鉄郎1964『雄物川及び馬場目川氾濫原の新田開発』『地理学評論』第37巻1号
- 5 奈良修介・豊島 昂1967『秋田県の考古学』吉川弘文館
- 6 岩見誠夫1968『南秋田郡八郎潟町沢田遺跡調査報告』『秋大史学』第16号
- 7 内田武志・宮本常一1973『夷舎奴安装婢』『菅江真澄全集』第4巻 未来社
- 8 秋田県1973『土地分類基本調査 五城目』
- 9 秋田県教育委員会1974『鹿角大規模農道遺跡分布調査報告書 沢田遺跡発掘調査報告書』
- 10 五城目町教育委員会1975『石崎遺跡発掘調査報告 第1～3回合報』
- 11 五城目町史編纂委員会1975『五城目町史』五城目町
- 12 八郎潟町1977『八郎潟町史』
- 13 秋田県教育委員会1981『秋田県の中世城館』
- 14 秋田県教育委員会2000『小立花遺跡』『山際道ノ下遺跡』『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第308集
- 15 八郎潟町教育委員会2001『塞ノ神遺跡範囲確認調査報告書』
- 16 秋田県教育委員会2001『北遺跡』秋田県文化財調査報告書第315集
- 17 秋田県教育委員会2001『中谷地遺跡』秋田県文化財調査報告書第316集
- 18 八郎潟町教育委員会2001『八郎潟町の石碑 板碑・五輪塔・宝印塔編』
- 19 五城目町教育委員会2002『開防遺跡』五城目町埋蔵文化財調査報告書第8集
- 20 秋田県教育委員会2003『開防遺跡・貝保遺跡』秋田県文化財調査報告書第361集
- 21 柴田次雄2004『校訂解題 久保田領郡邑記』無明舎出版
- 22 秋田県埋蔵文化財センター 2012『真崎勇助著『雲根録』全五巻翻刻』
- 23 秋田県教育委員会2015『貝保遺跡(第2次)』秋田県文化財調査報告書第499集
- 24 村上義直2015『最北の郡衙石崎遺跡について』『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第29号
- 25 上條信彦2017『八郎潟沿岸における縄文時代晩期末の研究—下台遺跡発掘調査報告書—』弘前大学人文社会学部北日本考古学研究センター
- 26 五十嵐祐介2017『浦城』『東北の名城を歩く 北東北編』吉川弘文館
- 27 秋田県教育庁文化財保護室『秋田県遺跡地図情報』<http://common3.pref.akita.lg.jp/heritage-map/>
- 28 五城目町教育委員会2022『館ノ下遺跡』
- 29 八郎潟町教育委員会2021『白ケ口V遺跡』

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

発掘調査は重機による表土除去から開始した。表土層（第Ⅰ層、層厚20cm前後）は新たな水田の耕作土とするために、調査区外の特定箇所を集めることにした。第Ⅱ層以下については遺物の散布状況や遺構の有無に注意を払いつつ、重機による除去を行った。その詳細は、第1章第3節の記載を参照されたい。

遺構・遺物の出土地点等の記録作成にあたり、グリッドを設定して実施した。方眼杭打設を含むその設定業務は、株式会社さくら技研（秋田市）に委託した。グリッド設定は、まず世界測地系平面直角座標第X系に整合する調査区内の任意の1点を水平・垂直方向の原点（LK75）とした。原点を通る座標北方向をLKライン、これに直交する東西方向を75ラインとする基準線を定め、ここから南北・東西方向に4m間隔で基準線を引き、北に進むごとに76・77・78…、南へは74・73・72…のアラビア数字を、西に進むごとにLL・LM・LN…、東へはLJ・LI・LH…の二文字のアルファベットを付した。4m×4mの各グリッドは、その南東隅の交点をもって、例えば「LK75グリッド」とした。

原点としたLK75のX座標は-3500.000、Y座標は-63110.000、標高7.547mである。

遺構等の検出作業にはジョレンや移植ゴテを利用して人力で進めた。なお、調査区中央北側部分、標高7.2mより下位に相当する箇所（第7図の網掛け範囲、基本土層第Ⅳ層相当箇所）は、調査後に施行される工事において掘削を免れる深度となることから、精査を回避している。このことから当該地は、地下に遺物等が埋蔵された状態で保存されている。

検出した遺構には、遺構種別を表すアルファベットと検出順を示す通し番号を組み合わせて、「SK11」のように呼称した（凡例参照）。なお、数字は第1次調査で一桁台（S101、SD02）を使用していることから、第2次調査では二桁台とした。その精査は確認・検出状況、土層断面、完掘状況等の段階を経て、各段階の写真撮影と図化を行った。

写真撮影は、デジタル一眼レフカメラを使用した。遺構平面図の作成はトータルステーションによる測量、オルソ画像のデジタルトレースを用い、縮尺は1/20あるいは1/10とした。土層断面図も1/20あるいは1/10の縮尺で作成した。また遺物も、原則として全点を対象に出土地点の記録をトータルステーションを利用する予定で進めていたが、当初想定より遺物量が多く、一部ではグリッド上げしたものもある。

整理等作業については、第1章第4節を参照されたい。



## 第2節 基本層序

本遺跡の基本層序は、調査区の東辺中央北側L E75グリッド(A地点)と西辺中央北側LM74グリッド(B地点)での土層観察をもとに表示する。

第I層 ぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質土。表土、水田・畑の耕作土、層厚15～25cm。

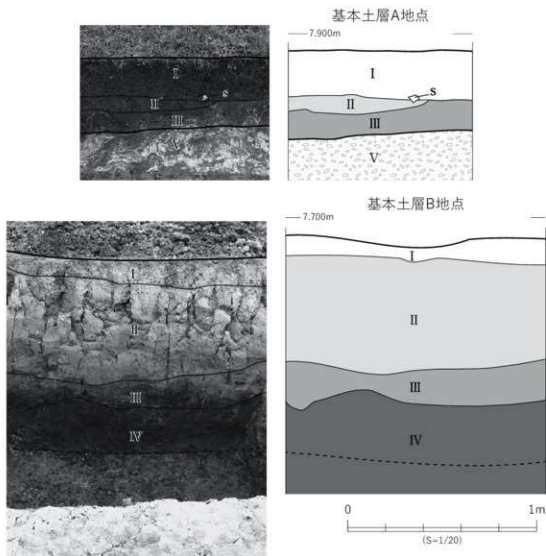
第II層 暗褐色(10YR3/3)シルト質土。旧水田造成土か、層厚10～60cm。

第III層 黒褐色(10YR2/3)シルト質土。遺物包含層、層厚15～25cm。

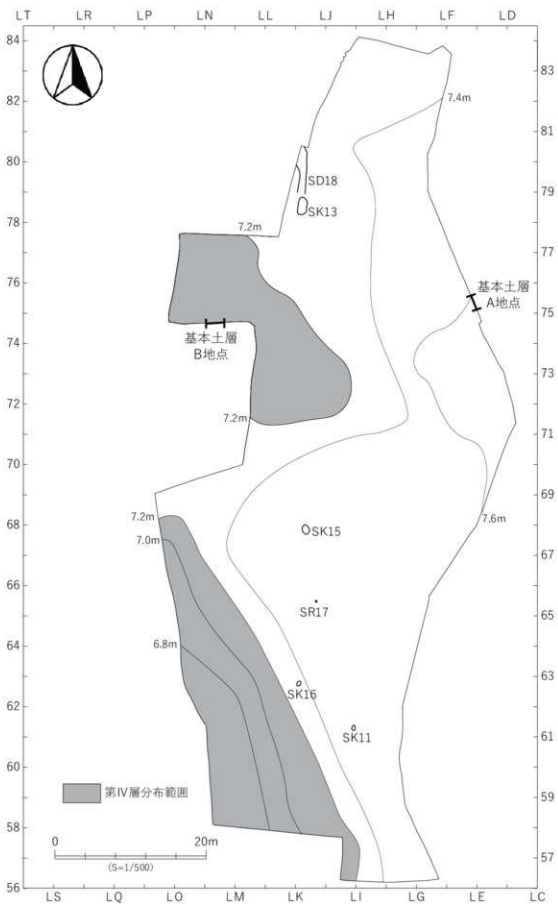
第IV層 黒褐色～黒色(10YR3/1～2/1)シルト質土。遺物包含層、層厚30～60cm。

第V層 明緑灰(7.5GY7/1)粘質土。地山、グライ化が進んだ地山粘土層。

78ライン以北は、旧水田造成に伴う削平の影響か、第I層下が第V層の地山となる。第IV層は調査区の南西部と基本土層B地点のある調査区中央北西側の2カ所でのみ観察された(第7図網掛け範囲)。



第6図 基本土層図



第7図 グリッド配置および遺構配置図

### 第3節 遺構と遺物

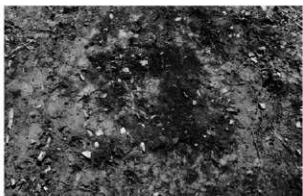
#### 1 検出遺構（第7図、第8～11図）

検出された遺構は、土坑4基（SK11・13・15・16）、土器埋設遺構1基（SR17）、溝跡1条（SD18）の計6遺構である。各遺構の構築時期は、出土遺物や堆積土の観察から溝跡を除き縄文時代と判断した。溝跡は近代以降となる水田に伴う水路跡の可能性が高い。

#### SK11土坑（第8図）

調査区南部、L I 61グリッドの第III層下位で検出された。南北方向の長さ68cm、幅45cmの不整形円状を呈し、確認面からの深さは15～20cmである。

土坑内から62点（重量506g）の遺物が出土した。うち、縄文土器（小片）は32点（重量379g）、



石器類は30点（重量127g）であった。石器類のうち、8-1は削器であり、他は二次加工ある剥片2点、微細剝離痕ある剥片1点、剥片15点、碎片11点であった。剥片のうち2点は玉髄質頁岩、残りは碎片を含め珪質頁岩である。

SK11遺構確認時の状況〔220614撮影、北東→〕  
遺構周辺からも多くの遺物（主に剥片）が出土

#### SK13土坑（第9・10図）

調査区北西部、L J 78グリッドの第V層上面で検出された。南北方向の長さ230cm、幅120cmの隅丸長方形を呈し、確認面からの深さは最深で25cmである。

土坑内から縄文土器片と石器類が76点（重量448g）出土した。縄文土器は小片で摩耗が著しく図示できなかった。石器類では、10-1が石鏃、10-2が石筥、10-3～10-5が石匙（縦長タイプ）、



10-6・10-7が削器、10-8は石核（D3類）である。その他には石核1点（A2c類）、二次加工ある剥片3点、微細剝離痕ある剥片1点、剥片48点、碎片10点がある。剥片のうち5点は被熱を受けている。石材は10-2が玉髄質頁岩、他は珪質頁岩である。石核の分類基準は、次項の遺構外出土遺物：石核を参照のこと。

SK13遺構確認時の状況〔220913撮影、西→〕

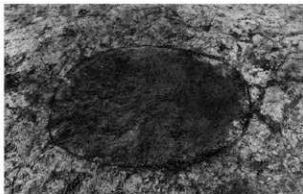
#### SK15土坑（第8図）

調査区中央南側、L J 67グリッドの第III層下位で検出された。長軸は北西-南東を指す隅丸方形

状であり、長さ110cm、幅95cm、確認面からの深さは30cmである。

土坑内から縄文土器片7点(68g)と石器類が5点(重量353g)出土した。8-2は石核、S K 13出土の10-8と同じくD 3類となる。

#### S K 16土坑(第9図)



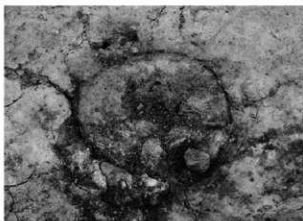
調査区南側、L J 62グリッドの第Ⅲ層下位で検出された。長軸が北東-南西を指す楕円形状であり、長さ70cm、幅50cm、確認面からの深さは10cmである。

土坑内からの出土遺物はない。

S K 16遺構確認時の状況 [221006撮影、南東→]

#### S R 17土器埋設遺構(第11図)

調査区中央南側、L J 65グリッドの第V層上面で検出された。径18cmの土器とその外周には土器を埋設するために掘り込まれた径25cmの円形プランが明確に確認できた。土器内部や裏込め土は、



地山粘土を主とする土(第1層)で充填され、焼土や炭化物は含まれていなかった。

土器を取り上げたところ、その高さはわずか4cmであり、土器の埋設状況(正位か倒位か)は不明ながら、円筒状の深鉢形土器を胴部で切断した個体を埋設していたことになる。取り上げた遺物は小片化し、全体に摩耗が著しく施文や器面の調整など確認できなかった。

S R 17遺構確認時の状況 [221003撮影、南西→]

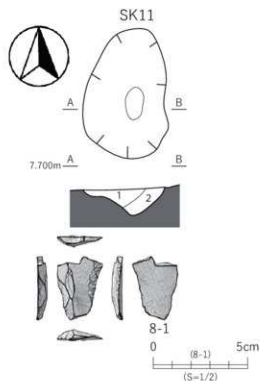
#### S D 18溝跡(第11図)

調査区北西部、L J 79・80グリッドの第V層上面で検出された。S K 13土坑の北側に隣接するも

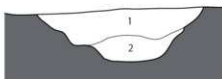
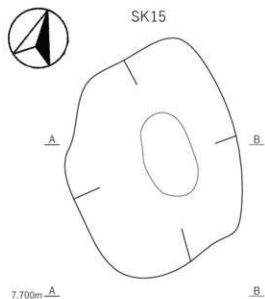


重複関係はない。南北方向の長さ6m、幅は1.0~1.2m、確認面からの深さは0.3mである。溝の東辺に沿って自然木4本が打ち込まれている。遺物の出土はない。

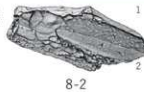
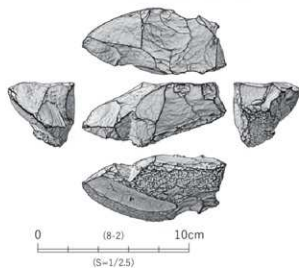
S D 18発掘時の状況 [220916撮影、南→]



- 1 黒褐色土(10YR3/2)  
しまりややあり、粘性ややあり。  
φ0.2~0.5cm大の地山ブロック80~90%含む。  
φ0.5~1cm大の炭化物30~40%含む
- 2 暗褐色シルト土(10YR3/3)  
しまり強い、粘性強い。  
φ1cm大の地山ブロック10~30%含む。  
φ1cm大の炭化物5%含む



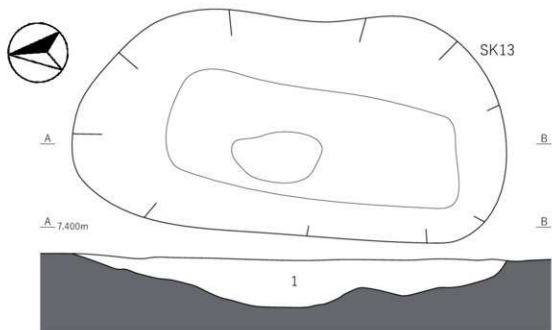
- 1 にぶい黄褐色土(10YR4/3)  
しまり強い、粘性ややあり。  
φ0.5cm大の地山ブロック60~70%含む。  
φ0.5cm大の炭化物10%含む
- 2 にぶい黄褐色土(10YR4/3)  
しまり強い、粘性ややあり。  
φ0.5cm大の地山ブロック20%含む。  
明黄褐色粘土(10YR6/6)が混じる



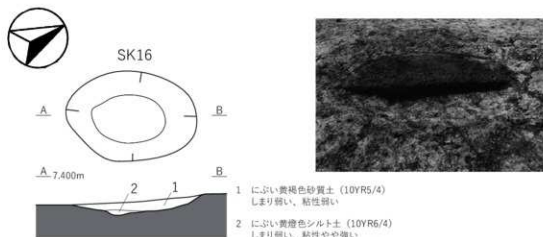
8-2



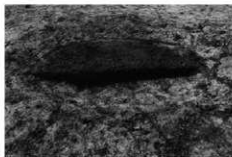
第8図 検出遺構 SK11・15土坑と出土遺物



1 黒褐色土(10YR3/2)しまり強い、粘性やや強い、 $\phi$ 0.5~1cm大の地山ブロック大量に含む、縄文土器破片、頁岩の剥片を層全体に含む

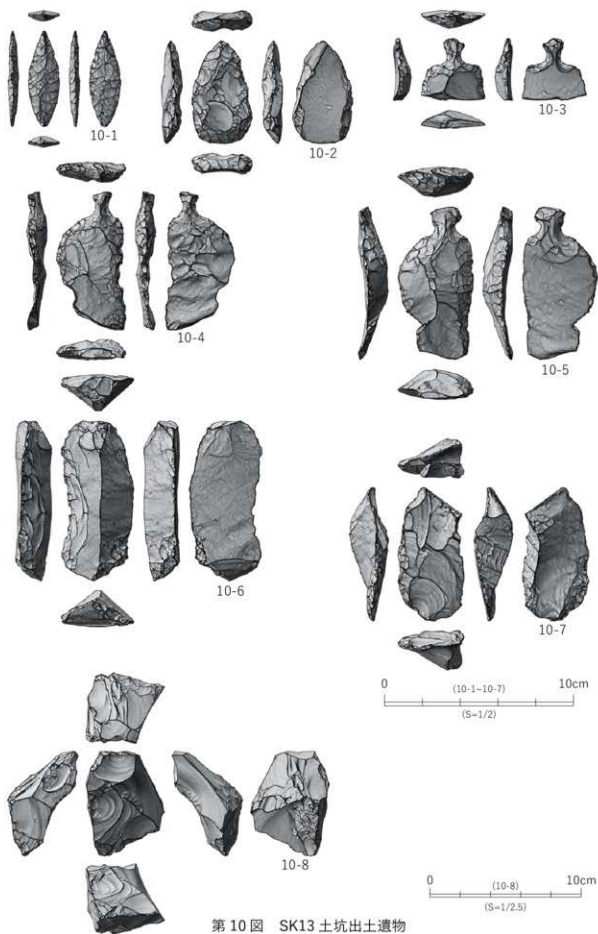


- 1 にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)  
しまり弱い、粘性弱い
- 2 にぶい黄褐色シルト土 (10YR6/4)  
しまり強い、粘性やや強い

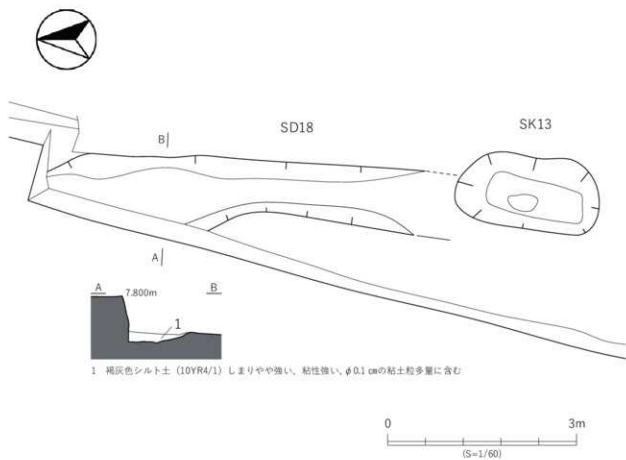
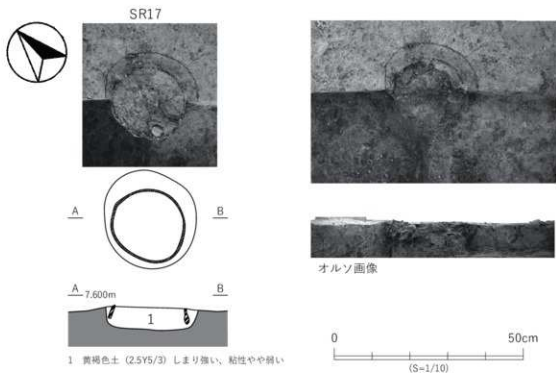


0 1m  
(S=1/20)

第9図 検出遺構 SK13・16土坑



第10図 SK13土坑出土遺物



第 11 図 検出遺構 SR17 土器埋設遺構、SD18 溝跡



## 2 遺構外出土遺物

本遺跡から出土した遺物は、遺構内、試掘調査、および表採分を含め下記のとおりである。

種 別	点数	重量 (g)
石鏝・石鏝未成品	193	583
石槍・石槍未成品	216	9,720
石鏡・石鏡未成品	324	15,586
石匙・石匙未成品	462	7,352
削 器	1,734	61,123
搔 器	197	6,645
石錘・石錘未成品	45	843
ノ ッ チ	173	6,623
両面調整石器	2	643
楔 形 石 器	7	164
その他の剥片石器	9	426
二次加工ある剥片	1,256	36,916
微細剥離痕ある剥片	840	22,738
剥 片 ・ 砕 片	47,341	694,266
石 核	913	120,228
分 割 礫	130	22,167
磨 製 石 斧	47	4,139
石 錘	776	113,234
半円状扁平打製石器	99	42,740
敲 石	84	13,159
凹 石 ・ 砥 石	9	2,239
その他の礫石器	18	21,546
石製品 (塊状耳飾)	1	4
合 計	54,878	1,203,083

種 別	器 種	点数	重量 (g)
縄文土器	深鉢・鉢類	2,200	61,097
須 恵 器	坏	243	3,321
	甕・壺・横瓶	745	25,683
土 師 器	坏	750	10,343
	甕・羽釜	235	6,056
中国産磁器	白磁・青磁	5	42
須恵器系陶器	摺鉢・甕	8	517
瓷器系陶器	摺鉢・甕・壺	7	460
近世陶器	摺鉢・碗類	45	1,126
近世磁器	碗・皿・瓶類	50	622
土製品	土 錘	5	162
合 計		4,293	109,429

種 別	器 種	点数	重量 (g)
金 属 製 品	鉄・銅製品	2	31
	銭貨	7	20
鉄生産関係	鉄滓など	45	2,056
自然遺物	馬歯	7	183
合 計		61	2,290

総 計	点数	重量 (g)
	59,231	1,314,802

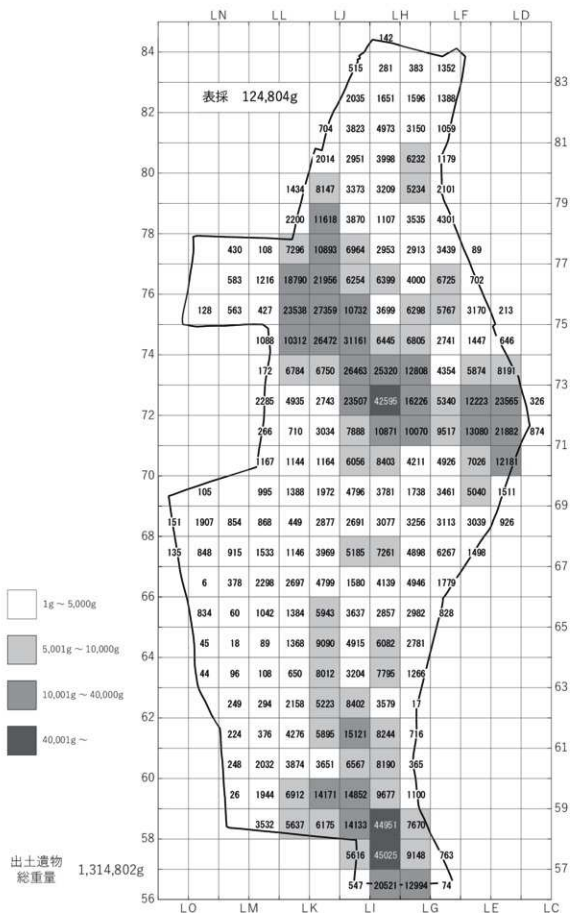
出土した遺物は、第12図に示したように調査区全域に及んでいる。それでも調査区中央からやや北側（主に70～80ライン）と中央南側から南端部（主に65ライン以南）の2ヶ所に集中する傾向が読み取れる。遺物の出土層位は第1層から第IV層に及び、明確な線引きはできなかったが、第1層から第III層中までは縄文時代の土器・石器類と古代以降の遺物が混在し、第III層中位以下は縄文時代の土器・石器類のみで占められる。

下写真は調査区中央北側、L J 75グリッド、第III層上面における遺物出土状況である。①は石錘、②は半円状扁平打製石器（中央の②、第100図3）、その周辺には主に縄文時代の剥片が散在する。



その一方で、③は須恵器台付坏、④は須恵器横瓶、⑤は須恵器甕片であり、両者が同一面上で混在している様子が観察された。

L J 75グリッド、第III層上面  
における遺物出土状況  
[220712撮影、西→]



第 12 図 遺物出土分布図 (1) 出土遺物全体重量

#### (1) 縄文時代の石器類 (第13図～第103図、第2表)

出土した石器類は、試掘調査及び表採分を含め54,878点、重量にして1,203,087g (約1,200kg) である。遺物総点数のうち石器類は、全体の93% (54,878点/59,231点×100≒92.6) を占める。また、礫石器類 (磨製石斧、石錘、半円状扁平打製石器、敲石、凹石、砥石等) を除いた石器群総数53,843点に対する剥片石器数3,361点の割合、すなわち剥片石器製品の保有率は6.2% (3,361点/53,843点×100≒6.24) である。

石器石材については、剥片・砕片を含む剥片石器類53,843点のうち、鉄石英13点、黒曜石31点、玉髄質頁岩650点であり、他は全て珪質頁岩である。また、剥片石器類が被熱を受けたと観察されたのは2,474点である。

#### ①石鏃・石鏃未成品 (第14図、第24・25図、第89図1)

弓矢の先端に装着したと考えられる石器で、基本的に両面加工・原則として中軸線と左右対称形となる。138点出土し、うち遺構内 (S K 13 : 10-1) 1点を含む26点を図示した。また、石鏃未成品は55点を抽出し、20点を図示した。石材は石鏃24-16と未成品25-14の2点を含む4点が玉髄質頁岩、石鏃89-1と未成品25-2・25-4の計3点が黒曜石、残りは珪質頁岩であった。未成品を除く石鏃は、基部の形状から以下のように分類した。基部が欠損して分類不能はK類とした。

A類：凸基有茎鏃。整った二等辺三角形の底辺中央に茎が付く (24-1・2)。

B類：尖基・円基鏃。凸基形ではあるが、A類のように先端部と基部が明確に識別できないもの。基部が先端部同様に尖るもの (24-5など)、丸みをもつもの (24-3など) がある。

C類：平基無茎鏃。基部が平らとなる。両側縁と基部の交点が鋭角となるもの (24-12など)、隅丸状となるもの (24-9など) がある。

D類：凹基無茎鏃。基部に挟り込みが認められる。挟り込みが深いD1類 (24-24など)、浅いD2類 (24-17など)、基部両端が下方に突出するD3類 (24-19など) に細分可能である。

分類ごとの点数は、A類4点、B類23点、C類54点、D類40点 (D1類10点、D2類15点、D3類15点)、K類17点である。また、重量でみればK類を除く121点のうち、～1.9g : 56点、2.0～2.9g : 41点、3.0～3.9g : 15点、4.0～4.9g : 6点、5.0～5.9g : 2点、6.6g : 1点 (24-16) となる。

#### ②石槍・石槍未成品 (第15図、第26～34図)

槍先に装着された考えられる石器である。51点の出土、うち20点を図示した。また、石槍未成品は165点を抽出し、42点を図示した。石材は未成品の1点が玉髄質頁岩であり、残りは珪質頁岩を利用している。石槍は長さを基準として見れば、5cm未満の小型 (26-1など)、5cm～10cm未満の中型 (26-2など)、10cm以上の大型 (26-8など) に分けられる。27-1は先端部に、27-6は折面にそれぞれ再加工が認められる。未成品のうち、28-9は横長剥片を素材としている。

#### ③石篋・石篋未成品 (第16図、第35～46図)

平面形が短冊形・楕円形・撥形等を呈し下辺部が、いわゆる“へら”状を呈する石器である。128点の出土、うち遺構内 (S K 13 : 10-2) 1点を含む38点を図示した。また、石篋未成品は196点を抽

出し、38点を図示した。石材は玉髄質頁岩が8点(10-2、35-1、36-5、44-1など)、その他は珪質頁岩である。35-7は稜付石刃を素材とする。38-3は刃部を再生し、38-4は折面を刃部に再生している。39-6は加工は削器的であるが、撥形の平面形状を優先して石籠の部類とした。39-8は、刃部が未加工で素材剥片の縁辺が保持されており、トランシェ様石器として分類することも可能である。38-2は被熱を受けており、未成品の44-2は被熱後の加工と観察された。

#### ④石匙・石匙未成品(第17図、第47～52図)

両側縁から抉りを入れてつまみ部を作出する石器である。未成品21点を含め462点の出土、うち遺構内(S K 13:10-3～10-5)3点を含む48点を図示した。50-7、51-5、51-6、52-5などは未成品とみられる。石材は鉄石英1点(47-4)、黒曜石2点(48-7、51-2)、他は珪質頁岩である。

石器の中軸方向とつまみ位置から、縦型(A類:第47～50図)、横型(B類:第51図)、斜型(C類:第52図)に大別される。分類不能はK類とした。A類には下端部が尖るタイプ(A1類、47-1など)、丸みをもつタイプ(A2類、47-8など)がある。平坦なタイプ(A3類、48-6など)に細別可能である。分類別の点数は、A類が313点、B類が45点、C類が22点、K類61点である。分類可能な380点のうちA類は82%( $313 \div 380 \times 100 = 82.3$ )を占めている。

#### ⑤削器(第18図、第53～59図)

大小の剥片の側縁に連続的な二次加工により刃部を作出した石器である。1,734点の出土、うち遺構内(S K 13、10-6、10-7)2点を含む56点を図示した。石材は玉髄質頁岩が9点(53-6など)、その他は珪質頁岩である。石刃を素材として主に側縁側に裏面から急斜度な二次加工を施して刃部が作出される個体が目立つ(53-2など)。57-2・57-4は調整剥片を素材としている。58-1は欠損した石槍基部、58-3は石核をそれぞれ転用している。59-5も石槍未成品を転用しているようであり、被熱を受けている。59-1・59-2は横刃削器と称される個体である。53-7は被熱で欠損している。

#### ⑥搔器(第19図、第60～63図)

縦長～矩形剥片を素材として、剥片端部を中心に急角度の二次加工により刃部が作出した石器である。刃部は直線状～弧状を呈する。197点出土、うち31点を図示した。石材は2点が玉髄質頁岩、残りは珪質頁岩である。61-8は石核を転用している。

#### ⑦石錐(第64・65図)

いわゆる穿孔に使用された石器、ドリルである。未成品を含め45点出土、19点を図示した。65-4・6-8は未成品とみられる。石材は玉髄質頁岩が1点(64-8)、他は珪質頁岩である。錐部とつまみ部が明確に区別される団扇形・銀杏形(64-7・10など)のものが多く、両者が一体化した紡錘状(64-1)の個体も少数存在する。65-7は石刃端部に錐部を作出している。

#### ⑧ノッチ(第66図)

削器の一種であるが、二次加工により抉りが作出されるものをノッチとした。173点出土し、6点

を図示した。石材は1点が玉髄質頁岩、他は珪質頁岩である。

#### ⑨両面調整石器 (第67図)

両面調整により全体の成形および刃部の作出が行われているが、他の定型的石器に分類できなかったものを両面調整石器として類別した。2点を抽出図示した。石質は全て珪質頁岩である。

#### ⑩その他の剥片石器 (第68・89図)

上記以外の剥片石器には、幾分特殊なものとして、異形石器 (68-2)、嘴状石器 (68-3)、楔形石器 7点 (黒曜石 3点: 68-4、89-4・5、珪質頁岩 4点)、両極敲打痕を残す敲石 (68-5)、槌状剝離を有する削器 (68-6)、三脚石器 (68-7、鉄石英)、三角錐形石器 (68-8)、打製石斧 (68-9) がある。68-2は器体中央に抉入部をもち抉入尖頭器 (田中1995) の範疇に入れることも可能であるが、長軸が10cmに満たないことからここでは異形石器とする。嘴状石器は、横手市八木遺跡 (秋田県教委 1989) でまとまって出土したものである。それらに比べて加工は顕著ではないが、弧状の先端部を意図的に作出していることから本器種に分類しておく。楔形石器は黒曜石製と珪質頁岩製が認められる。いずれも小形の円礫を中心として両極打法が行使されている。素材剥片の剝離を意図したものか道具として使用したものか、それ以外の目的があるのかは明らかにしえない。68-5は珪質頁岩製の敲石である。両極敲打痕があることから石器製作に供されたものではなく、別の用途が想定されるかもしれない。68-6は、削器であるが素材剥片打面部側に彫刻刀形石器を想起させる槌状剝離が認められる。意図的な剝離か否か不明であるため、ここでは両側縁部に施された二次加工を重視して削器とした。68-7は加工に乏しいものの、三辺に抉り状の二次加工が認められるため三脚石器とした。68-8は製作術上、石槍か削器か判断が迷うものであり、形態から三角錐形石器と仮に分類したものである。石器上端の先頭部には3条の槌状剝離が確認される。これが衝撃剝離痕だとすれば石槍の範疇で捉えられるかもしれない。68-9は器体中央部に抉りを持つ有肩の打製石斧である。肩部の張り出しが弱いものの「虫内型」打製石斧 (吉川2012) の範疇で捉えられるものである。

#### ⑪剥片・碎片、二次加工ある剥片、微細剝離痕ある剥片 (第69・70図)

剥片・碎片は47,341点確認され、出土石器の86% (47,341点/54,879点×100≒86.2) を占める。剥片と碎片は、剝離軸長 (剝離方向を垂直においた場合の長さ) が2cm以上を剥片、2cm未満は碎片とした。剥片は44,612点、碎片は2,730点であった。剥片の石材は鉄石英9点、黒曜石16点、玉髄質頁岩461点、残りは珪質頁岩である。また、剥片・碎片のうち2,445点には被熱痕跡が認められた。

剥片には、石刃状剥片 (長幅比2:1以上で稜線と縁辺が平行) から、縦長剥片 (長幅比2:1以上)、寸詰まりの縦長剥片 (おおそ長幅比1.5:1~2:1未満)、矩形剥片 (おおそ長幅比1:1)、横長幅広剥片 (おおそ長幅比1:2以上) があり、矩形・横長幅広の不定形剥片が多い。また、本遺跡の特徴として石刃状剥片がまとまって認められる点が挙げられる (69-4~6・8、70-1~6)。70-6にみるような稜付の石刃状剥片もあることから意図的に石刃生産が行われたものと考えられる。後述するように石刃核様の石核は認められるものの数量的には少ない。剥片剝離の進行に伴い、石核作業面上に石刃状剥片剝離の痕跡が失われたものと考えられる。

また、剥片の中には石槍や石筥などの両面調整体加工時に生じる調整剥片も見られることから、未成品の出土と合わせて遺跡地で整形などの二次加工が行われていたと考えて間違いない。

不定形な剥片や石刃状剥片には二次加工が部分的に施される「二次加工ある剥片」や、微細な剝離痕が縁辺に認められる「微細剝離痕ある剥片」も多くみられる。二次加工ある剥片と削器の違いは、加工が連続的に（少なくとも一側縁の1/3以上）施されているか否かで区別し、1/3未満であれば二次加工ある剥片とした。微細剝離痕ある剥片は、従来「使用痕ある剥片」とされたものであるが、微細剝離が使用による刃こぼれか、その他の要因による剝離であるかは不明瞭であるため、本報告では機能を類推させない「微細剝離痕ある剥片」とした。

この他、両極打法により剝取された両極剥片（89-6）が一定数認められる。両極打法による剥片の形態的特徴は、打面が線状もしくは点状で厚さが1mm以下と薄い場合が多く、バルブが発達しない反面、リングの間隔が密で凹凸が際立つ。小型薄手剥片石器の素材である可能性もあるが、利器として用いられた楔形石器の使用に伴い生じた剥片である場合も考えられる。

## ②石核（第20図、第71～88図）

石核として抽出したのは913点であり、礫石器を除く出土石器の1.7%（913点/53,843点×100≒1.69）を占める。石核は素材の違いにより、A類：礫、B類：剥片、C類：分割礫、D類：素材不明の4つに分類した。

珪質頁岩は原石自体が片手で支えられないほど大きいものが多いため、原石をそのまま石核にするのではなく、原石を分割したり、大形部厚な剥片を剝離するなどして、石核の素材とすることが多い。

剥片と分割礫の区別は、後者が背面に残された礫面の状態によりほぼ半割されたことが明らかなものに限定した。また、分割礫の場合、主要剝離面がボジ面やネガ面とならず、平坦になる場合が多いことも判断基準の一つとなる。さらに、石核を剥片剝離技法の特徴により次の1～7類に分類した。

### 1類：両設打面石核

石核の上下両端に打面を設定。打面調整・打縁調整といった石核調整が施されるものと、石核調整が施されないものがあり、複数の石刃が剝離されている。石核調整が施されるのは原則的に1類のみである。

珪化の進んだ良質な珪質頁岩を素材としており、後期旧石器時代の所産としても違和感がないものもある。ただ、東北地方の珪質頁岩地帯では縄文時代草創期以降、石刃技法が連続と続いている。本遺跡では後期旧石器時代の石器が出土しておらず、また、石刃状剥片を素材とした縄文時代の石器がまとまって出土していることから、本類型の石核は縄文時代に帰属するものと判断される。

### 2類：単設打面石核

打面作出されるものとされないものがある。寸詰まりの縦長剥片～横長幅広剥片（矩形剥片）が剝離される。形状等からa～c類に細分。a類：サイコロ状を呈するもの。矩形剥片を連続剝離しており、石核を消耗しつくした感のあるものが目立つ。b類：剥片素材の主要剝離面を作業面として貝殻状剥片が連続剝離される石核も一定量認められる。これは後期旧石器時代の米ヶ森技法に類するが、東北地方日本海側の珪質頁岩地帯では縄文時代でも一般的に認められる。c類は前二者に含まれないものである。

### 3類：90度打面転位石核

打面が作出されるものとされないものがある。2a類と同様、矩形剥片を連続剥離するが、石核を消耗し尽くして剥片が量産される傾向にある。剥離される剥片の末端はヒンジフラクチャーとなる場合が多い。形状はサイコロ状を中心とするが多様である。

### 4類：求心状剥離石核

打面が作出されるものとされないものがある。石核裏面を打面、正面を作業面とし、中心に向かって連続剥離を行う。2・3類に比べより幅広く厚みのある剥片が剥離される傾向にある。剥片端部がヒンジフラクチャーになるものが一定量ある。

求心状であると認識するには本来三枚以上の剥離面が認められないと判断できないが、ここでは二枚でも剥離軸が中心に向かっているものは、90度打面転位（3類）を除いて本類型に分類した。

### 5類：交互剥離石核

打面が作出されるものとされないものがある。2b類や4類に近いが、打面と作業面を入れ替えながら連続的に剥片が剥離される石核で、最終形状はチョッパー（両刃礫器）状となる。剥片形態は4類と同様である。

### 6類：単剥離石核

打面作出は行われず、一枚のみ剥離面がある石核。寸詰まりの縦長剥片～横長幅広剥片が剥離される。A類の場合、「一発コア」とも俗称され、石材の質を確認するための剥離と考えられる向きがあるが、定かではない。黒曜石や玉髄質の珪質頁岩等にとくに特徴的に認められる。A類の場合、剥がされた剥片の背面は礫面で厚みがあり、定形的な石器素材には適さないが、例えば直径20cm以上の大形礫から剥離された大形剥片の場合は石核・石器の素材になりうる。

### 7類：両極剥離石核

両極打法による石核で、一般的に打面作出は行わない。楔形石器に類するため、両者の識別は困難である。「楔形石器とは何か」という問題も孕んでおり一筋縄ではいかない。ここでは、男鹿産黒曜石に見られるような小礫素材で紡錘状の形態となるものや、剥片素材で方形を呈し、両極剥離縁辺が刃部のように直線的もしくは弧状となる定形的なものを楔形石器とし、それ以外の両極打法の痕跡が認められるものを石核7類とした。剥離される剥片は薄手で主要剥離面のボジ面が発達しない縦長～幅広剥片である。

以上のように石核素材と剥片剥離技法の特徴による細分を行い、その組み合わせとして、A-1類、B-2c類・・・といった具合に石核を類型化した。下表に分類ごとの点数を示す。

分類	点数	分類	点数	分類	点数	分類	点数		
A-1	2	B-2a	1	C-2c	1	D-1	1		
A-2a	4	B-2b	23	C-3	16	D-2	1		
A-2b	1	B-2c	27	C-4	12	D-2a	3		
A-2c	7	B-3	69			D-2c	6		
A-3	115	B-4	208			D-3	116		
A-4	27	B-5	50			D-4	111		
A-5	32	B-6	4			D-5	41		
A-6	1	B-7	3			D-6	1		
A-7	6					D-7	9		
A類計	195	B類計	385	C類計	29	D類計	289	総計	913

また、分割礫が130点確認された。分割面には意図的な分割を示す打点が観察され、C類石核の素材として位置付けられる可能性があるが、これ以上の言及はできない。

#### ⑬磨製石斧（第22図、第90～92図）

木の伐採や加工に利用された磨製の石器である。47点出土、うち17点を図示した。使用された石材は、透閃石岩28点、泥質片岩2点、安山岩4点、凝灰岩（砂質凝灰岩、緑色凝灰岩を含む）13点に分けられる。敲打後に全面が研磨された定角式のものが多いが、盤状の形状を示す個体（92-3など）もある。刃部は片刃（90-1など）と両刃（90-4など）の両者が認められる。

#### ⑭石錘（第23図、第93～97図）

扁平な自然礫を素材とし複数の袈りが認められる礫石器であり、漁網錘あるいは編物のオモリとしての用途が想定されている。打欠石錘とも称される。776点出土、うち18点を図示した。使用の石材はデイスait 307点、安山岩258点、泥岩139点、流紋岩44点、凝灰岩21点、珪質頁岩6点、珪化岩1点である。以下のように分類した。欠損などにより分類不能はK類とした。

A類：長軸端2辺に打ち欠きによる袈りをもつもの。

B類：短軸端2辺に打ち欠きによる袈りをもつもの。

C類：打ち欠きによる袈りが両端2辺に加えて計3箇所（C3）あるいは4箇所（C4）に見られるもの。

A類653点、B類43点、C類29点（C3：18点、C4：11点）、K類51点と圧倒的にA類が多い。

#### ⑮半円状扁平打製石器（第98～100図）

おおよそ半円状を呈する扁平な礫を素材とし、下辺（底縁）を打ち欠いて刃部を作出している石器である。99点出土、うち12点を図示した。使用の石材はデイスait 44点、安山岩41点、凝灰岩6点、頁岩6点、泥岩1点である。被熱を受けているものが6点確認された。

形態から次のように分類した。欠損などで分類不能はK類とした。

A類：素材の下辺部のみを打ち欠いて刃部を作出したもの（A-N類）。側辺に袈りが加えられるものをA-E類とする。

B類：下辺の他、上辺にも打ち欠き加えられるもの（B-N類）。側辺に袈りが加えられるものをB-E類とする。

C類：礫面の厚みを減ずるような打ち欠きが行われるもの（C-N類）。側辺に袈りが加えられるものをC-E類とする。

D類：B類のうち、刃部両側縁に擦り切りと見られる顕著な使用痕（擦痕）が認められるもの。その断面はV字になる。いわゆる石鋸とも呼ばれている石器である（100-3・4）。

D類を除く各類は、下辺の打ち欠きをそのまま刃部とするもの（1類）と打ち欠き後に擦りが加えられる（2類）別がある。たとえばA類で側縁に袈りがあり、下辺に擦りが加えられるものは、A-E 2類と表記する。分類ごとの点数は、A-E 1類5点、A-E 2類27点、A-N 1類1点、A-N 2類2点、B-E 1類6点、B-E 2類21点、B-N 1類4点、B-N 2類9点、C-E 1類5点、C-E 2類6点、C-N 1類4点、C-N 2類3点、D類3点、K類3点である。



#### ⑯敲石（第101・102図）

ものを敲いたり、すり潰す石製の打撃具である。84点出土、うち9点を図示した。球状・砲弾状の円礫を素材とする個体（101-1など）が多いが、棒状を呈する示すもの（101-5）もある。石材は前者が珪質頁岩、後者（1点）のみ凝灰岩であり、硬質で緻密な珪質頁岩の利用頻度が高いのが本遺跡の特徴である。

#### ⑰凹石、砥石、礪器、その他の礪石器（第102図5、第103図）

凹石は平坦な礪面の一方もしくは表裏両面に敲打による凹面をもつ。7点出土、うち5点を図示した（103-1～103-5）。石材はいずれもやや軟質の凝灰岩である。凹面は103-2・3が表裏2面、他は1面に認められる。

砥石はものを研ぎ磨く石器である。2点出土。103-6は凝灰岩製であり、図示両面に筋状の凹部が認められる。各辺が全て欠損しており、制作時の全体形状は不明である。

礪器は、自然礪を素材として一部に剝離による刃部が作出されたもの。2点出土している。102-5は扁平な礪を使用している。

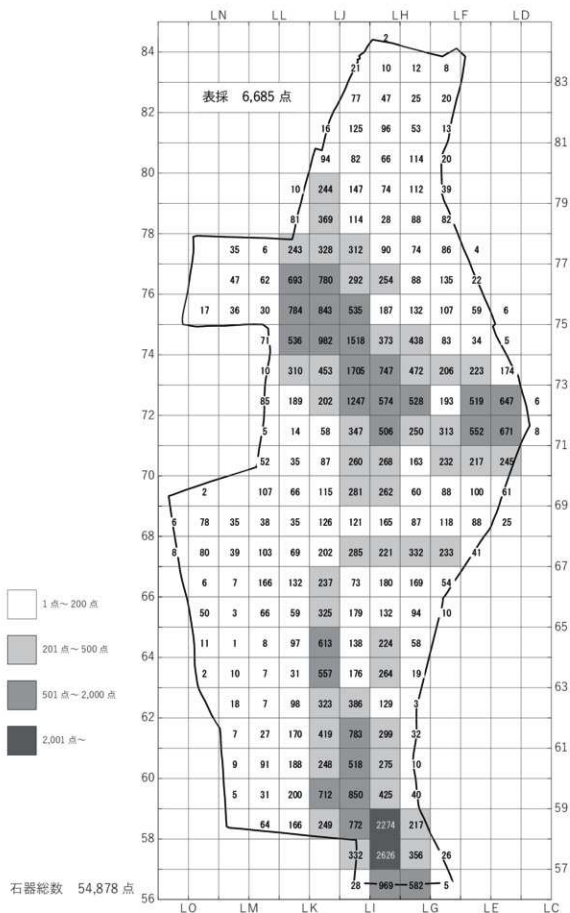
他に図示はしていないが、磨石7点（うち1点は被熱）、擦石7点、台石を2点抽出している。磨石は球状ないし扁平・円盤状の自然礪の面を磨いている石器である。擦石は扁平な自然礪の下辺に擦面をもつものを一括した。下辺擦面の状況は半円状扁平打製石器に酷似するが、打ち欠きを伴わない点異なる。台石は大型の不定形な自然石（重量3kg超）に磨面や敲打痕が見られる。作業台的な機能を想定している。

#### ⑱石製品（第68図1）

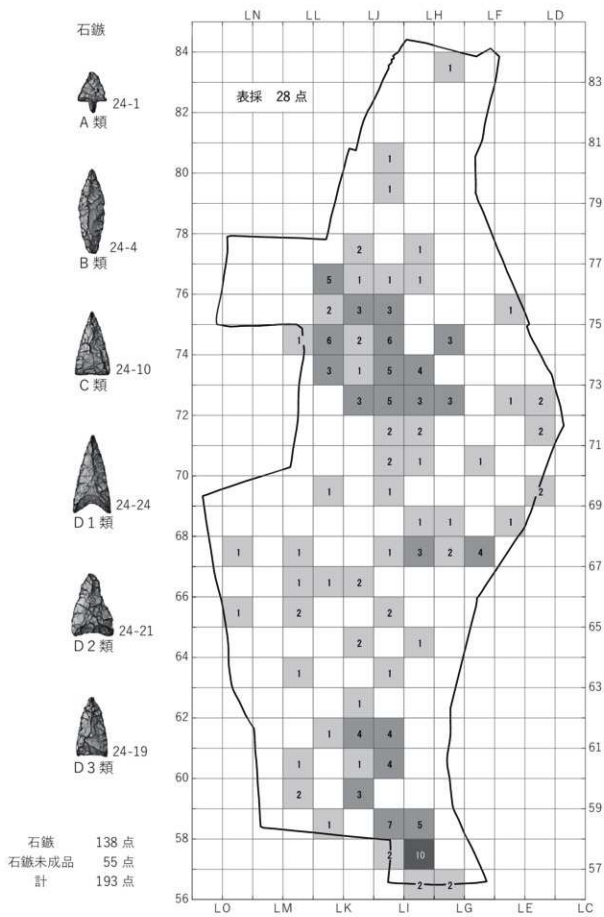
石製品としては、小片ではあるものの珞状耳飾がLG73グリッドから1点出土している。明褐色を呈する瑪瑙製で、復元された長さ・幅とも40mmの円形、厚さ5mmである。円の中心からやや上に径8mmの孔がある。断面形状は下面が平坦な扁平形を呈する。両面から穿たれた補修孔が認められる。



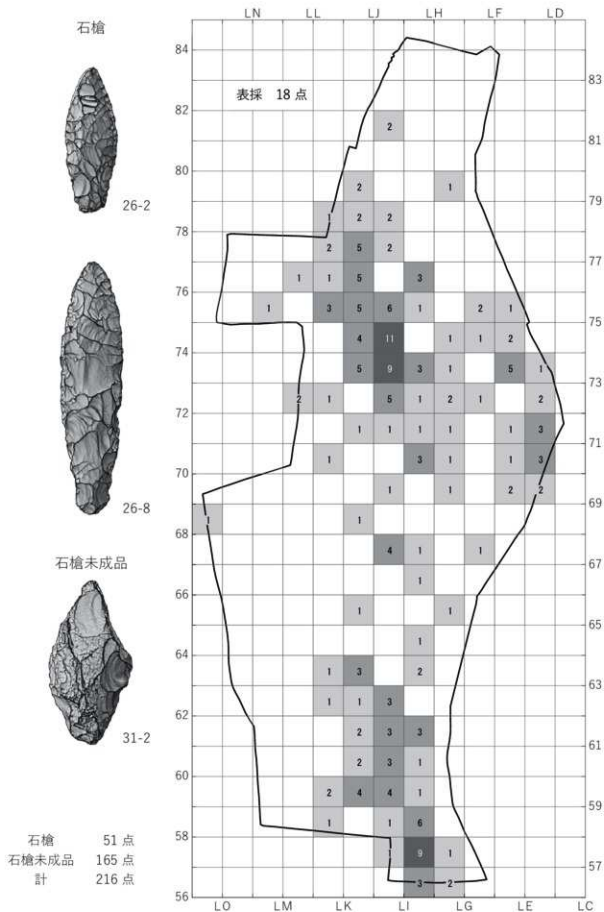
半円状扁平打製石器出土状況 [220610撮影]  
第100図4、刃部両側縁に擦り切りとみられる  
使用痕（擦痕）があり、石鋸とも称される



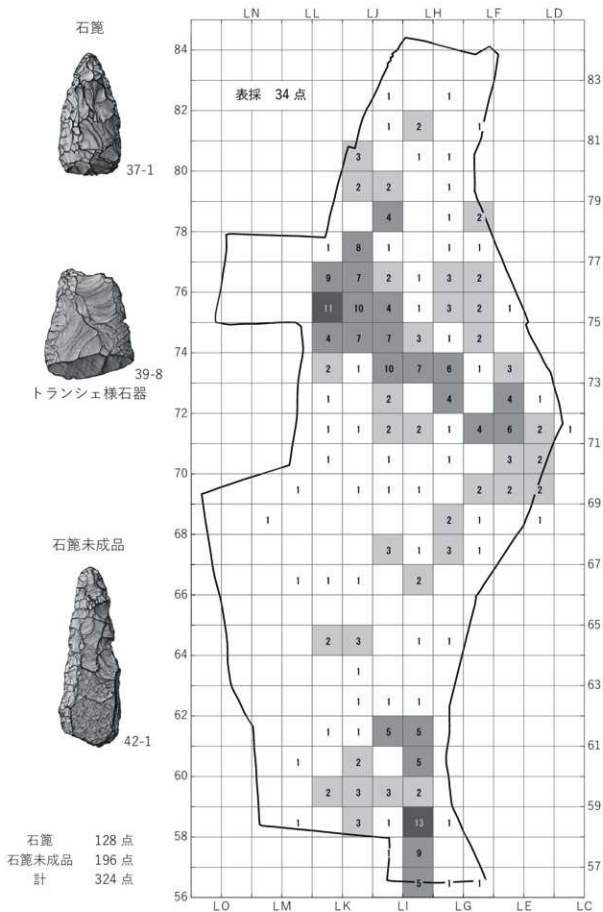
第 13 图 遺物出土分布图 (2) 石器類全体点数



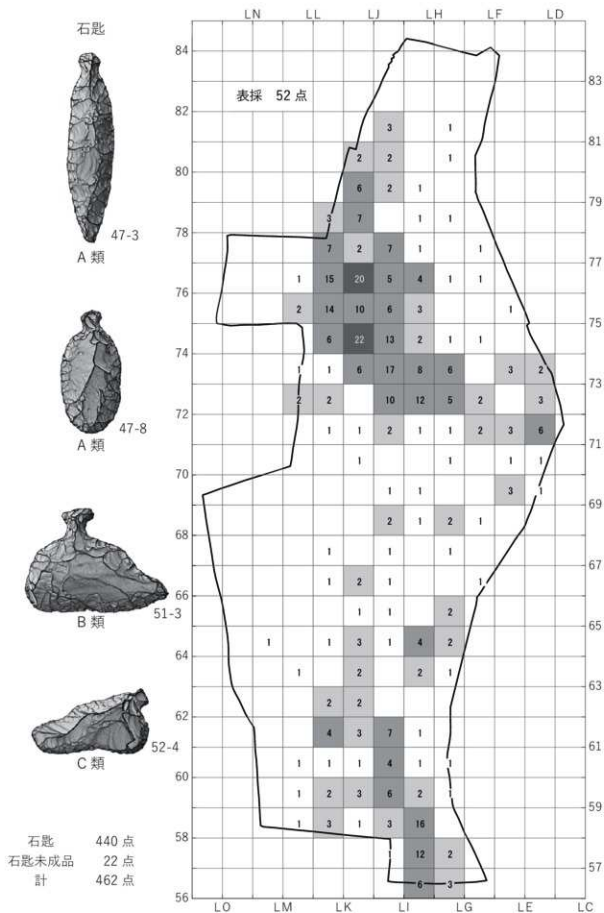
第 14 图 遺物出土分布图 (3) 石鏃・石鏃未成品点数



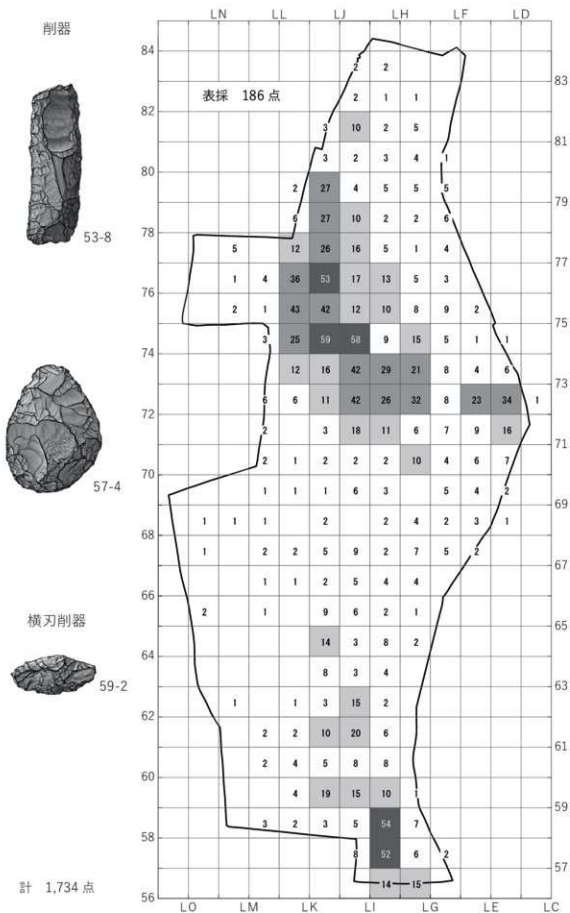
第 15 图 遺物出土分布图 (4) 石槍・石槍未成品点數



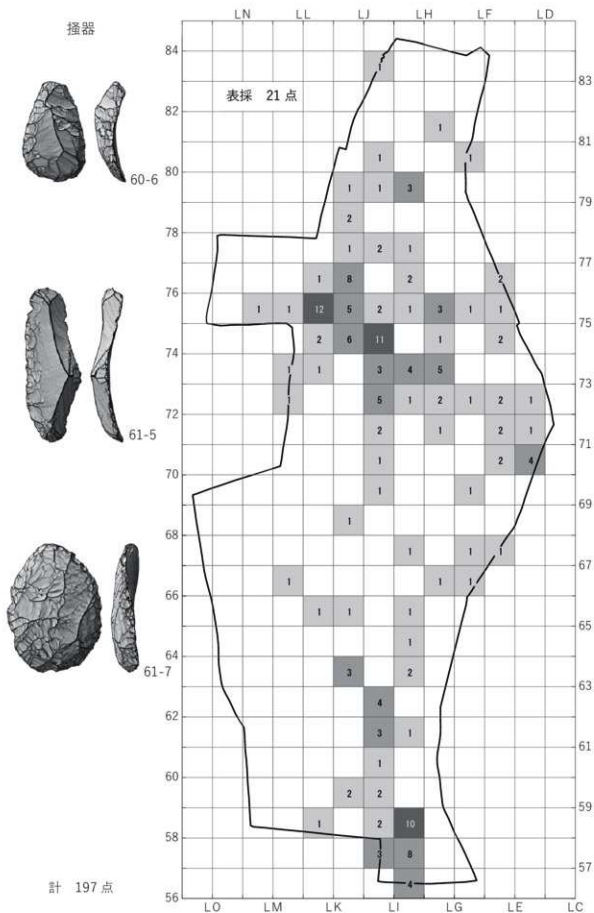
第 16 図 遺物出土分布図 (5) 石籠・石籠未成品点数



第 17 圖 遺物出土分布圖 (6) 石匙・石匙未成品点数

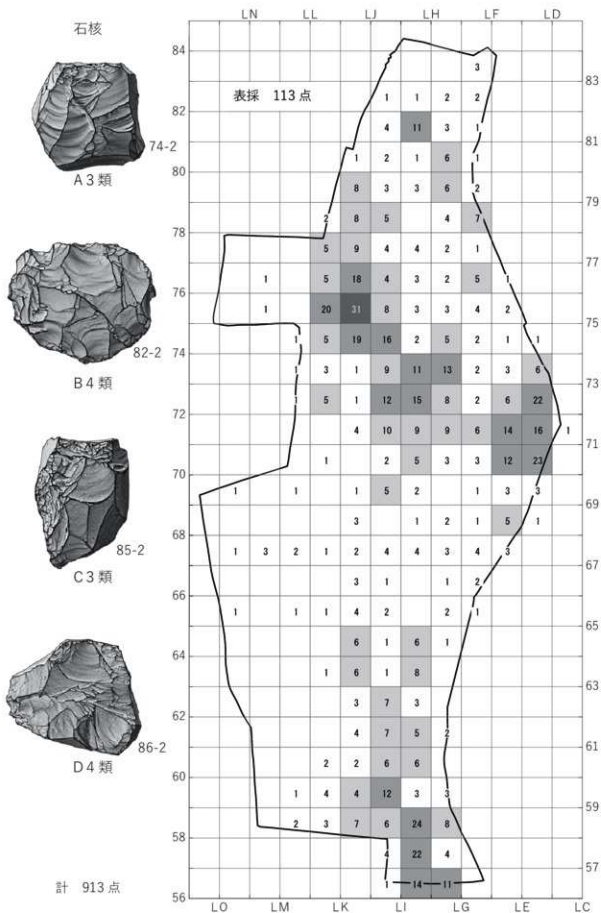


第 18 図 遺物出土分布図 (7) 削器点数

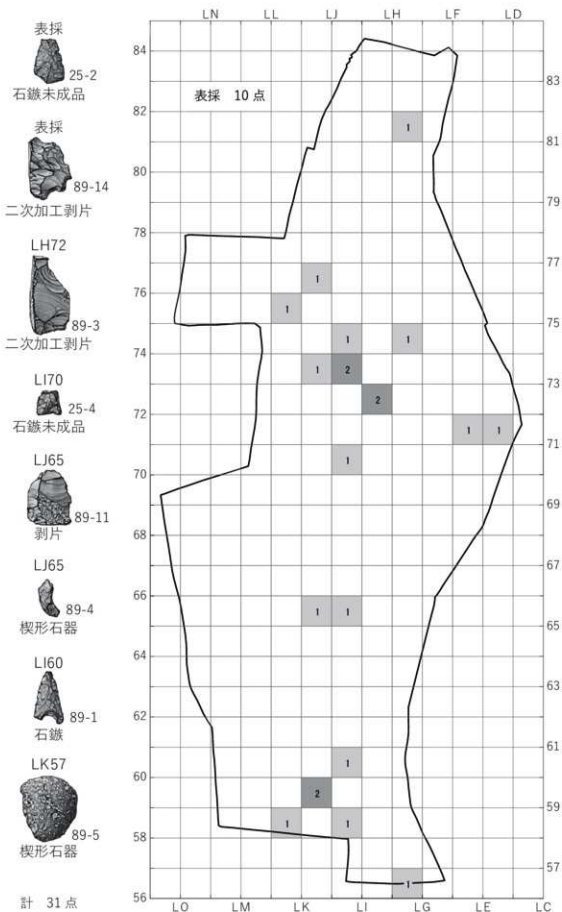


第 19 図 遺物出土分布図 (8) 擗器点数

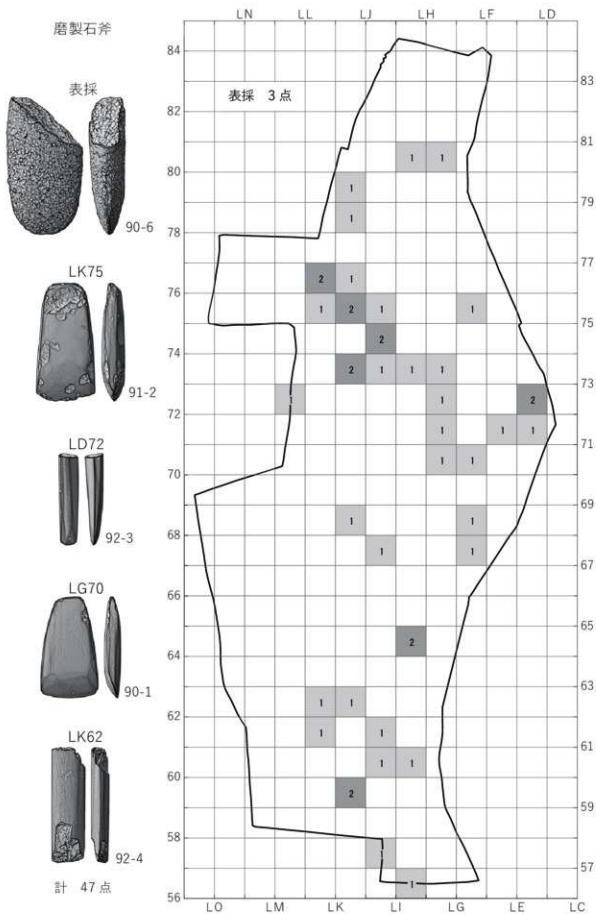




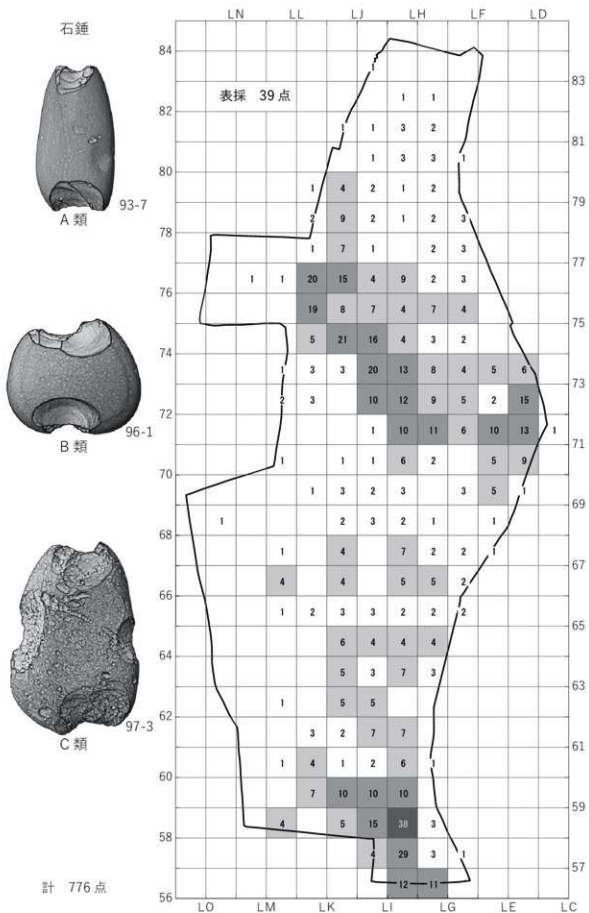
第 20 図 遺物出土分布図 (9) 石核点数



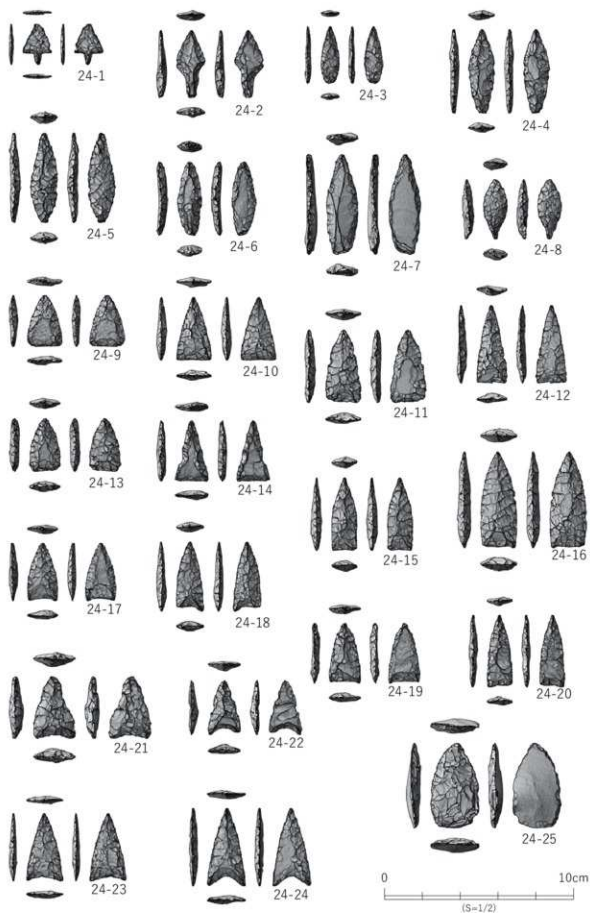
第 21 図 遺物出土分布図 (10) 黒曜石石器点数



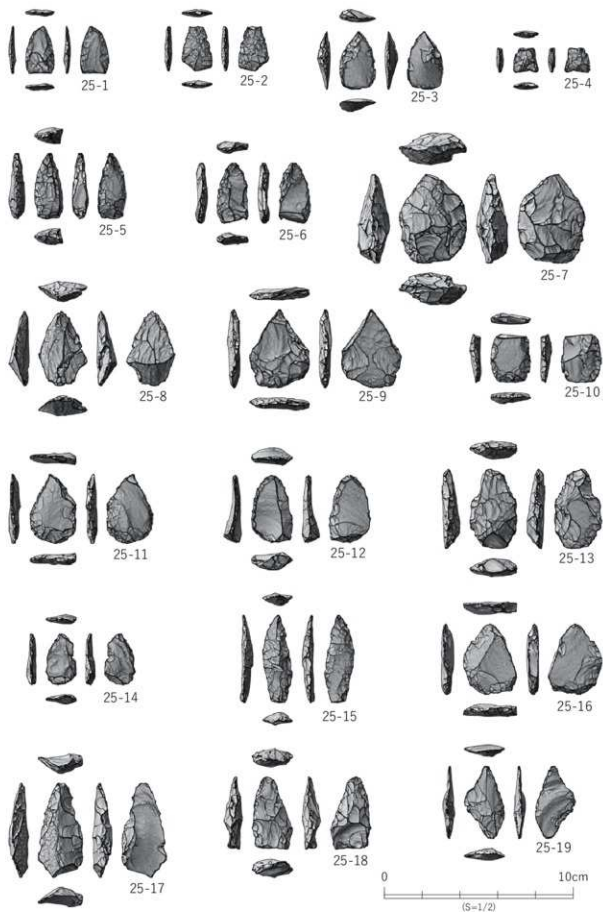
第 22 図 遺物出土分布図 (11) 磨製石斧点数



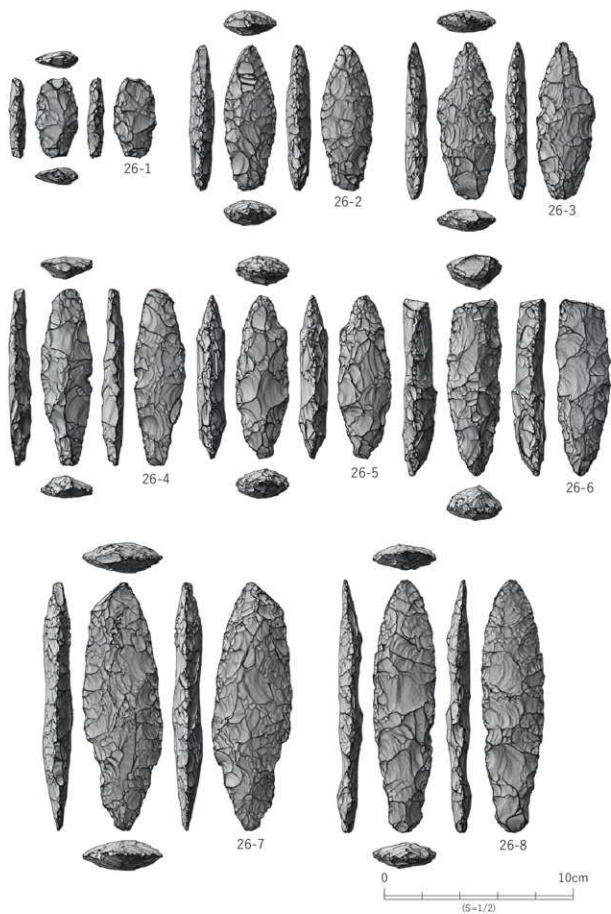
第 23 図 遺物出土分布図 (12) 石錘点数



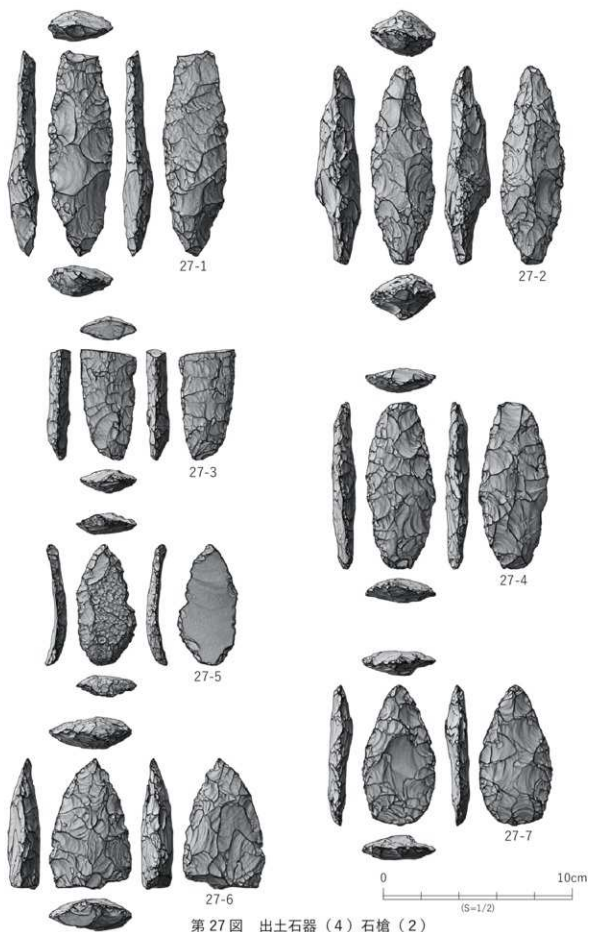
第 24 図 出土石器 (1) 石鏃



第 25 図 出土石器 (2) 石鏃未成品

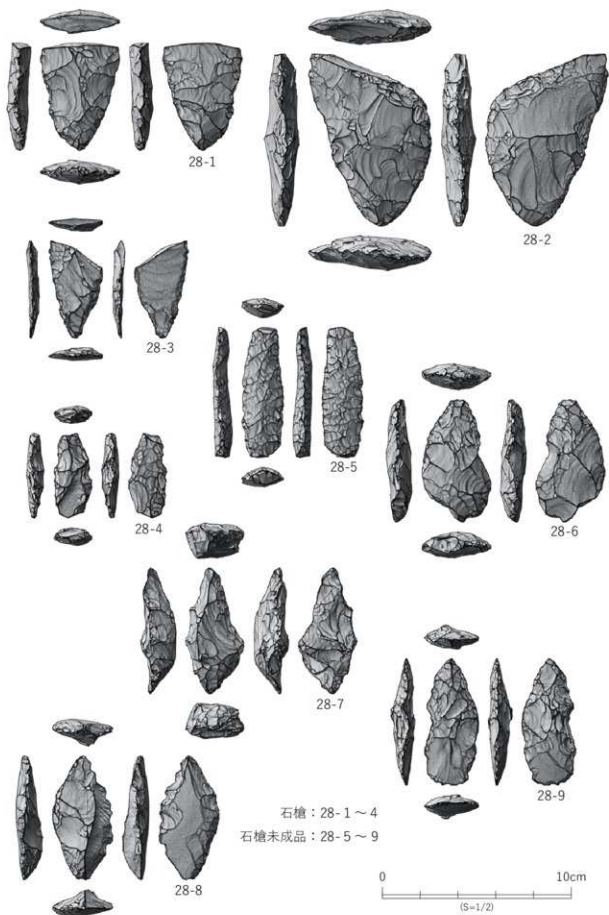


第 26 圖 出土石器 (3) 石槍 (1)

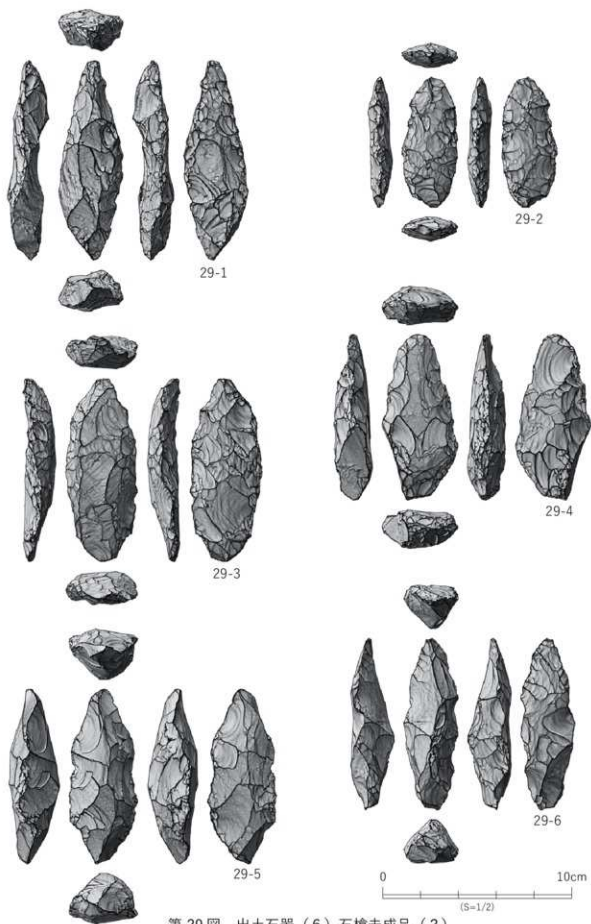


第27圖 出土石器(4)石槍(2)

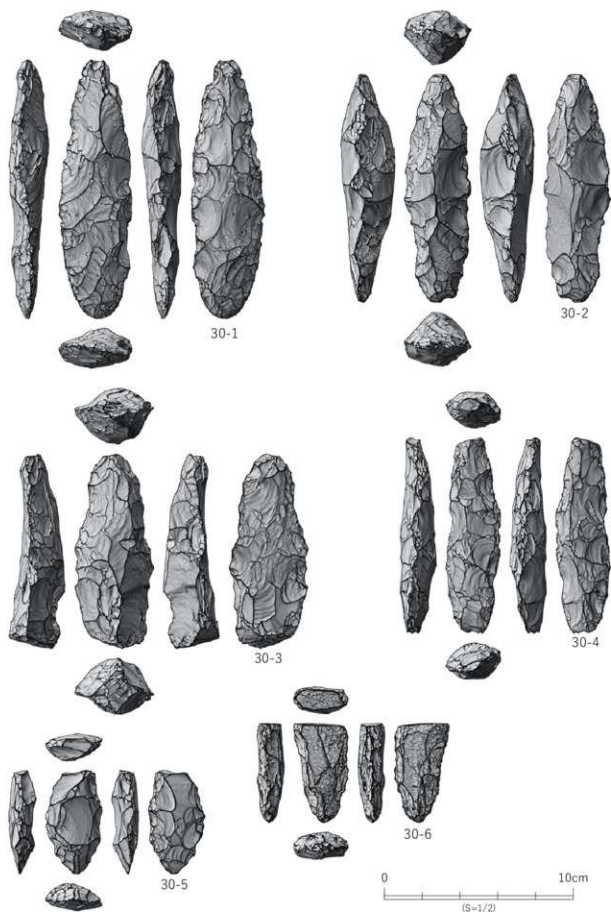




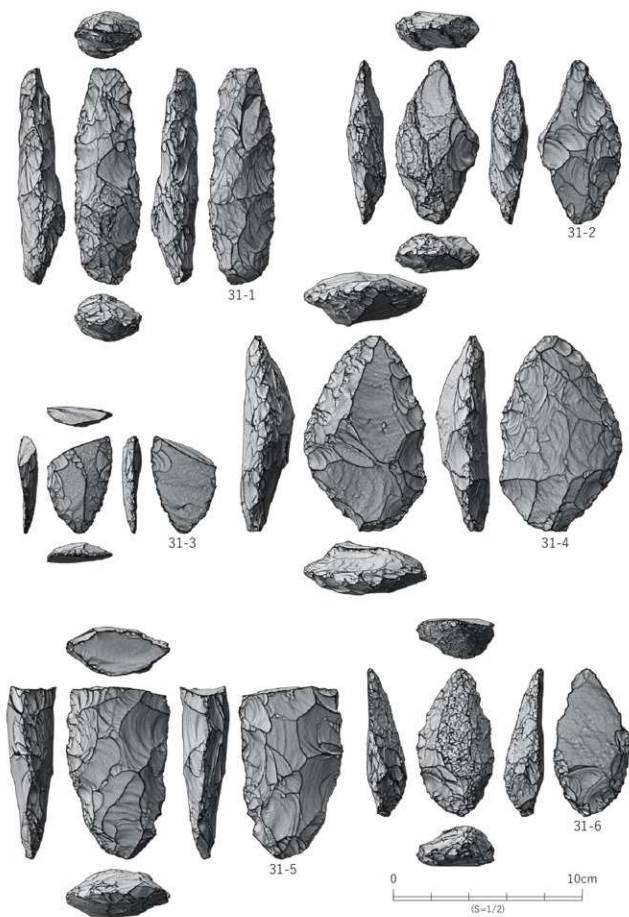
第28圖 出土石器（5）石槍（3）、石槍未成品（1）



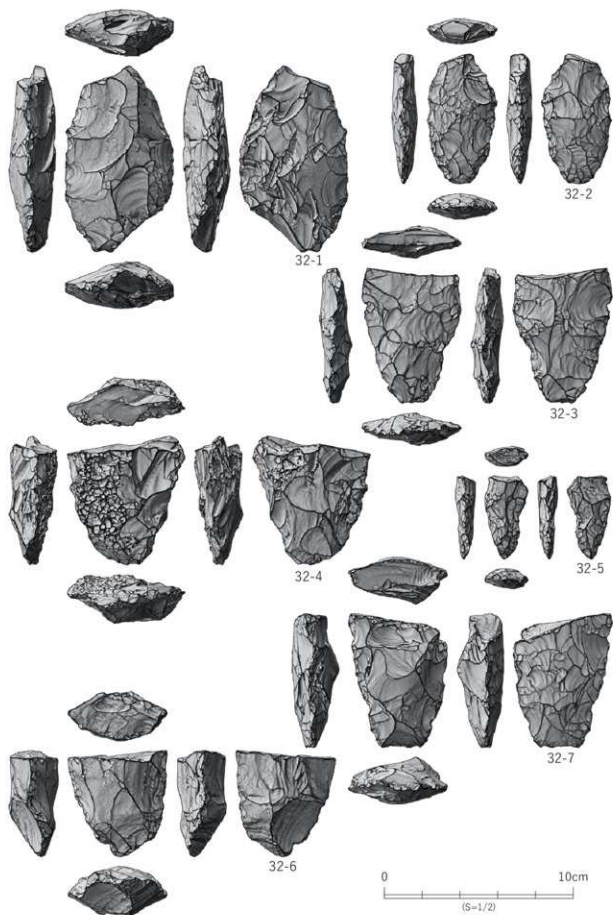
第 29 圖 出土石器 (6) 石槍未成品 (2)



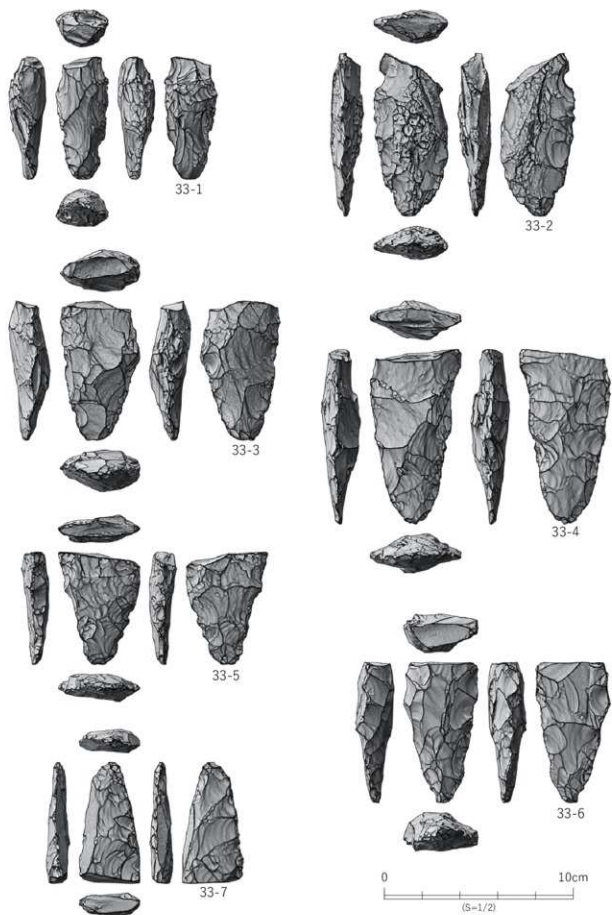
第30图 出土石器(7)石槍未成品(3)



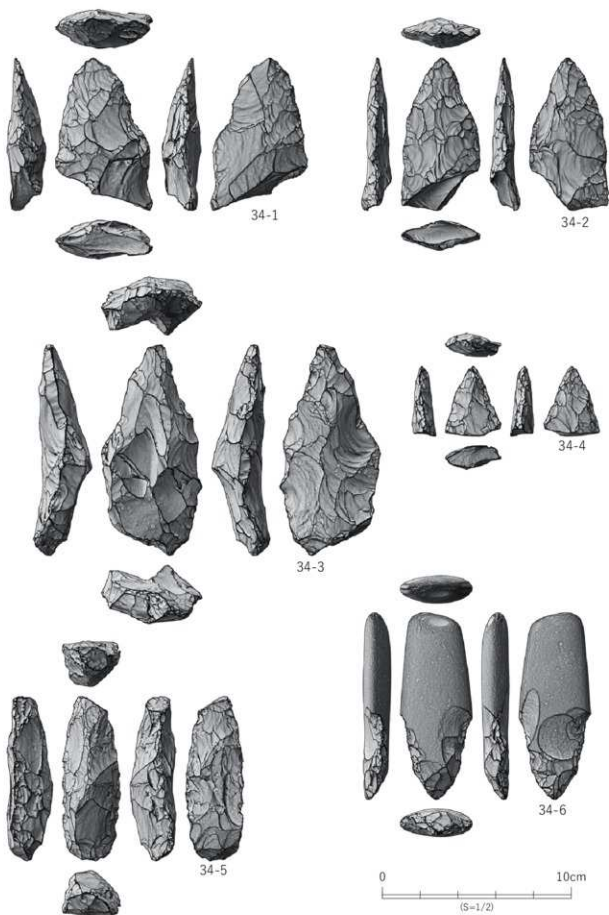
第 31 图 出土石器 (8) 石槍未成品 (4)



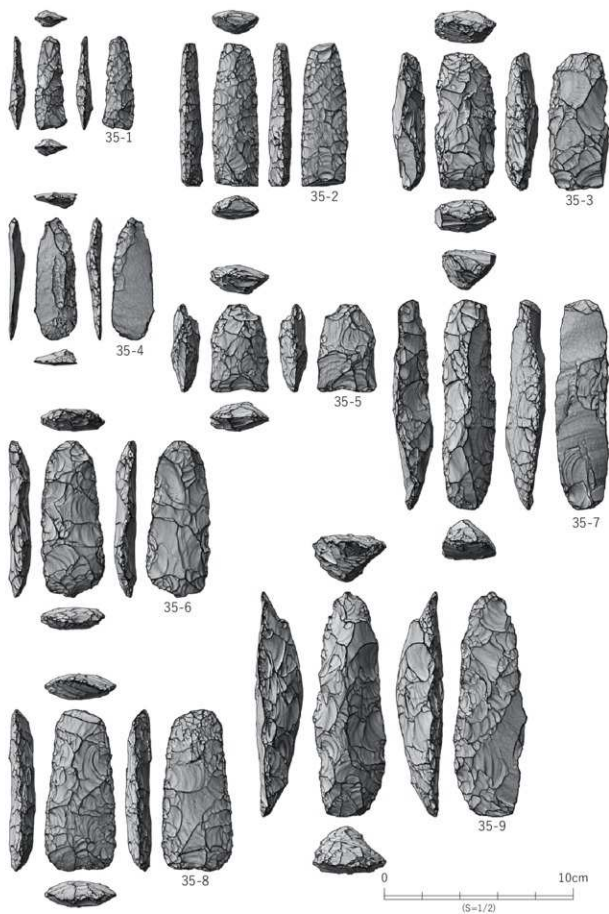
第 32 图 出土石器 (9) 石槍未成品 (5)



第 33 图 出土石器 (10) 石槍未成品 (6)

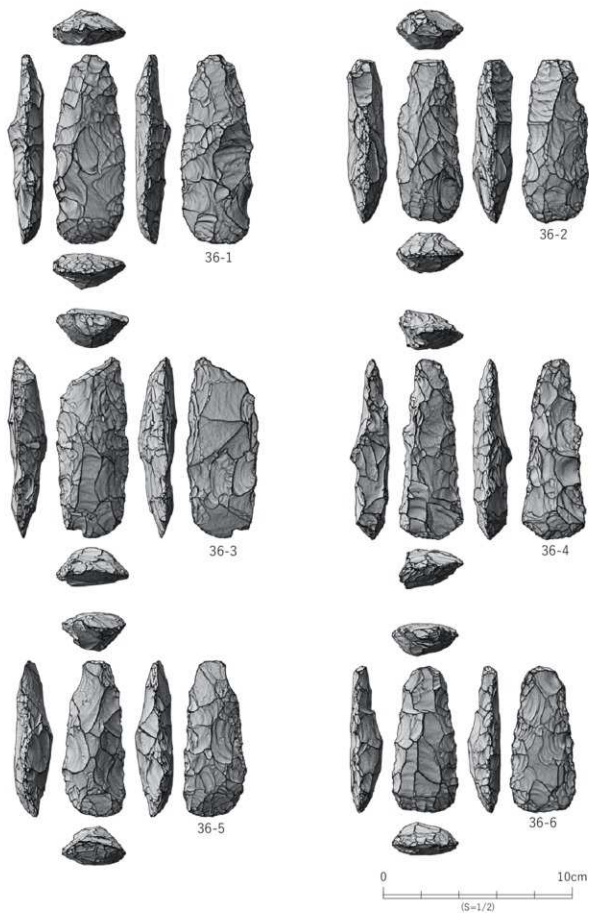


第 34 图 出土石器 (11) 石槍未成品 (7)

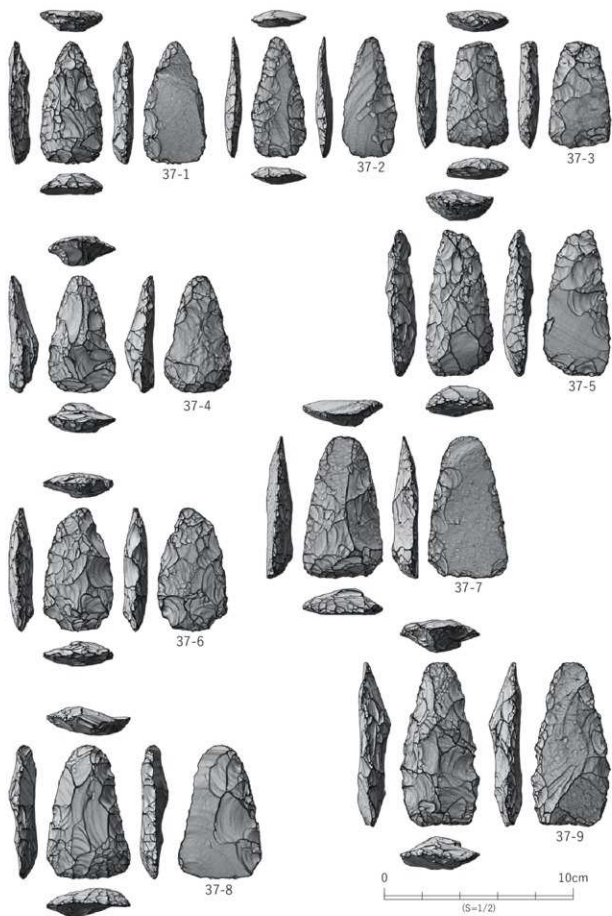


第 35 圖 出土石器 (12) 石鏃 (1)

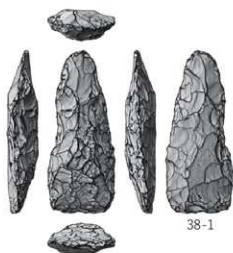




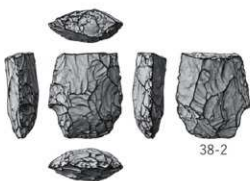
第 36 圖 出土石器 (13) 石鏃 (2)



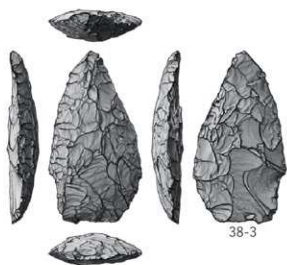
第 37 図 出土石器 (14) 石鏃 (3)



38-1



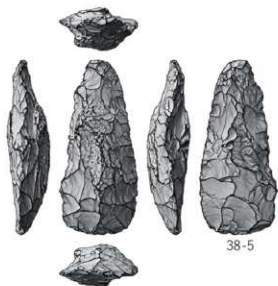
38-2



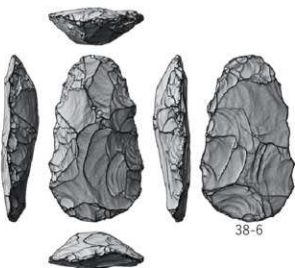
38-3



38-4



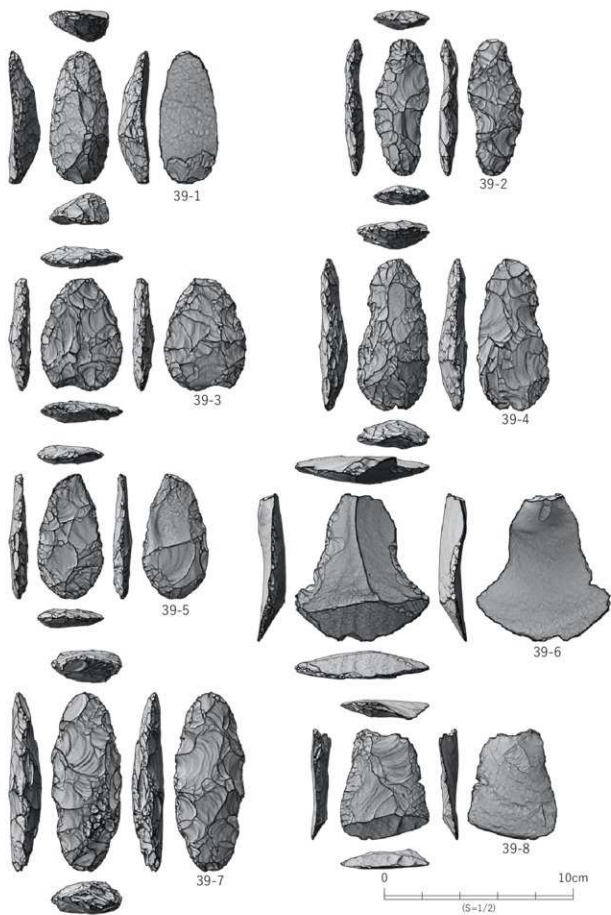
38-5



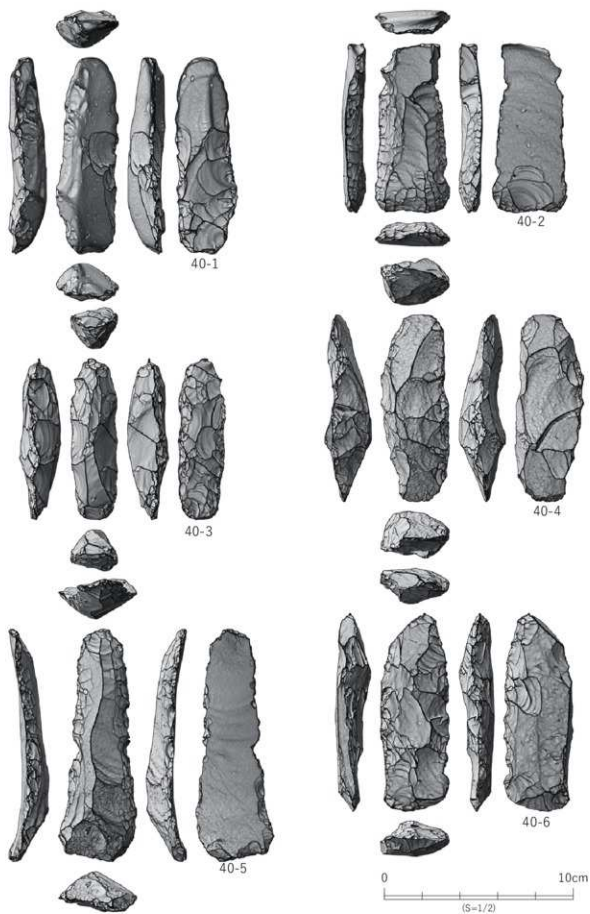
38-6



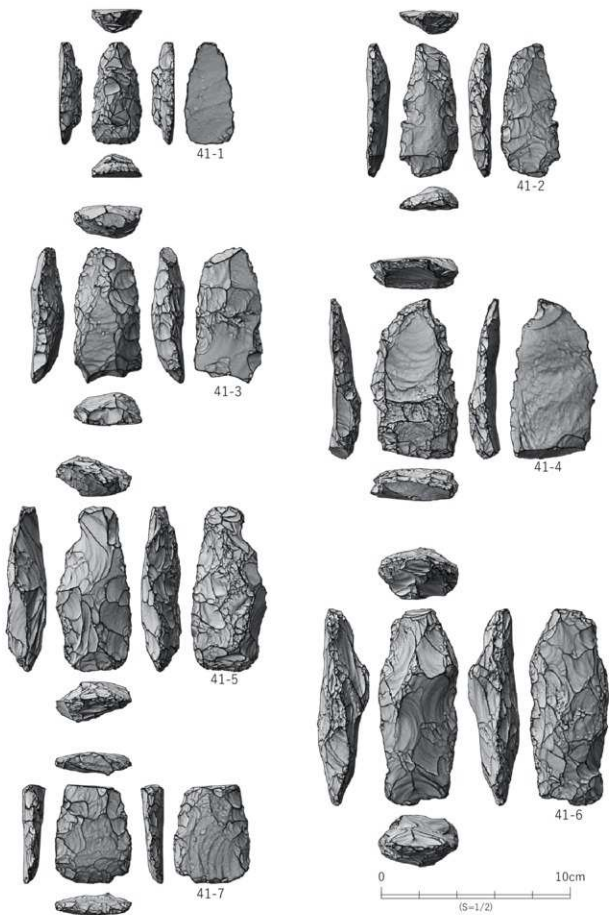
第38圖 出土石器 (15) 石鏃 (4)



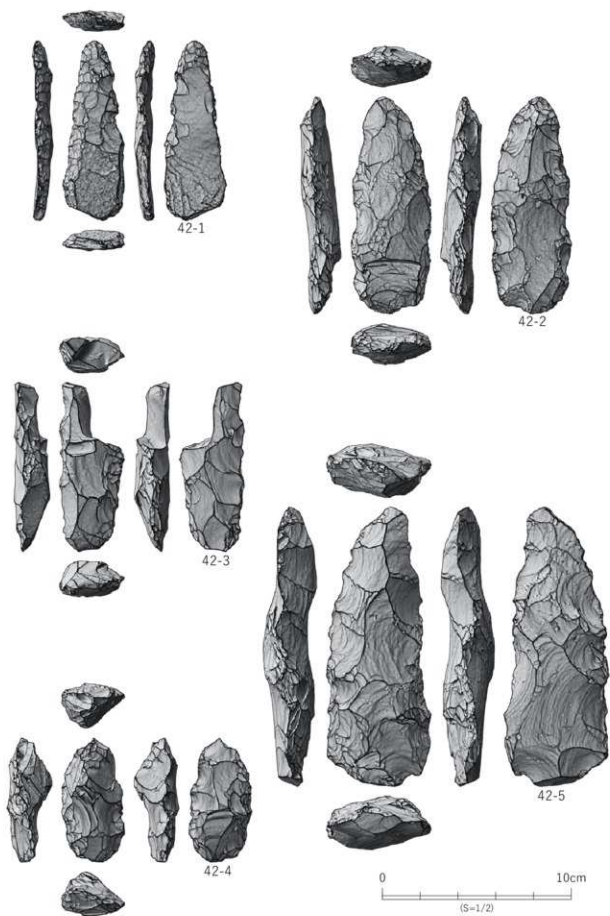
第 39 圖 出土石器 (16) 石鏃 (5)



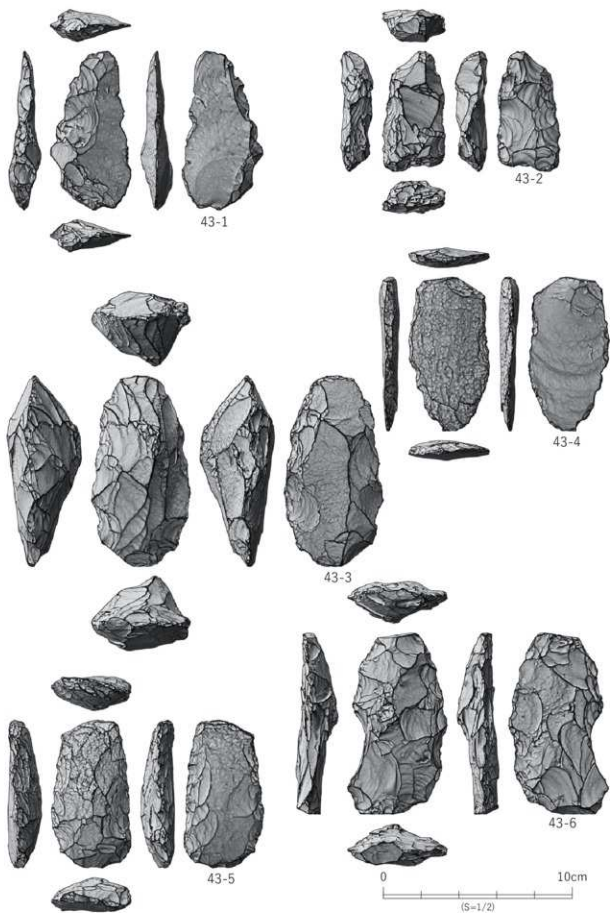
第40图 出土石器(17) 石刃未成品(1)



第 41 图 出土石器 (18) 石麓未成品 (2)

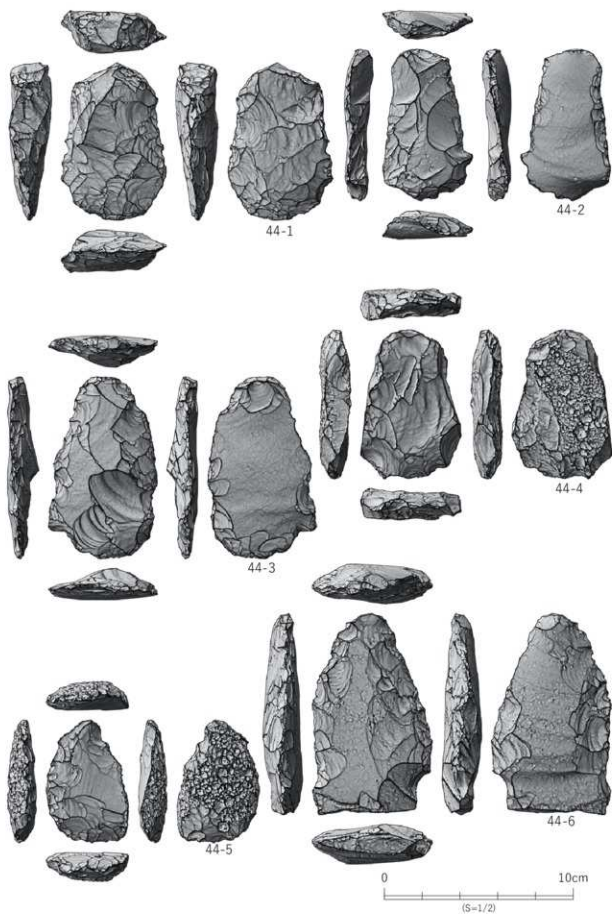


第 42 图 出土石器 (19) 石鏃未成品 (3)

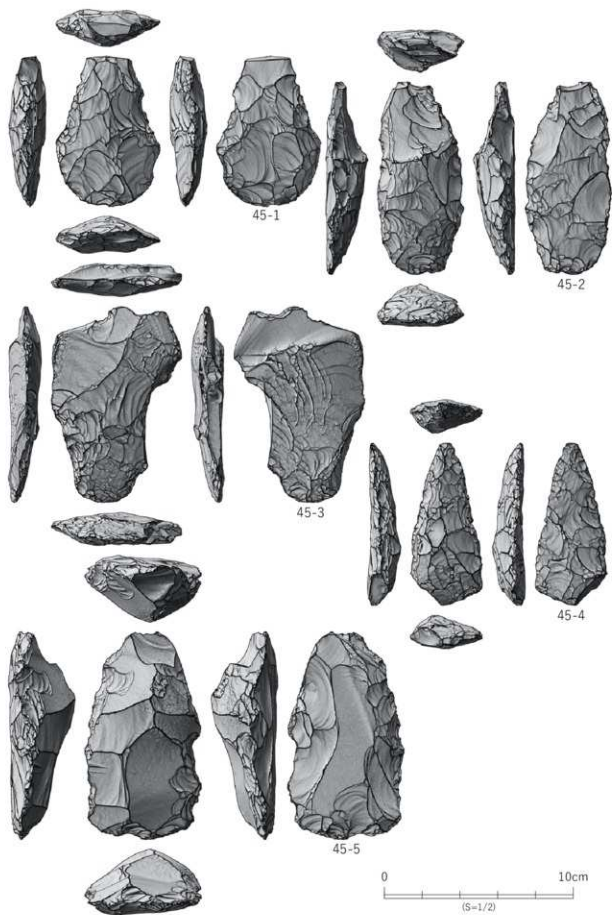


第 43 图 出土石器 (20) 石鏃未成品 (4)

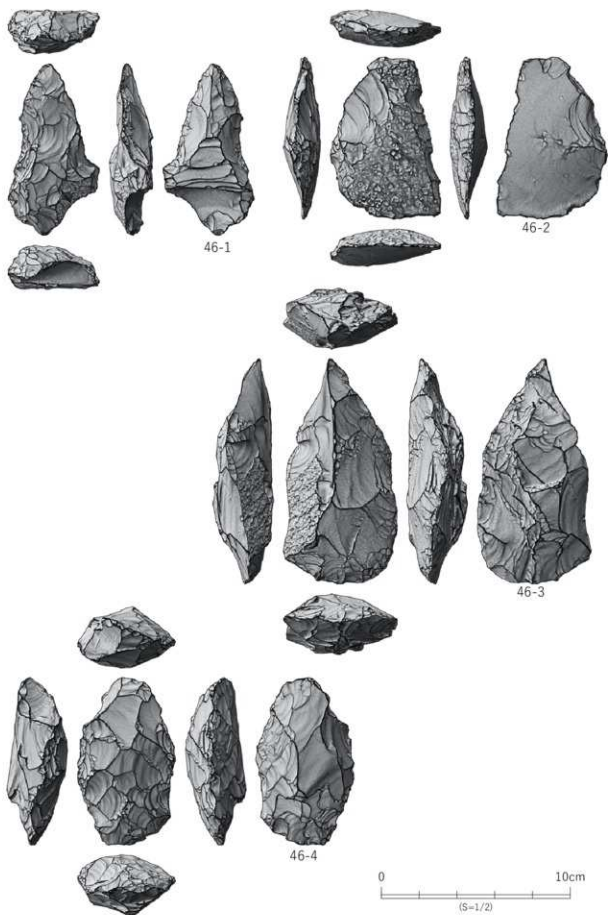




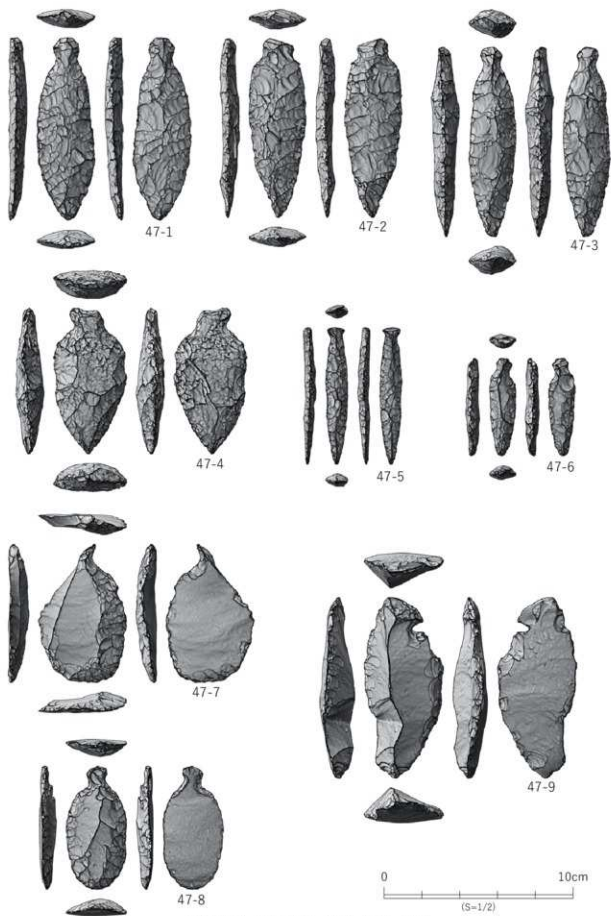
第 44 图 出土石器 (21) 石鏃未成品 (5)



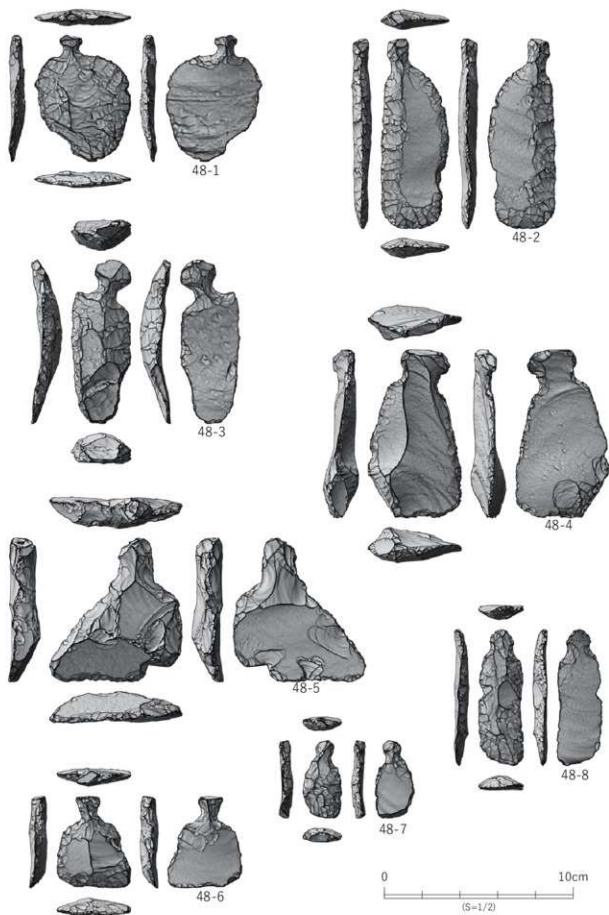
第45图 出土石器(22) 石砾未成品(6)



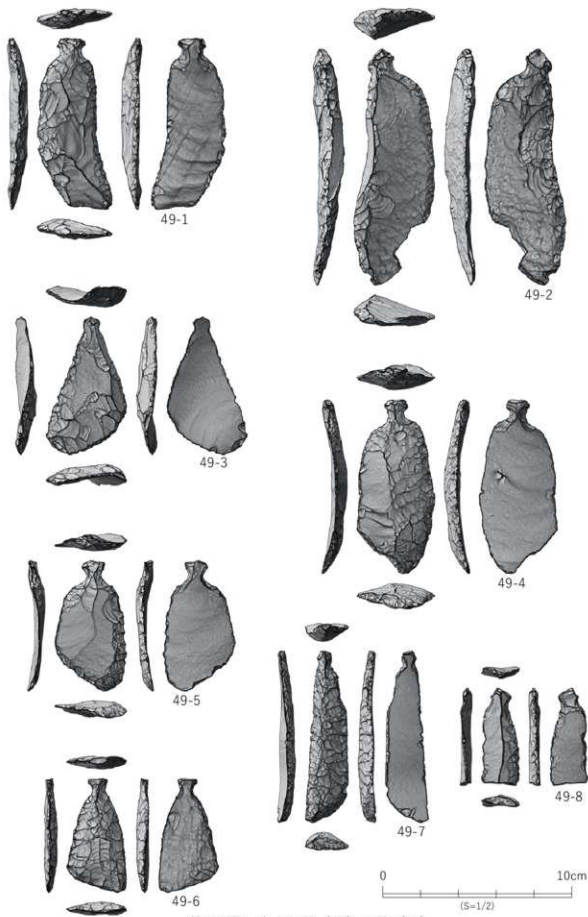
第 46 図 出土石器 (23) 石籠未成品 (7)



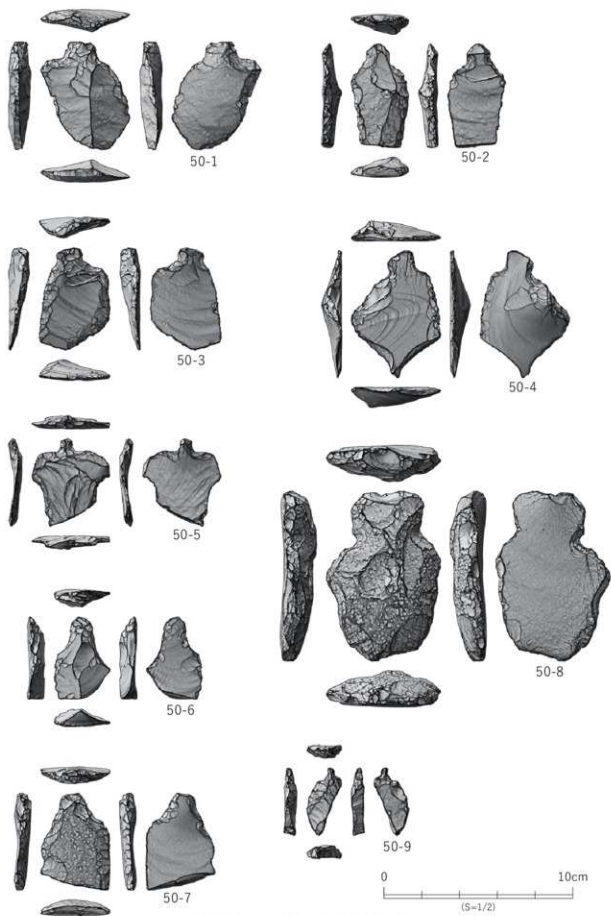
第 47 图 出土石器 (24) 石匙 (1)



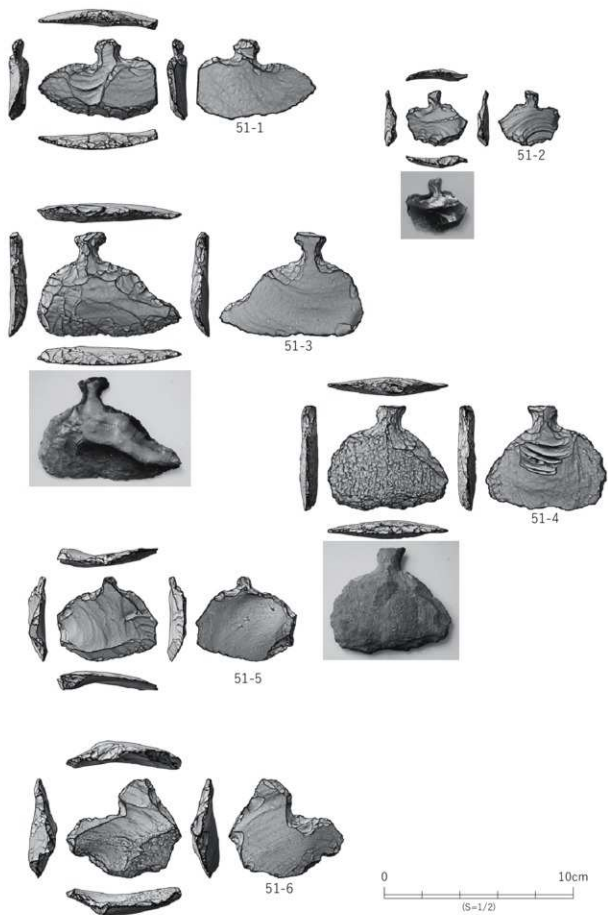
第48圖 出土石器(25) 石匙(2)



第49圖 出土石器 (26) 石匙 (3)

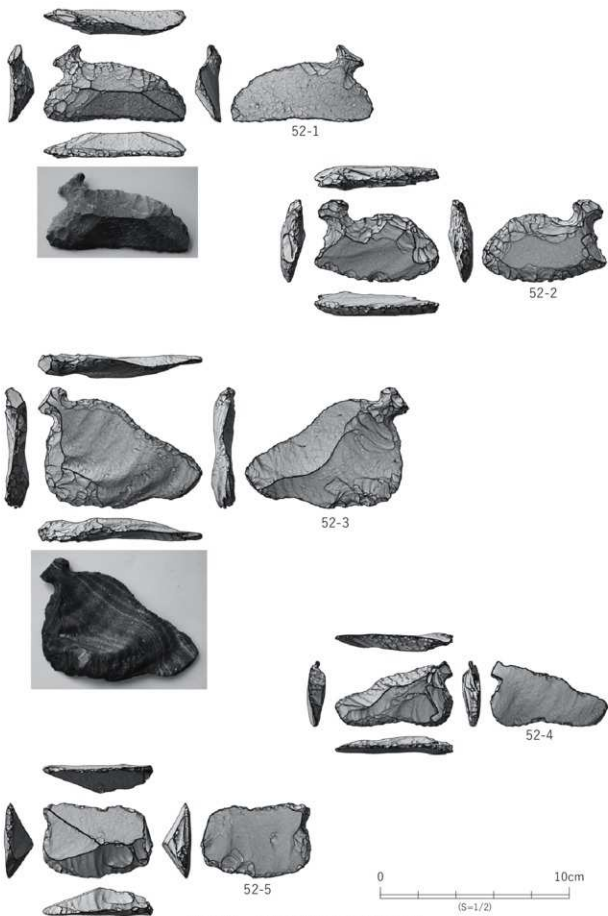


第 50 图 出土石器 (27) 石匙 (4)

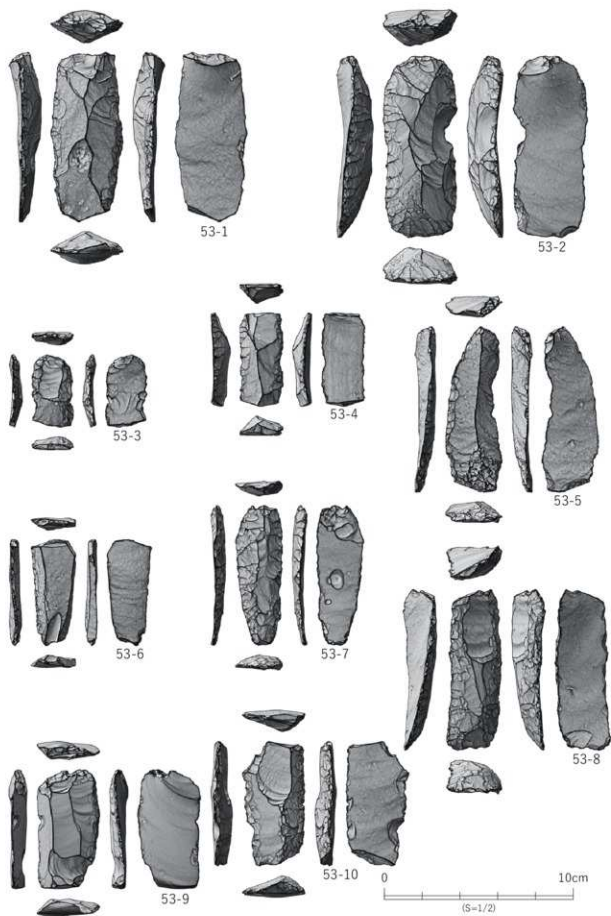


第 51 图 出土石器 (28) 石匙 (5)

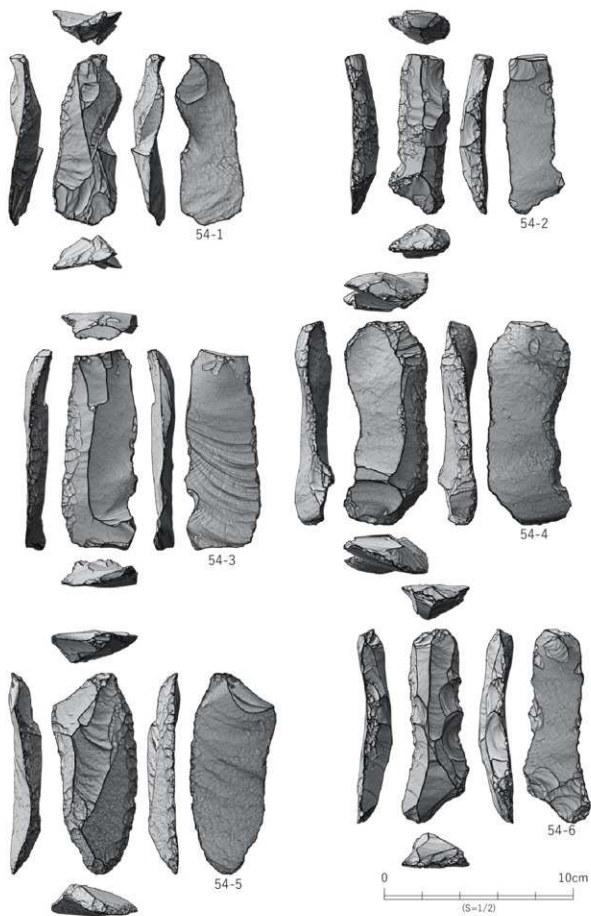




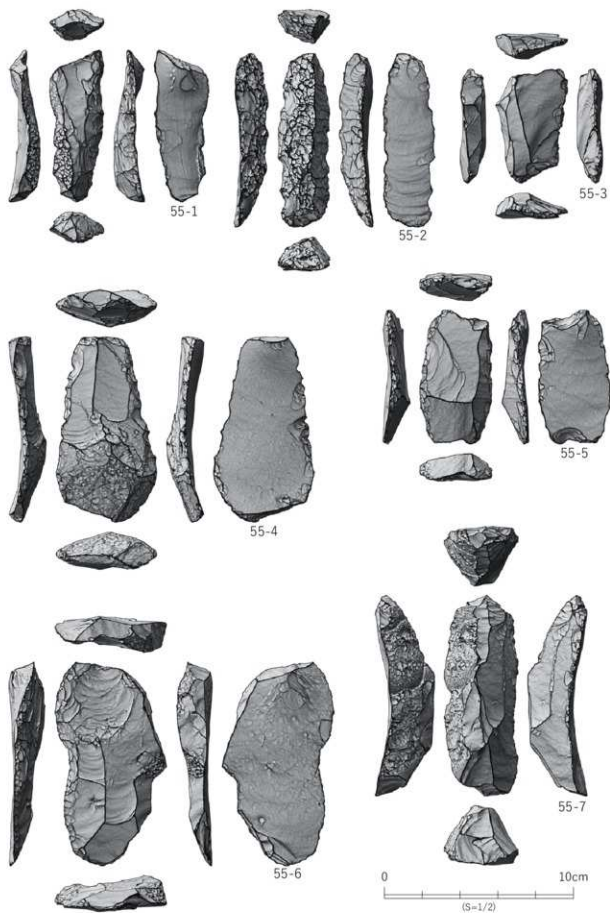
第 52 図 出土石器 (29) 石匙 (6)



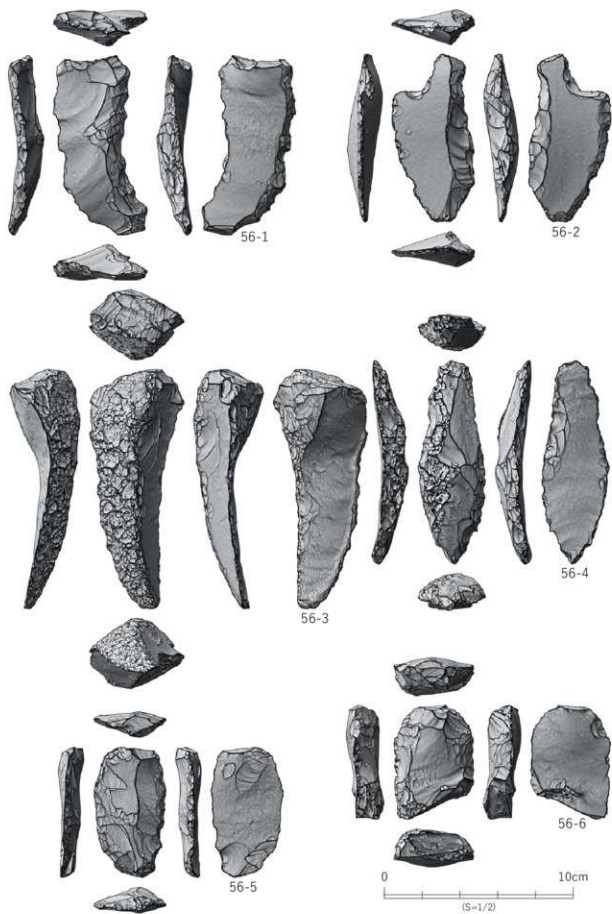
第 53 图 出土石器 (30) 削器 (1)



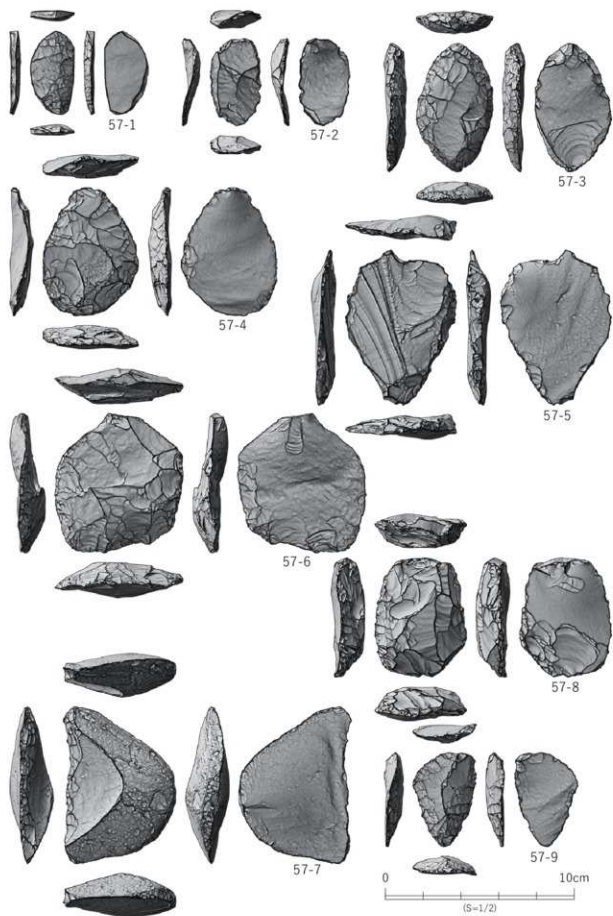
第 54 圖 出土石器 (31) 削器 (2)



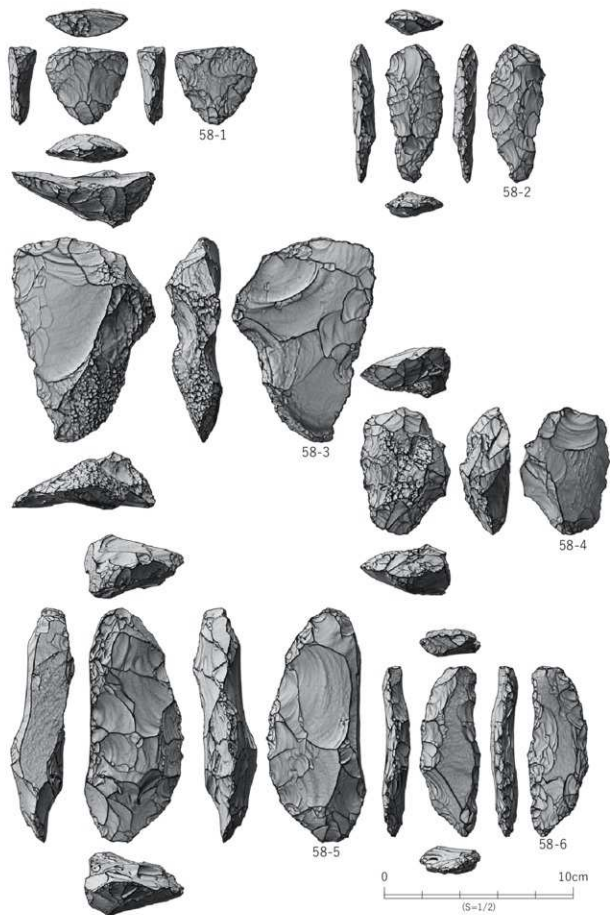
第 55 图 出土石器 (32) 削器 (3)



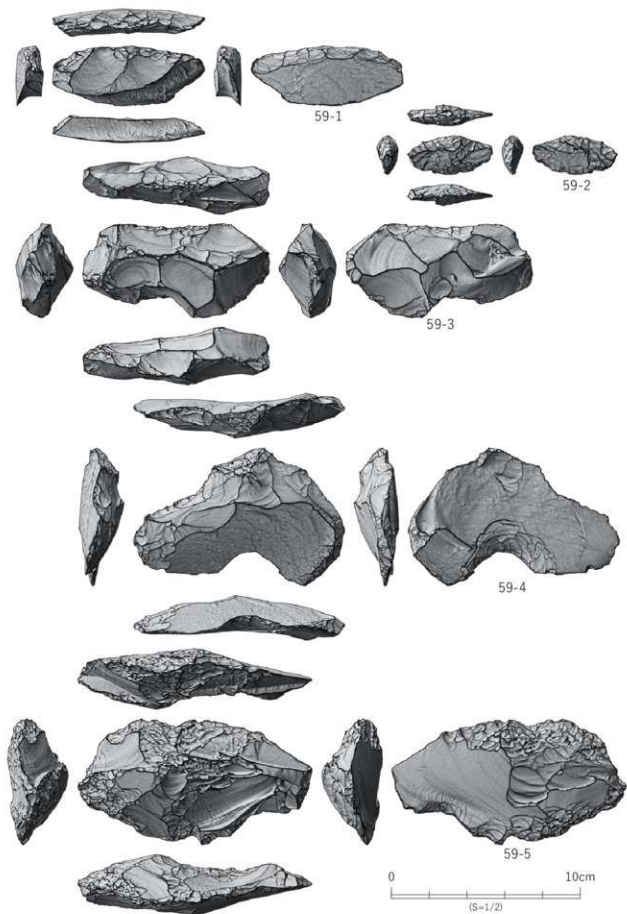
第 56 圖 出土石器 (33) 削器 (4)



第 57 圖 出土石器 (34) 削器 (5)

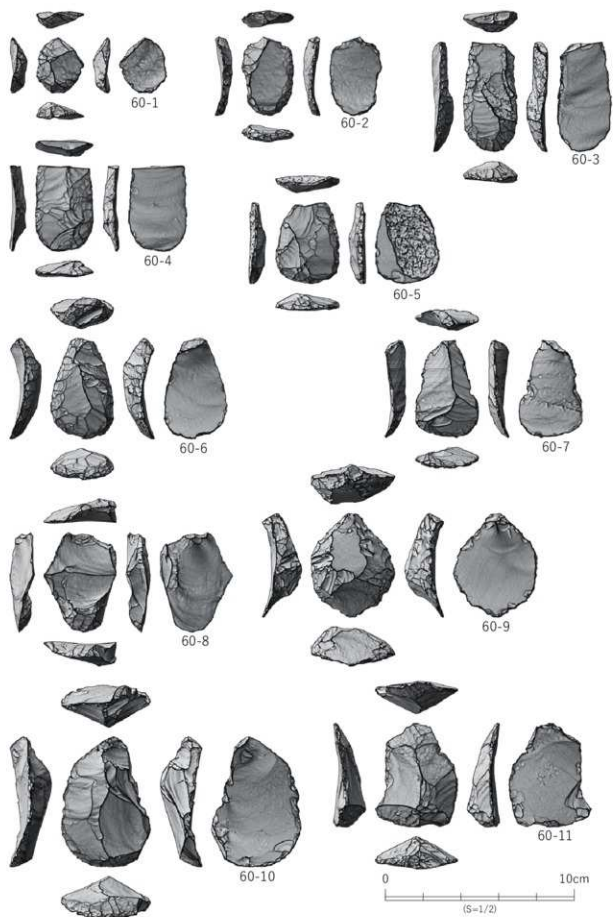


第 58 圖 出土石器 (35) 削器 (6)

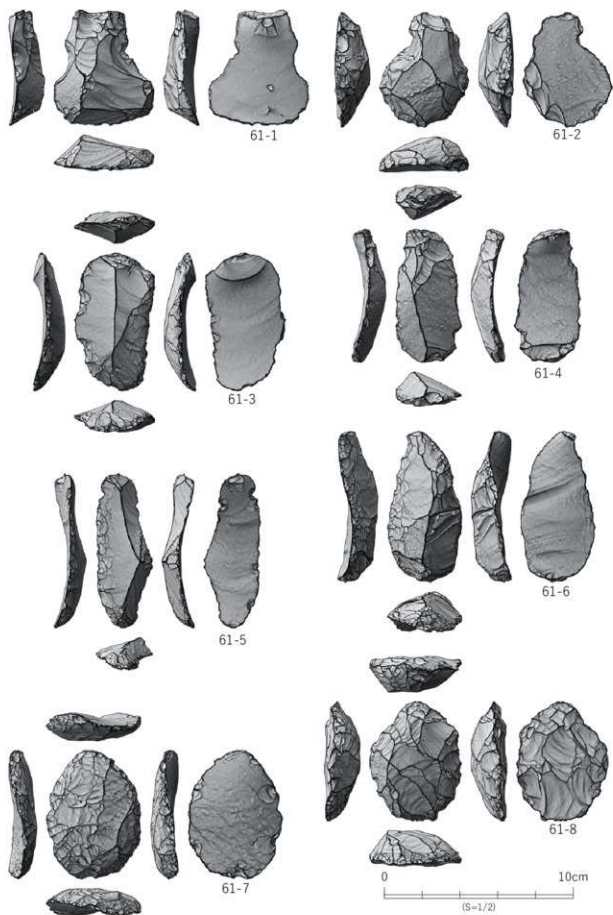


第 59 圖 出土石器 (36) 削器 (7)

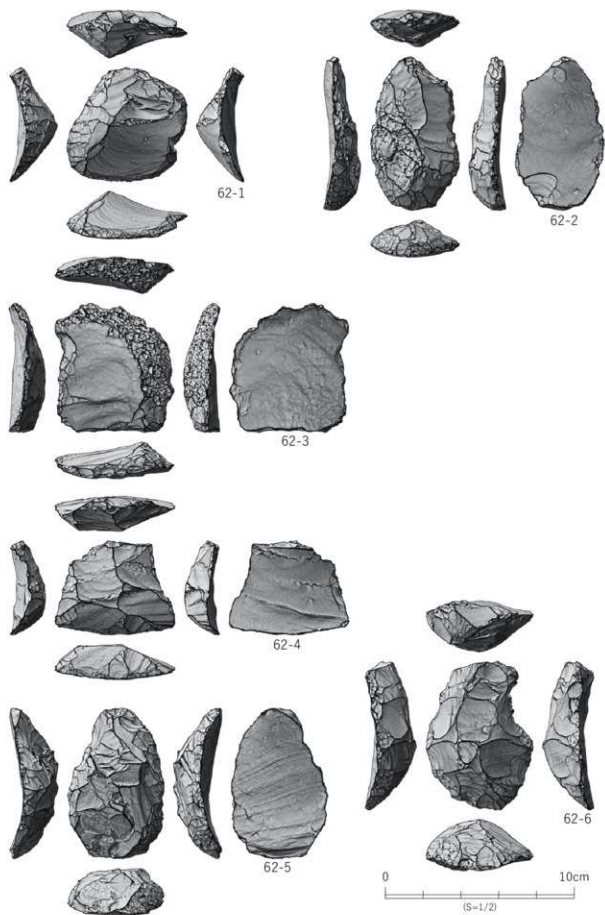




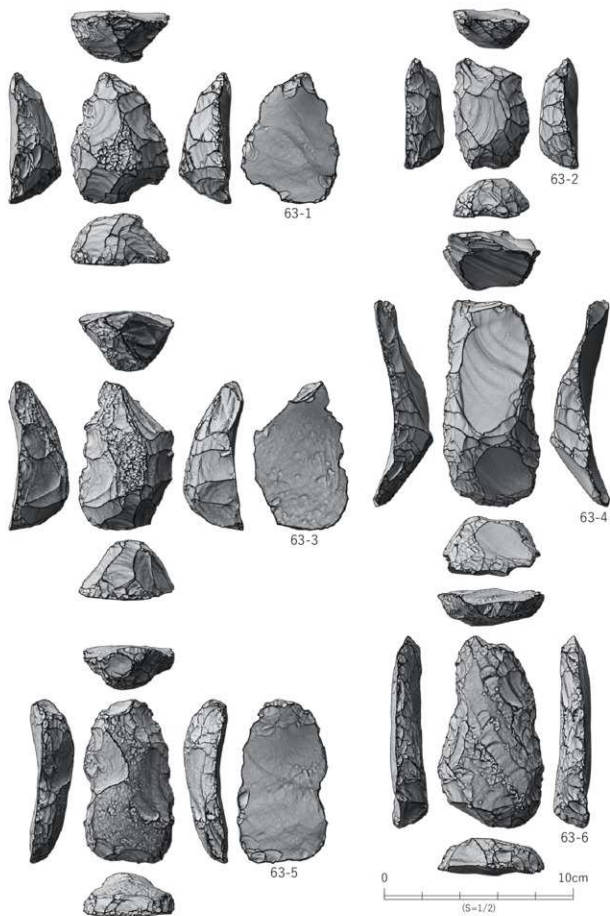
第60圖 出土石器(37) 搔器(1)



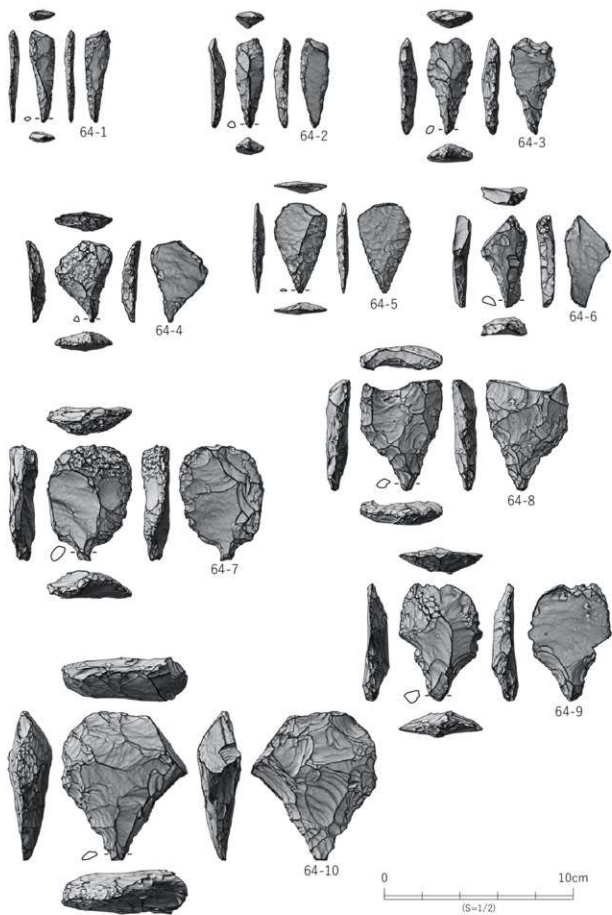
第 61 圖 出土石器 (38) 搔器 (2)



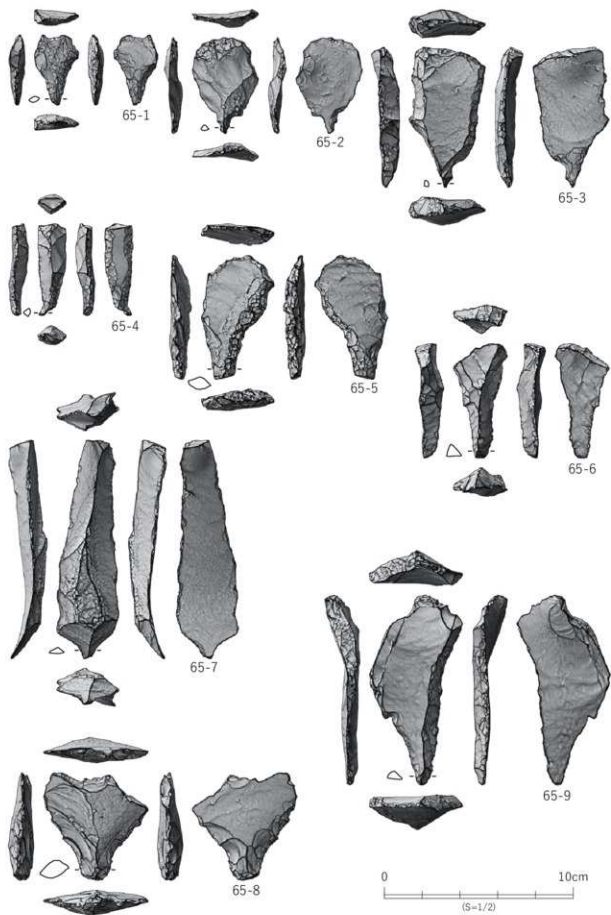
第62圖 出土石器(39) 擗器(3)



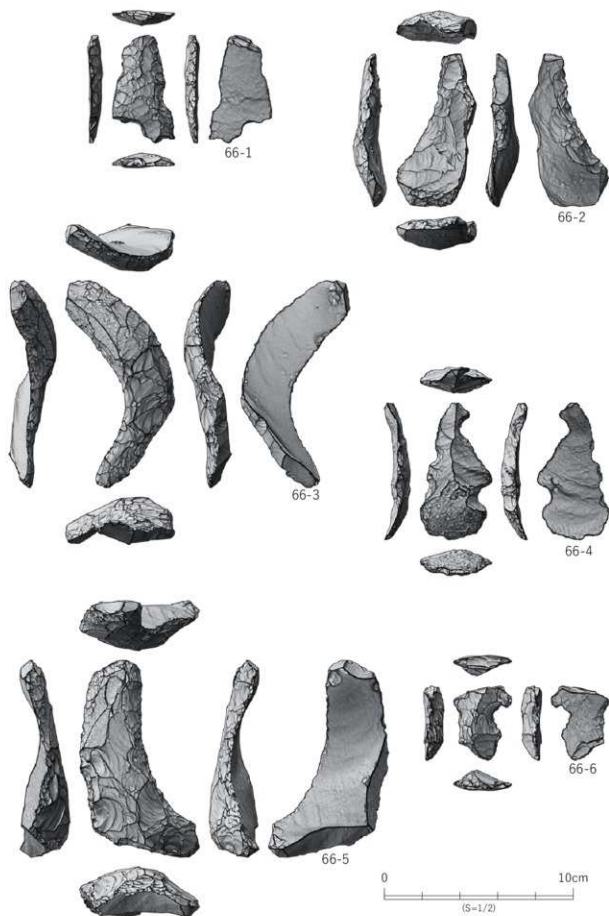
第 63 図 出土石器 (40) 掻器 (4)



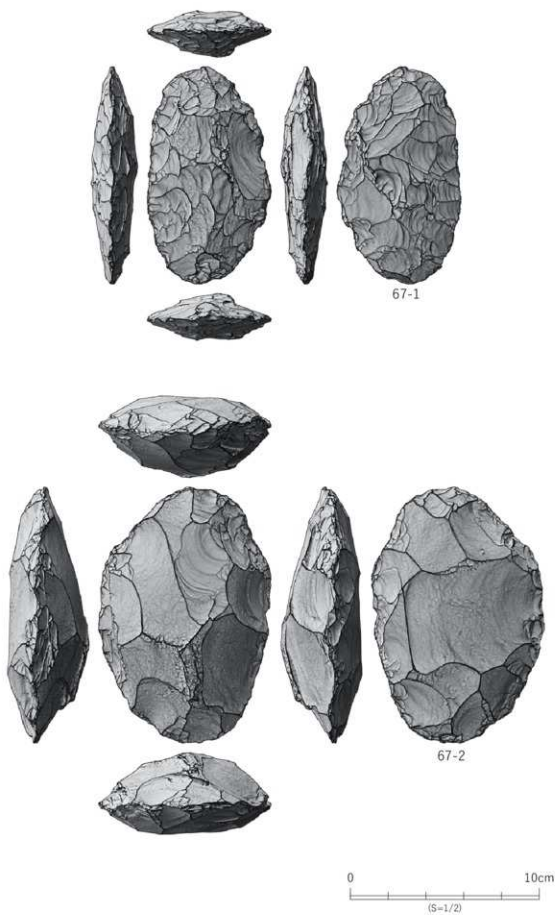
第 64 圖 出土石器 (41) 石錐 (1)



第 65 圖 出土石器 (42) 石錐 (2)

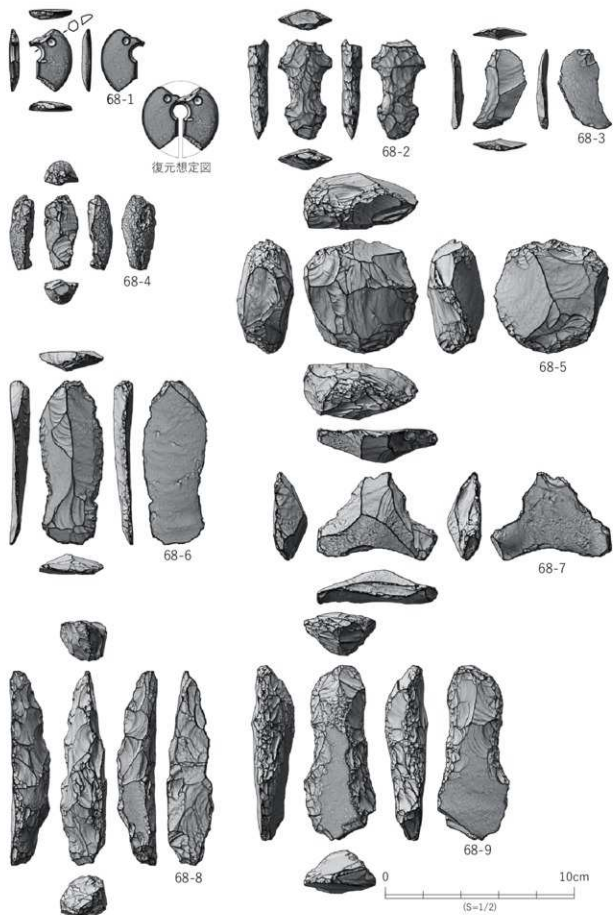


第 66 図 出土石器 (43) ノッチ

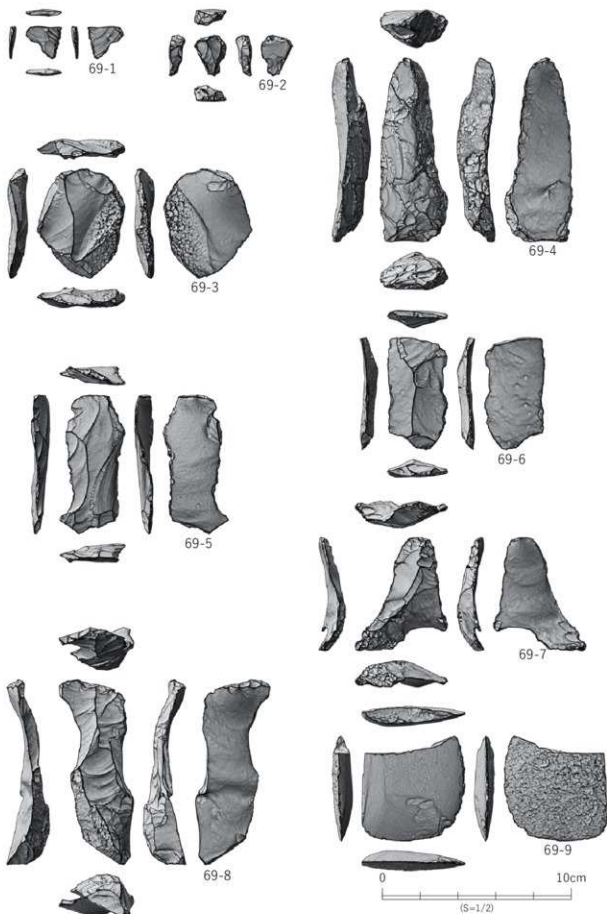


第 67 图 出土石器 (44) 两面调整石器

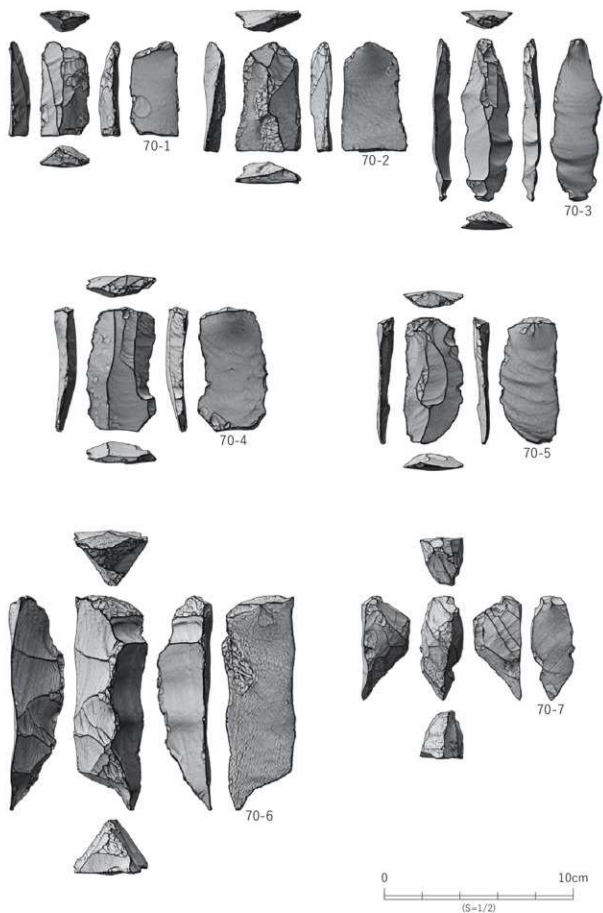




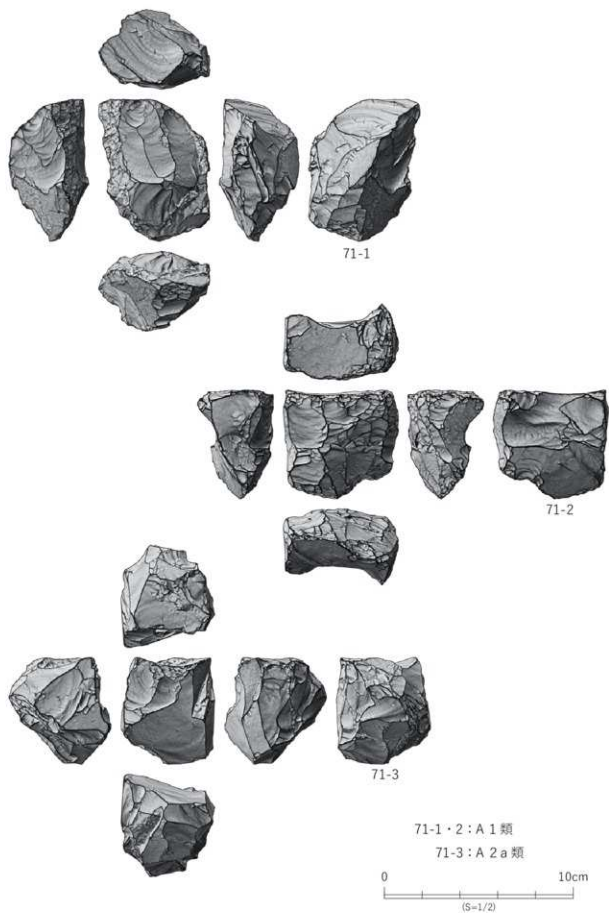
第 68 図 出土石器 (45) 石製品、その他の剝片石器



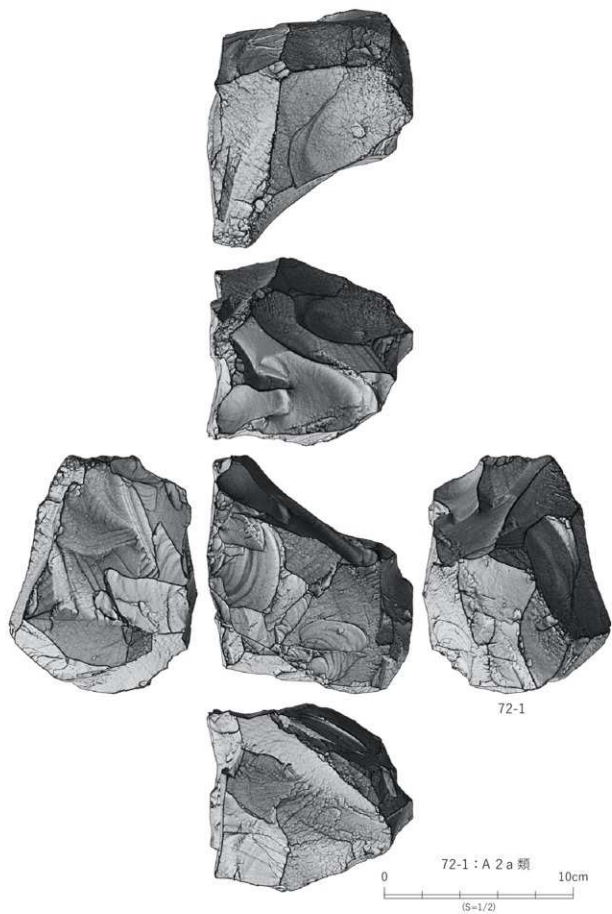
第 69 図 出土石器 (46) 二次加工ある剝片



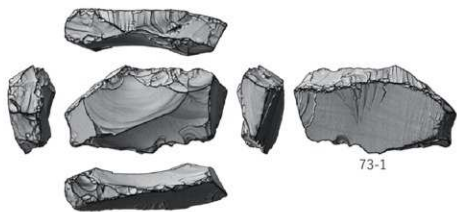
第70図 出土石器(47) 微細剝離痕ある剝片、剥片



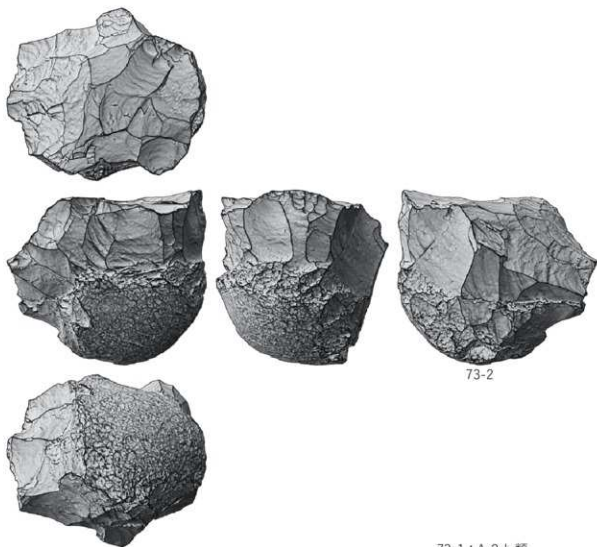
第71圖 出土石器(48) 石核(1)



第 72 圖 出土石器 (49) 石核 (2)



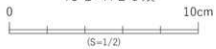
73-1



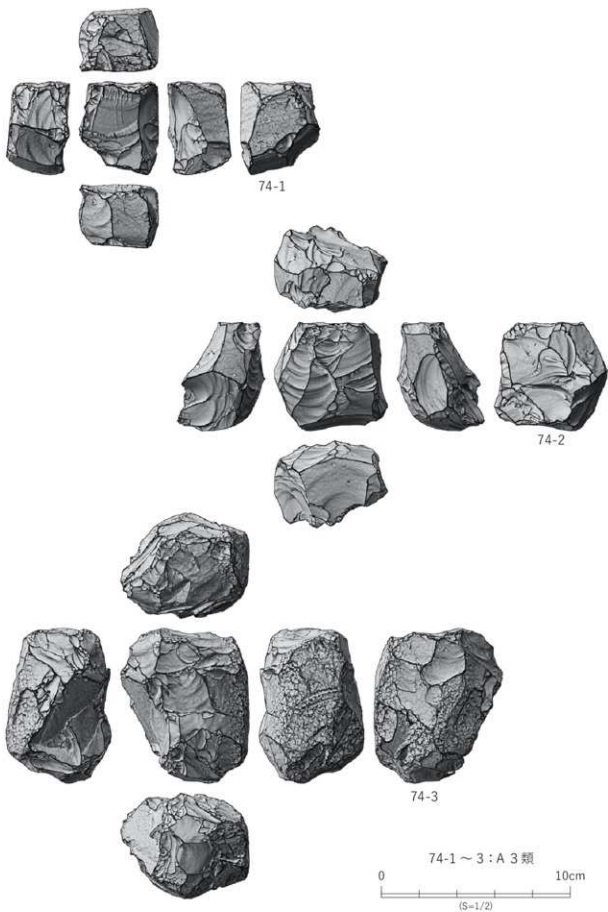
73-2

73-1 : A 2 b類

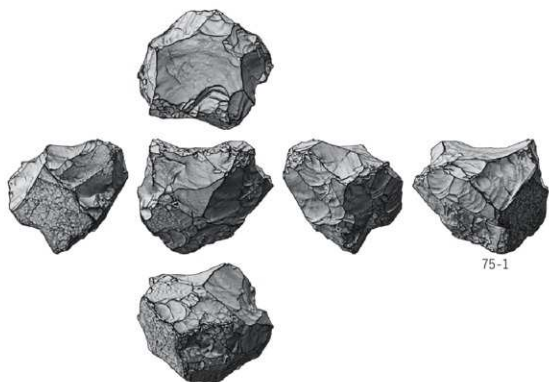
73-2 : A 2 c類



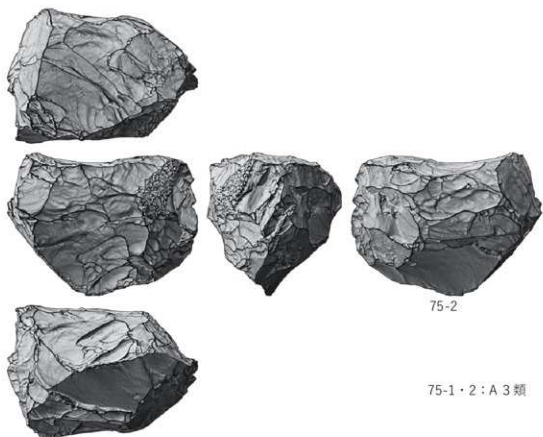
第 73 圖 出土石器 (50) 石核 (3)



第74圖 出土石器(51)石核(4)



75-1



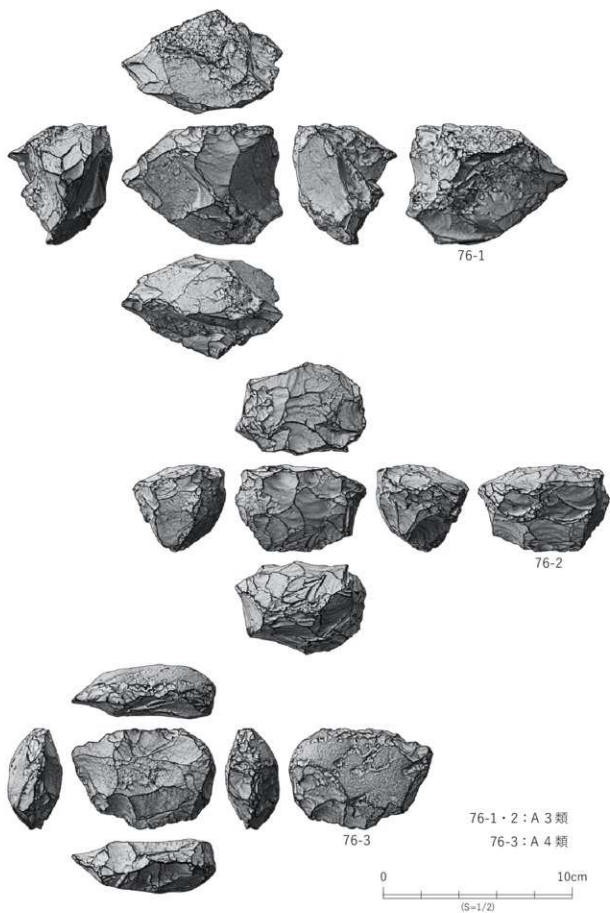
75-2

75-1・2:A 3類

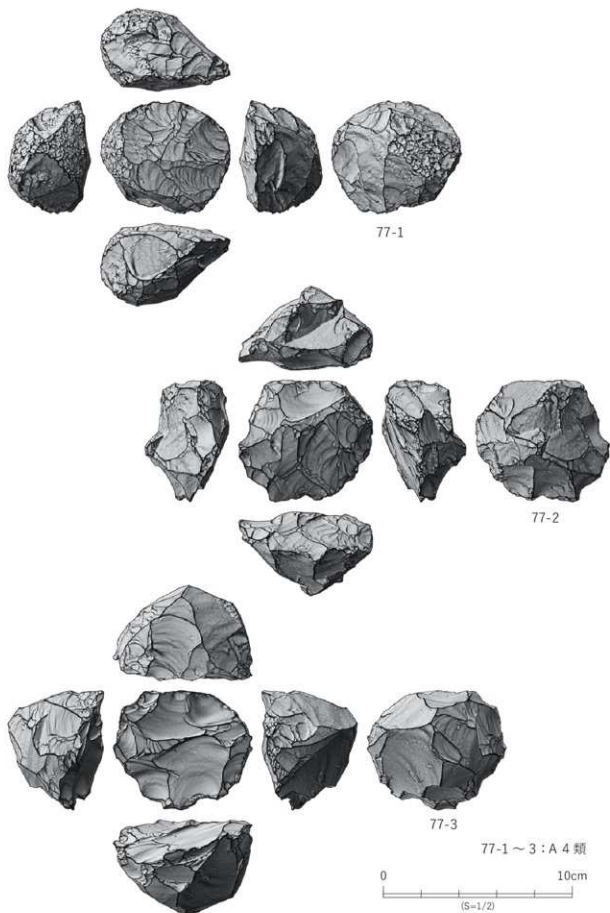


第75圖 出土石器 (52) 石核 (5)

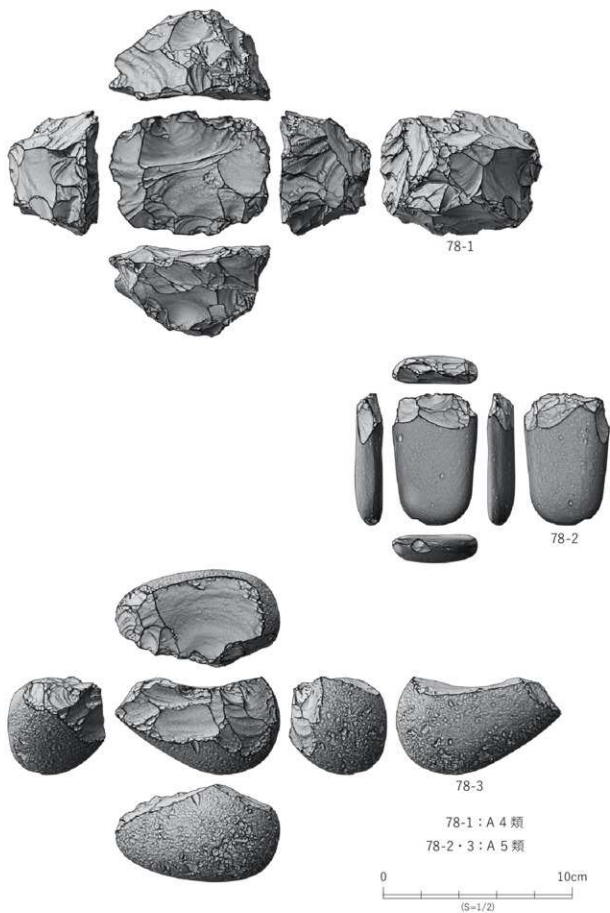




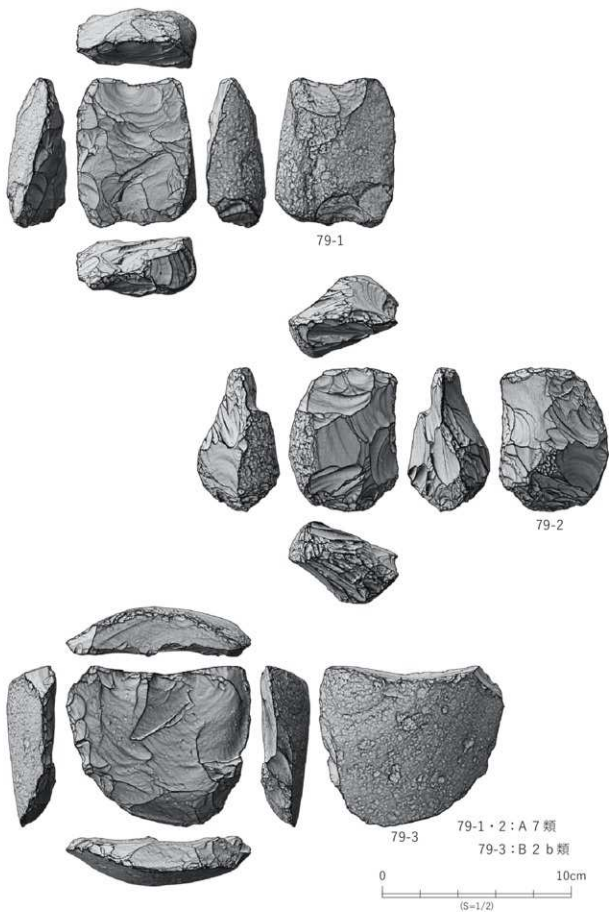
第76圖 出土石器 (53) 石核 (6)



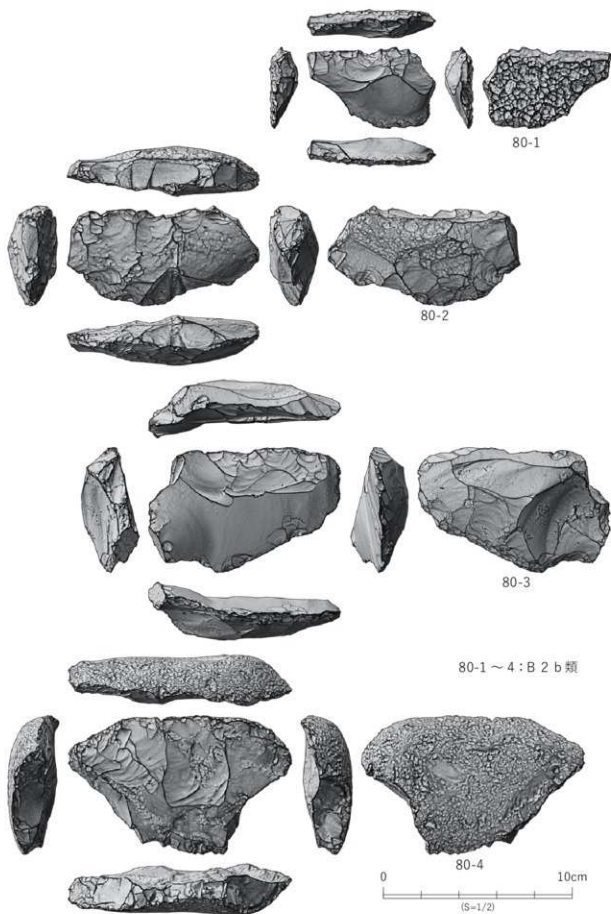
第 77 圖 出土石器 (54) 石核 (7)



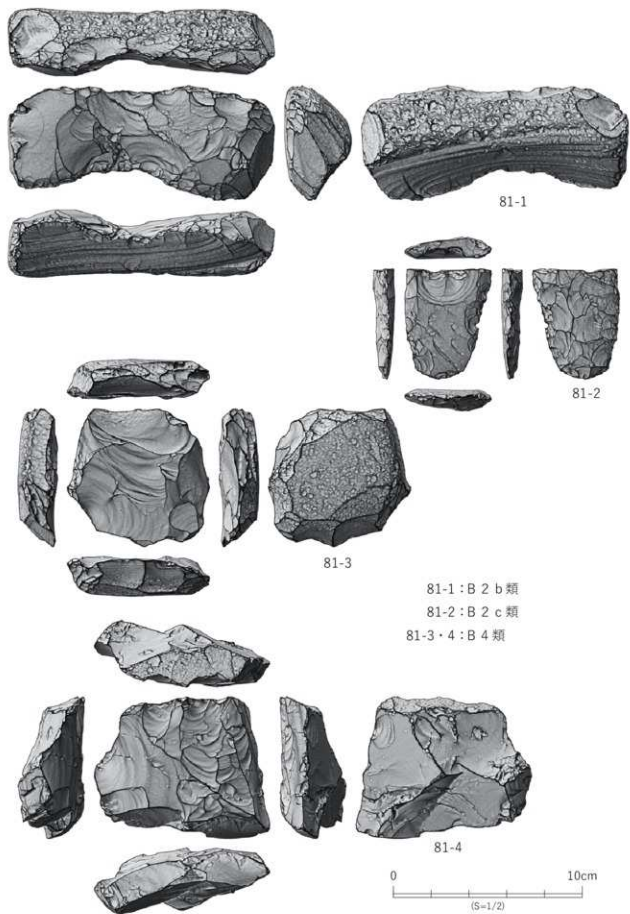
第78圖 出土石器 (55) 石核 (8)



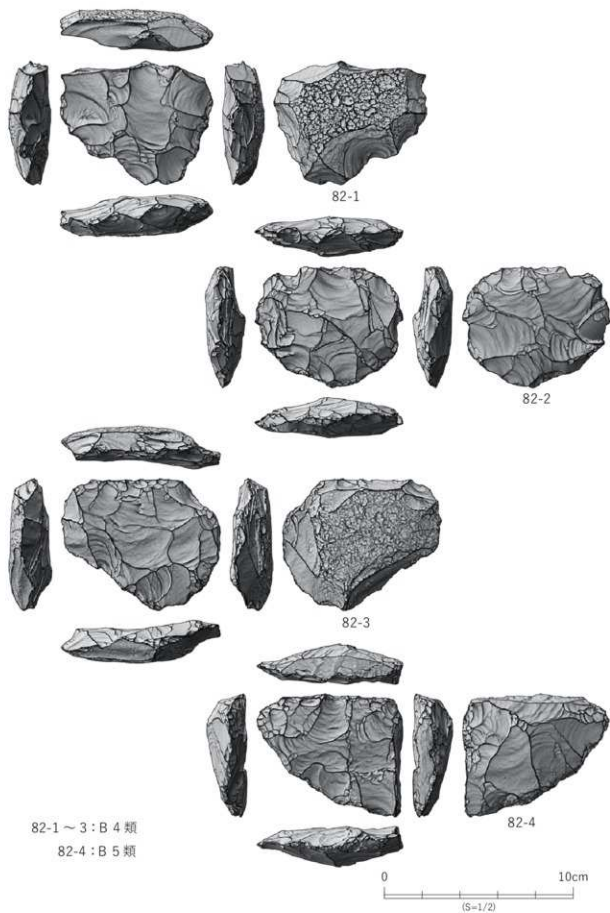
第 79 圖 出土石器 (56) 石核 (9)



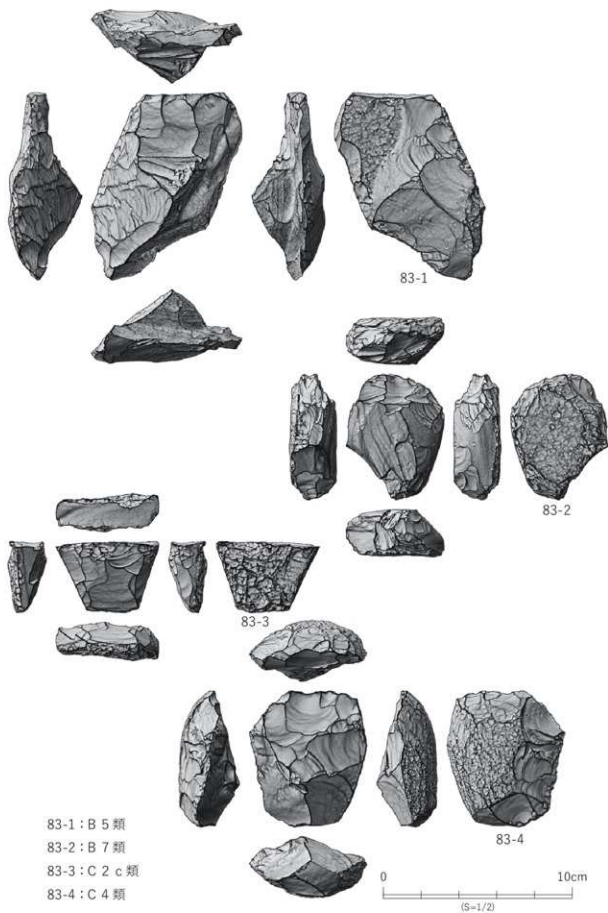
第80圖 出土石器 (57) 石核 (10)



第 81 圖 出土石器 (58) 石核 (11)

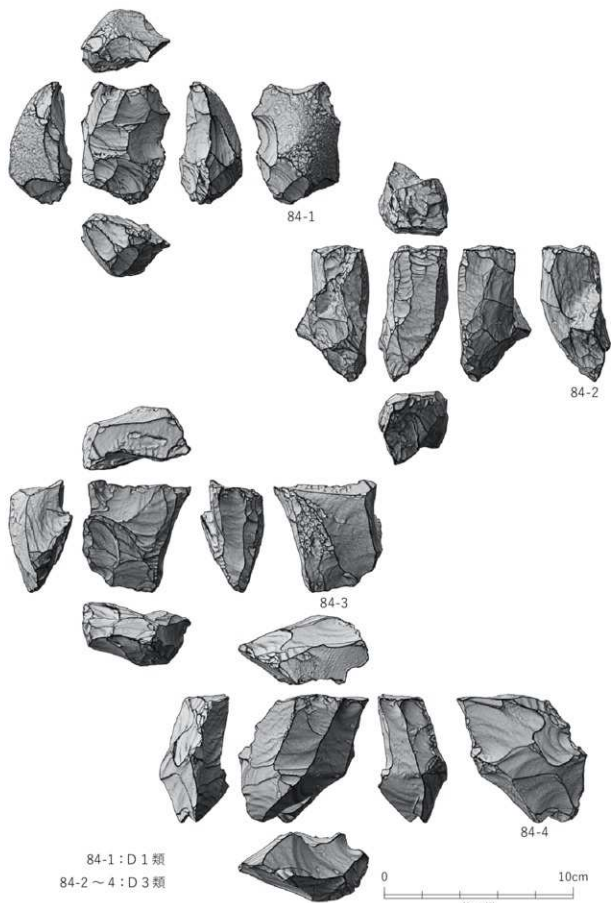


第 82 図 出土石器 (59) 石核 (12)

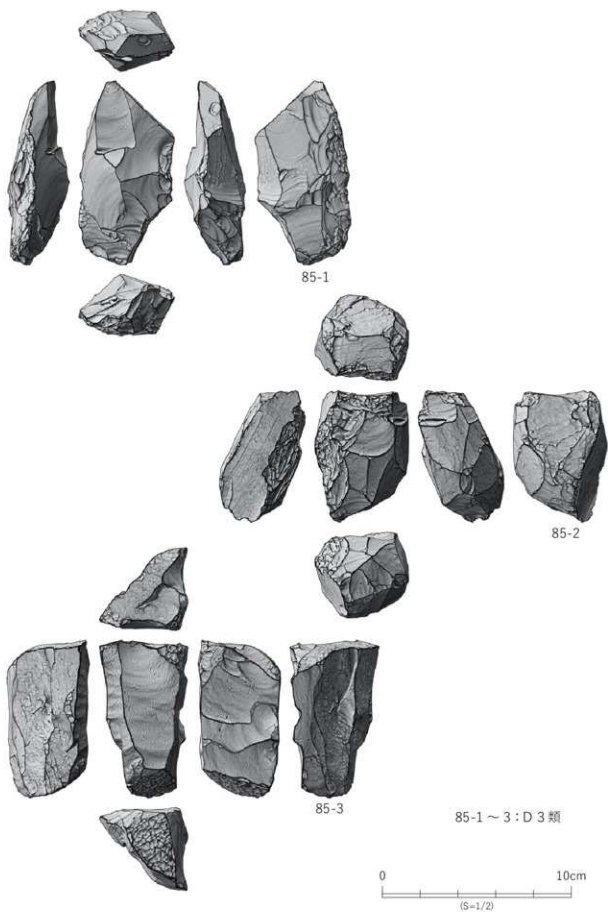


第 83 図 出土石器 (60) 石核 (13)

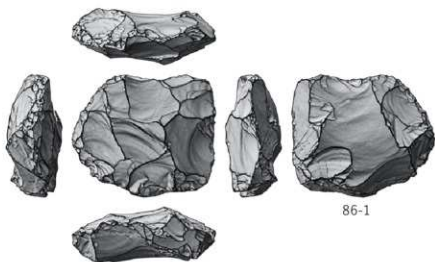




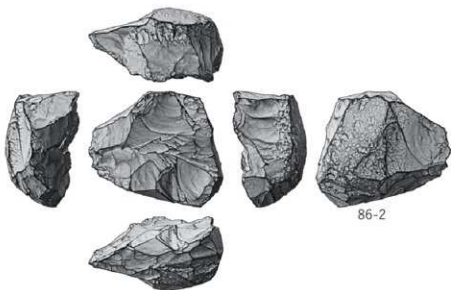
第 84 圖 出土石器 (61) 石核 (14)



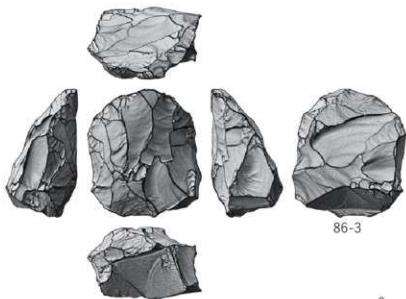
第 85 図 出土石器 (62) 石核 (15)



86-1



86-2



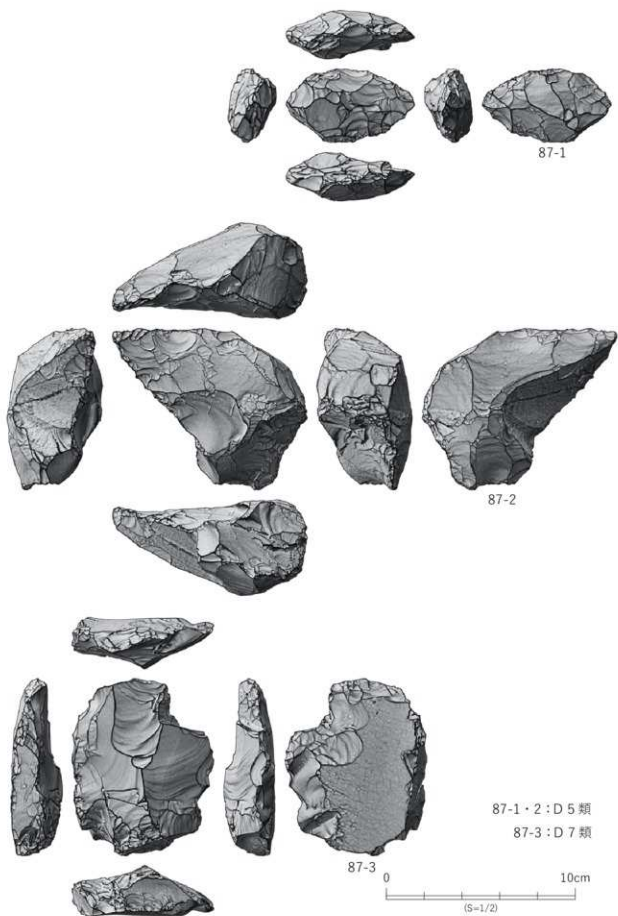
86-3

86-1・2 : D 4類

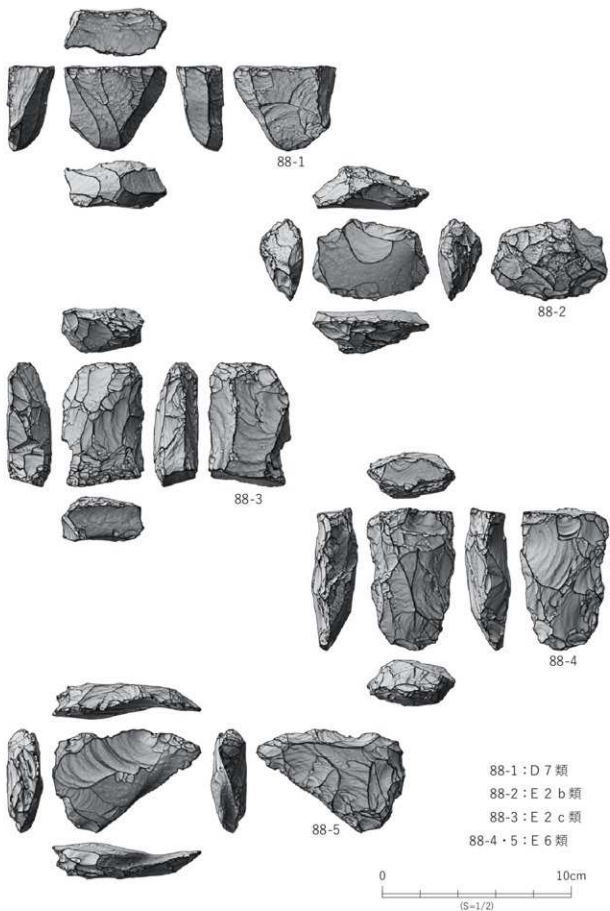
86-3 : D 5類



第 86 図 出土石器 (63) 石核 (16)



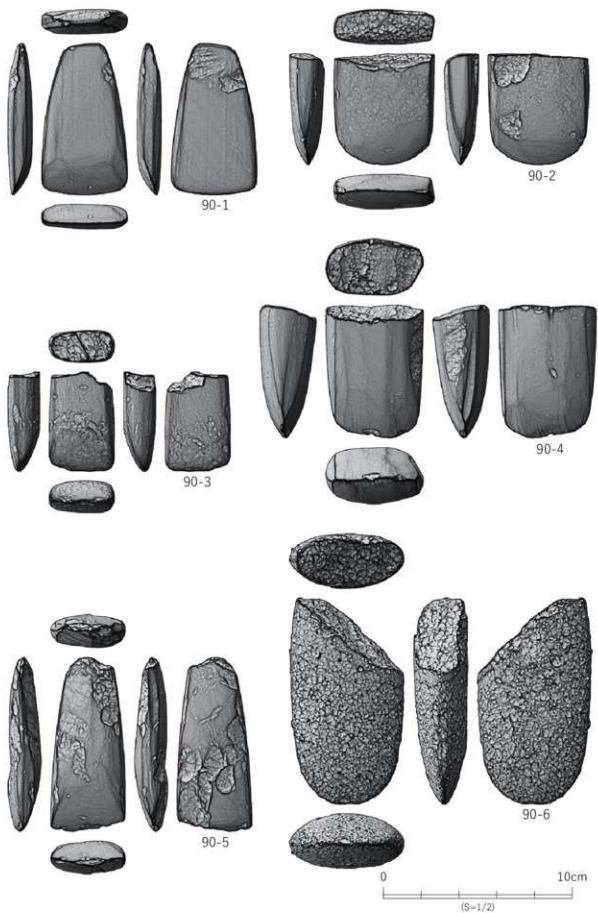
第 87 図 出土石器 (64) 石核 (17)



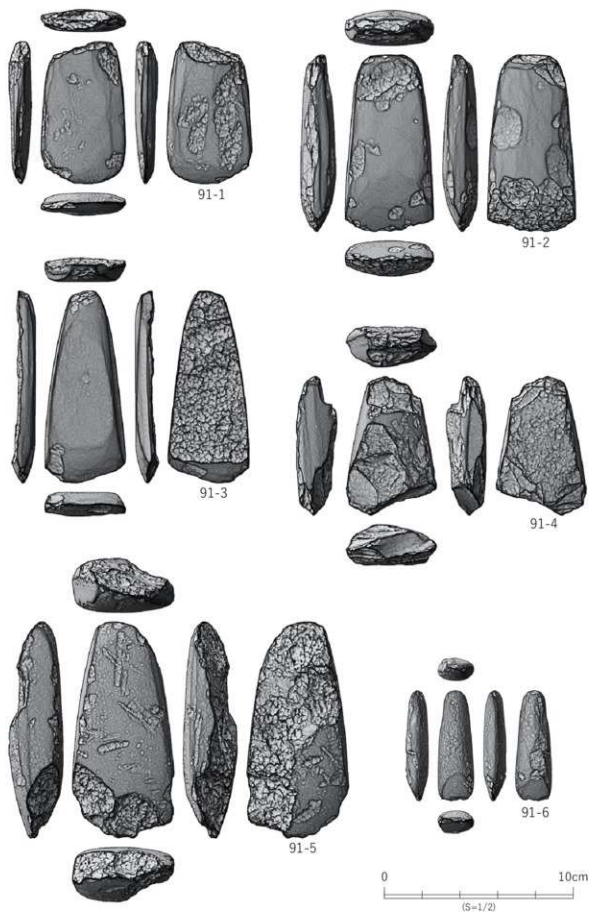
第 88 図 出土石器 (65) 石核 (18)



第 89 図 出土石器 (66) 黒曜石製石器

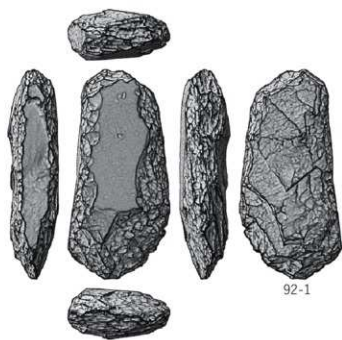


第 90 図 出土石器 (67) 磨製石斧 (1)



第 91 図 出土石器 (68) 磨製石斧 (2)





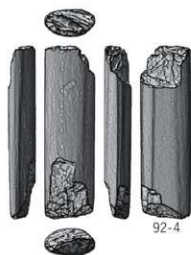
92-1



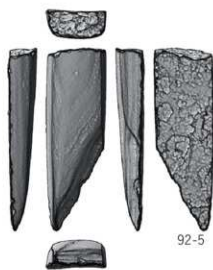
92-3



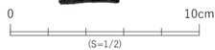
92-2



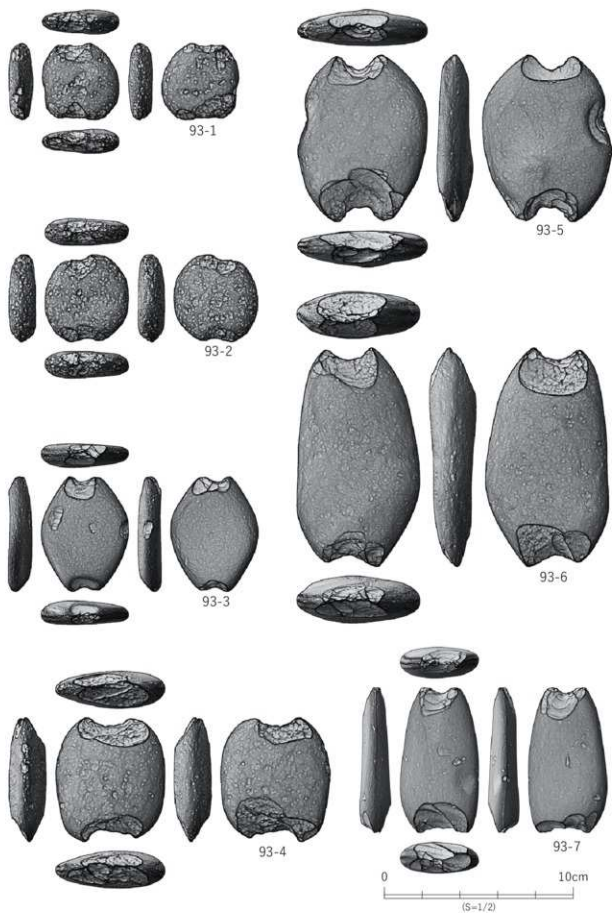
92-4



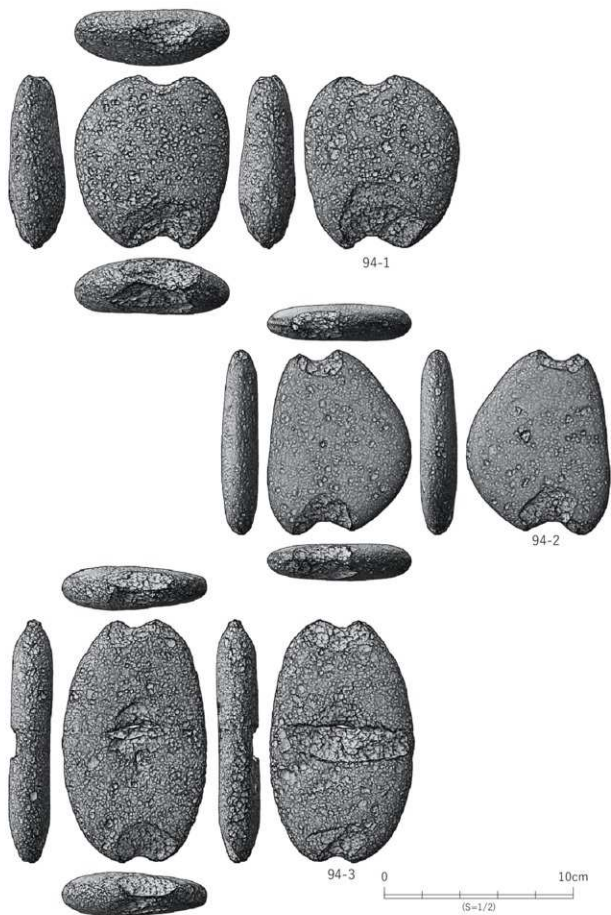
92-5



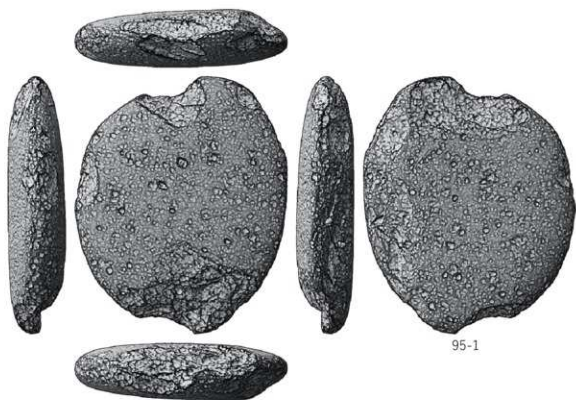
第 92 図 出土石器 (69) 磨製石斧 (3)



第93圖 出土石器 (70) 石錘 (1)



第94圖 出土石器(71)石錘(2)



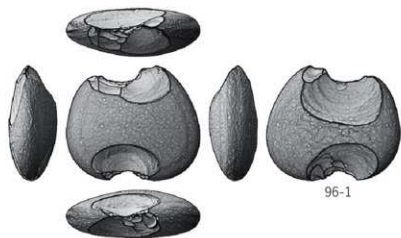
95-1



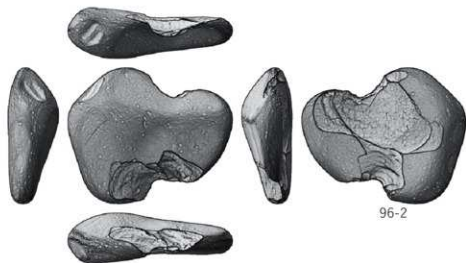
95-2



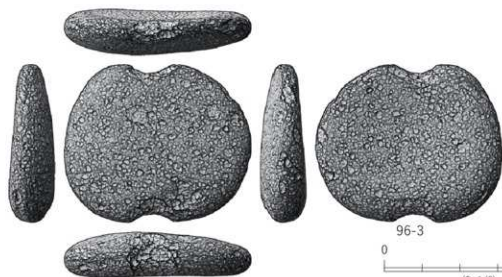
第 95 圖 出土石器 (72) 石錘 (3)



96-1



96-2



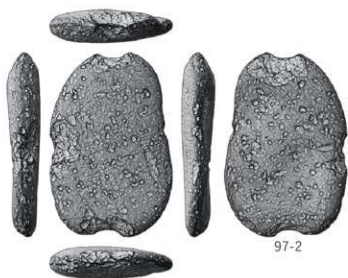
96-3



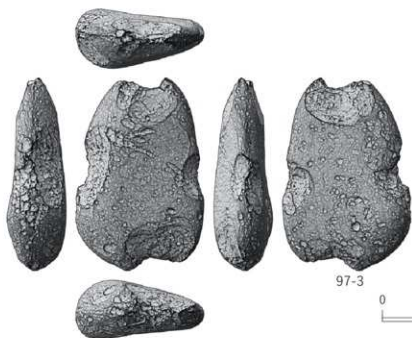
第96圖 出土石器(73)石錘(4)



97-1



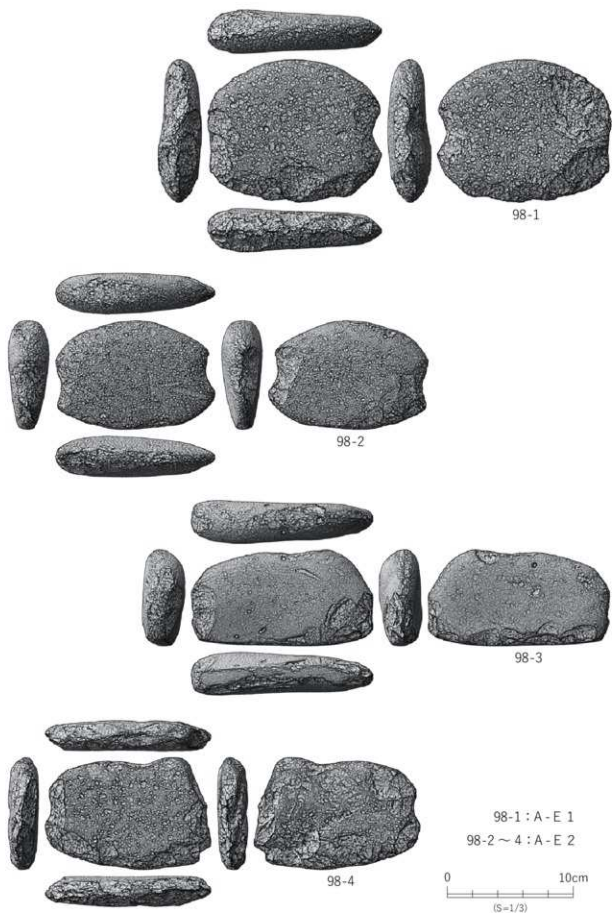
97-2



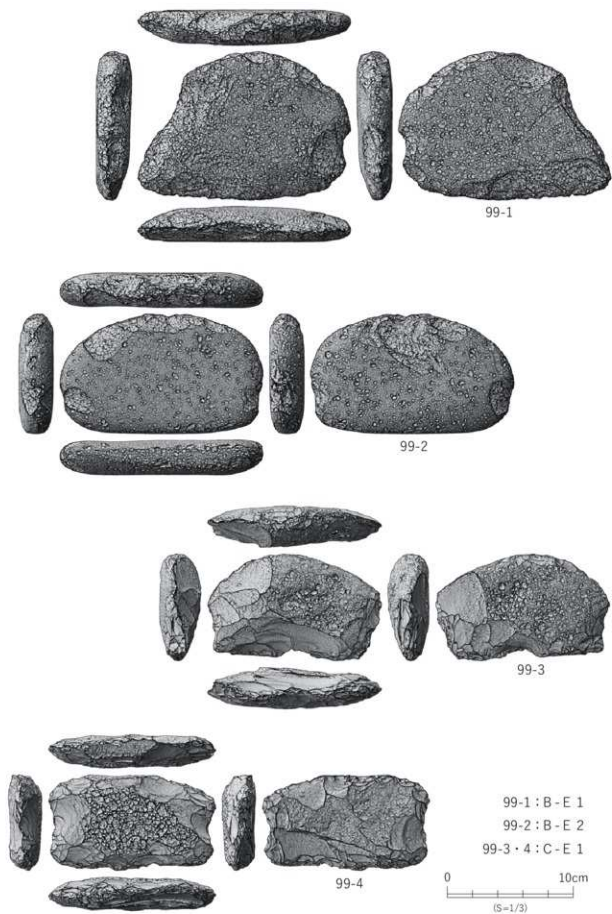
97-3



第97圖 出土石器(74)石錘(5)

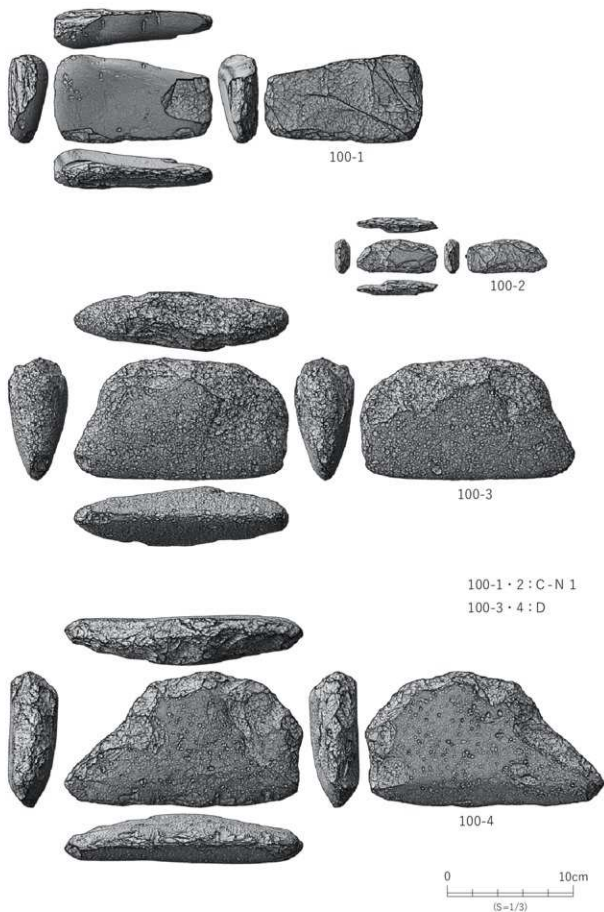


第98図 出土石器(75) 半円状扁平打製石器(1)

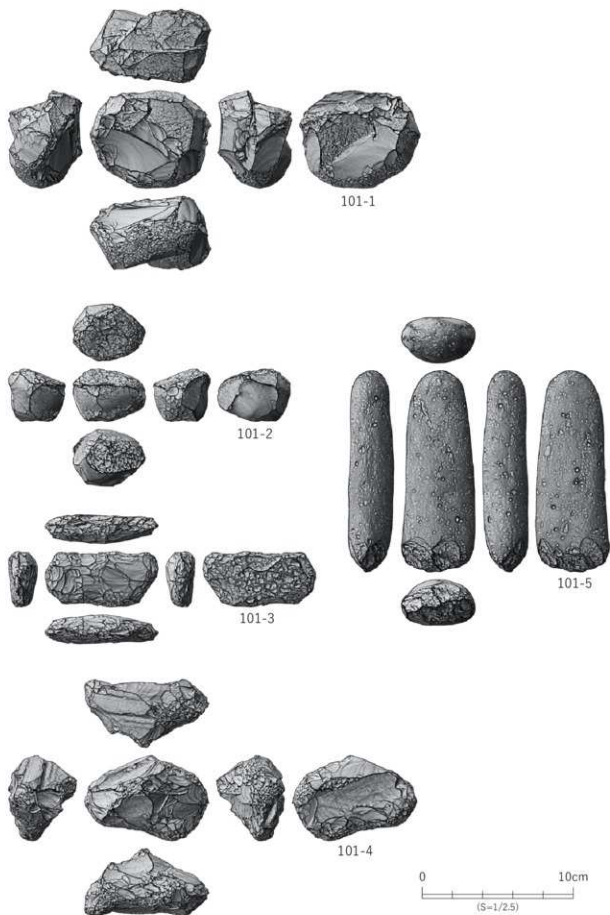


第99図 出土石器(76) 半円状扁平打製石器(2)

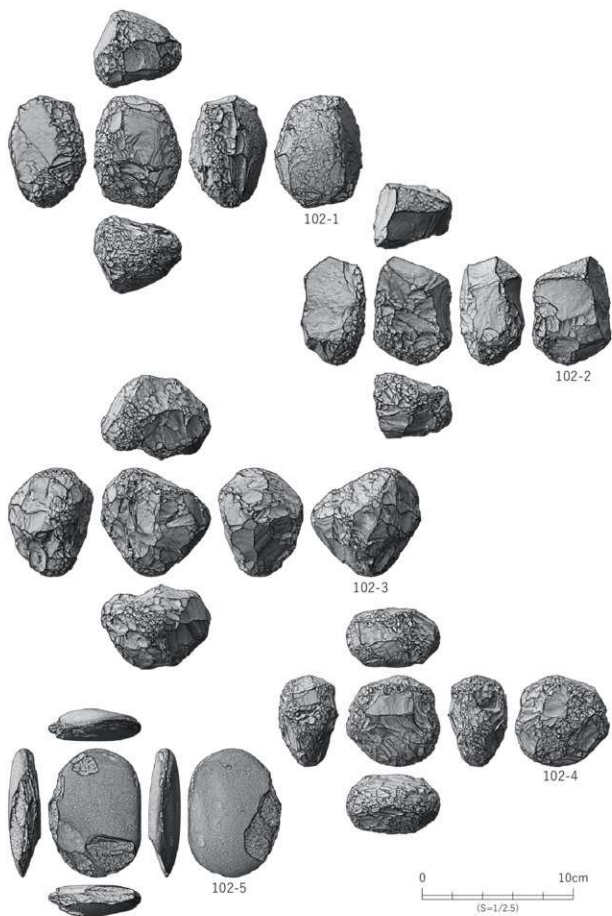




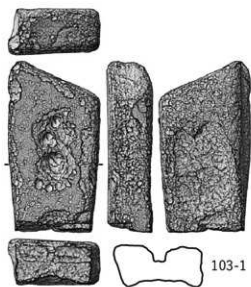
第100図 出土石器(77) 半円状扁平打製石器(3)



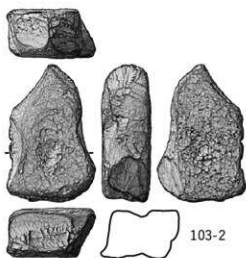
第 101 図 出土石器 (78) 敲石 (1)



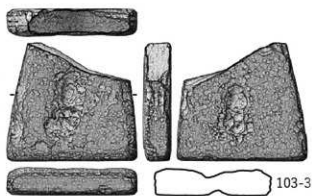
第 102 図 出土石器 (79) 敲石 (2)、礮器



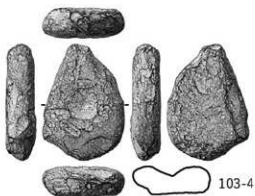
103-1



103-2

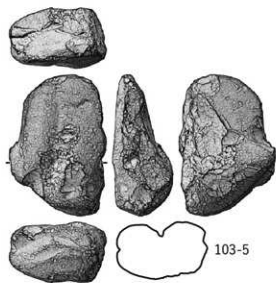


103-3

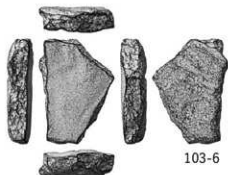


103-4

凹石：103-1～5  
砥石：103-6



103-5



103-6



第103圖 出土石器(80) 凹石、砥石

第2表 報告書掲載石器観察表(1)

棟号 番号	出土 位置	取上 番号	器 種	分類	石 質	法量 (mm)			重さ (g)	委託 番号	備 考
						最大長	最大幅	最大厚			
8-1	SK11	31510	削器		珪質頁岩	31.0	23.5	5.2	4	L474	
8-2	SK15	31511	石核	D3	珪質頁岩	42.5	88.8	43.2	152	L473	
10-1	SK13	27424	石鏃	B	珪質頁岩	50.5	16.4	5.5	4	L004	
10-2	SK13	27425	石鏃		玉髓質頁岩	54.1	31.2	10.9	18	L005	
10-3	SK13	27423	石鏃	AK	珪質頁岩	32.2	33.6	8.3	7	L003	
10-4	SK13	27421	石鏃	A2	珪質頁岩	72.0	34.9	10.7	19	L001	
10-5	SK13	27422	石鏃	A2	珪質頁岩	80.5	39.8	13.5	34	L002	
10-6	SK13	27427	削器		珪質頁岩	84.1	35.8	18.9	62	L007	
10-7	SK13	27426	削器		珪質頁岩	69.7	34.9	20.1	31	L006	
10-8	SK13	27385	石核	D3	珪質頁岩	69.2	49.9	38.2	109	L065	
24-1	LI75	21859	石鏃	A	珪質頁岩	21.4	15.0	1.9	1	L299	
24-2	LI58	2534	石鏃	A	珪質頁岩	35.5	15.0	5.2	2	L154	
24-3	LL74	21192	石鏃	B	珪質頁岩	29.9	9.6	3.0	1	L160	
24-4	LH57	21190	石鏃	B	珪質頁岩	44.0	13.3	4.5	3	L158	
24-5	LH57	21189	石鏃	B	珪質頁岩	47.3	14.0	5.2	3	L157	
24-6	LH72	21193	石鏃	B	珪質頁岩	38.4	12.7	4.8	3	L161	
24-7	LH56	21194	石鏃	B	珪質頁岩	52.0	16.7	5.7	5	L162	
24-8	LJ76	22790	石鏃	B	珪質頁岩	31.5	12.4	5.8	2	L452	
24-9	LE68	3419	石鏃	C	珪質頁岩	26.6	18.2	4.4	2	L152	
24-10	LD69	21200	石鏃	C	珪質頁岩	32.9	18.4	5.1	2	L169	
24-11	LJ77	21201	石鏃	C	珪質頁岩	37.6	18.6	5.3	4	L170	
24-12	LI70	21199	石鏃	C	珪質頁岩	41.0	15.8	4.7	2	L168	
24-13	表採	20418	石鏃	C	珪質頁岩	27.6	16.4	5.0	2	L153	
24-14	LK66	2162	石鏃	C	珪質頁岩	31.4	17.4	4.5	2	L163	
24-15	LK74	21197	石鏃	C	珪質頁岩	37.8	13.3	5.8	3	L166	
24-16	LD72	3808	石鏃	D3	珪質頁岩	50.3	19.1	7.0	7	L151	
24-17	LI58	21196	石鏃	D2	珪質頁岩	28.9	16.0	4.5	2	L164	
24-18	LH68	20419	石鏃	D3	珪質頁岩	34.1	14.3	5.0	2	L155	
24-19	LN76	21198	石鏃	D3	珪質頁岩	30.4	16.3	4.1	2	L167	
24-20	LN67	8929	石鏃	D3	珪質頁岩	37.0	13.2	4.3	2	L150	
24-21	LH58	20420	石鏃	D2	珪質頁岩	30.9	22.1	7.5	4	L156	
24-22	LK74	21191	石鏃	D1	珪質頁岩	25.1	17.2	4.7	2	L159	
24-23	LK76	8982	石鏃	D2	珪質頁岩	33.5	19.1	3.9	2	L165	
24-24	LI80	8981	石鏃	D1	珪質頁岩	36.0	19.8	4.2	3	L149	
24-25	LI73	23301	石鏃未成品		珪質頁岩	44.6	25.4	7.3	9	L439	
25-1	LH57	21211	石鏃未成品		珪質頁岩	24.8	15.0	3.2	1	L276	
25-2	表採	21315	石鏃未成品		黒曜石	23.4	15.8	3.6	1	L300	B4、出来島
25-3	LJ64	6977	石鏃未成品		珪質頁岩	30.2	18.8	6.5	3	L204	
25-4	LI70	9763	石鏃未成品		黒曜石	12.7	13.3	3.6	1	L201	B5、深浦
25-5	LI58	20017	石鏃未成品		珪質頁岩	34.4	14.6	8.3	4	L202	
25-6	LJ72	21715	石鏃未成品		珪質頁岩	30.7	16.2	5.2	3	L280	
25-7	LI67	21412	石鏃未成品		珪質頁岩	46.8	35.1	16.6	24	L275	
25-8	表採	21235	石鏃未成品		珪質頁岩	39.2	24.8	10.4	7	L281	
25-9	LK73	21625	石鏃未成品		珪質頁岩	41.1	31.4	6.5	8	L274	
25-10	LI60	20301	石鏃未成品		珪質頁岩	25.4	21.1	5.5	3	L203	
25-11	LK74	21554	石鏃未成品		珪質頁岩	35.8	24.2	5.4	5	L277	
25-12	LG67	21234	石鏃未成品		珪質頁岩	35.5	21.6	9.2	5	L279	
25-13	表採	21678	石鏃未成品		珪質頁岩	41.7	25.1	9.0	10	L278	
25-14	LI60	28599	石鏃未成品		玉髓質頁岩	26.8	15.9	4.8	2	L451	
25-15	LH73	10871	石鏃未成品		珪質頁岩	46.0	14.6	5.8	4	L441	
25-16	LG83	10098	石鏃未成品		珪質頁岩	36.6	26.6	6.4	8	L437	
25-17	表採	23261	石鏃未成品		珪質頁岩	48.2	23.6	10.2	10	L440	

第2表 報告書掲載石器観察表(2)

棟号 番号	出土 位置	取上 番号	器 種	分類	石 質	法量 (mm)			重さ (g)	委託 番号	備 考
						最大長	最大幅	最大厚			
25-18	LI71	23284	石鏃未成品		珪質頁岩	37.8	21.2	9.6	6	L450	
25-19	LI71	28731	石鏃未成品		珪質頁岩	37.6	20.2	5.8	3	L438	
26-1	LD71	3620	石 槍		珪質頁岩	41.8	22.2	8.3	9	L048	
26-2	LH76	21725	石 槍		珪質頁岩	76.3	27.6	13.1	28	L380	
26-3	LI73	21316	石 槍		珪質頁岩	83.0	30.8	11.5	30	L381	ノッチあり
26-4	表採	21337	石 槍		珪質頁岩	93.2	26.7	11.7	27	L384	
26-5	LD70	21585	石 槍		珪質頁岩	86.1	28.0	14.8	38	L379	
26-6	LH73	20143	石 槍		珪質頁岩	92.0	28.0	17.7	50	L050	
26-7	LI60	1301	石 槍		珪質頁岩	131.1	41.5	14.9	80	L052	
26-8	LJ76	10629	石 槍		珪質頁岩	133.3	33.3	12.2	47	L053	
27-1	LH58	21546	石 槍		珪質頁岩	106.8	33.9	15.3	50	L386	先端再加工
27-2	LK75	21228	石 槍		珪質頁岩	104.9	32.6	23.8	65	L385	
27-3	LG57	21703	石 槍		珪質頁岩	56.8	29.3	11.7	21	L376	
27-4	LJ75	20234	石 槍		珪質頁岩	87.5	36.2	12.6	39	L051	
27-5	LH56	21367	石 槍		珪質頁岩	63.5	30.8	7.2	15	L375	
27-6	LF75	21407	石 槍		珪質頁岩	68.7	43.3	16.7	49	L382	
27-7	LI62	20250	石 槍		珪質頁岩	74.0	38.1	11.6	29	L049	
28-1	LJ73	21206	石 槍		珪質頁岩	56.8	42.0	11.2	28	L378	
28-2	LK76	21429	石 槍		珪質頁岩	80.5	58.0	18.1	87	L383	
28-3	LM74	21604	石 槍		珪質頁岩	47.6	26.9	5.7	8	L377	
28-4	LI74	20083	石 槍		珪質頁岩	43.5	19.8	9.1	8	L026	
28-5	LD73	11736	石 槍		珪質頁岩	68.6	21.6	9.3	16	L227	
28-6	表採	21424	石鏃未成品		珪質頁岩	64.5	35.5	13.2	28	L307	
28-7	表採	21348	石鏃未成品		珪質頁岩	66.2	30.6	18.4	28	L305	
28-8	LI73	21856	石鏃未成品		珪質頁岩	65.0	31.4	13.2	21	L282	
28-9	LJ77	21506	石鏃未成品		珪質頁岩	66.8	27.4	12.2	19	L283	
29-1	LJ79	20210	石鏃未成品		珪質頁岩	105.3	32.8	18.9	57	L033	
29-2	LH76	21531	石鏃未成品		珪質頁岩	68.6	29.1	11.5	25	L310	
29-3	LE70	20126	石鏃未成品		珪質頁岩	96.5	37.0	15.8	60	L030	
29-4	表採	20035	石鏃未成品		珪質頁岩	86.5	37.5	19.8	65	L028	
29-5	LH58	21610	石鏃未成品		珪質頁岩	90.8	36.0	26.6	71	L286	
29-6	LK75	20134	石鏃未成品		珪質頁岩	89.5	27.9	22.4	45	L029	
30-1	LI60	21242	石鏃未成品		珪質頁岩	136.1	38.4	20.4	92	L292	
30-2	LH64	6769	石鏃未成品		珪質頁岩	120.5	34.1	28.1	91	L224	
30-3	LJ77	21580	石鏃未成品		珪質頁岩	102.0	41.0	26.8	101	L288	
30-4	LO68	8935	石鏃未成品		珪質頁岩	102.9	28.0	18.9	53	L228	
30-5	LH57	20077	石鏃未成品		珪質頁岩	53.4	29.2	13.6	21	L027	
30-6	表採	20041	石鏃未成品		珪質頁岩	52.1	28.3	13.7	22	L031	
31-1	LD72	3777	石鏃未成品		珪質頁岩	114.0	35.1	23.1	93	L229	
31-2	LI75	20034	石鏃未成品		珪質頁岩	86.4	44.1	19.2	62	L020	
31-3	LG72	20884	石鏃未成品		珪質頁岩	46.7	34.0	10.2	15	L034	
31-4	LJ75	21660	石鏃未成品		珪質頁岩	103.1	63.1	26.8	156	L287	
31-5	LI74	21547	石鏃未成品		珪質頁岩	90.5	53.8	24.6	127	L290	
31-6	LH70	20043	石鏃未成品		珪質頁岩	78.0	40.4	20.8	57	L019	
32-1	LI67	21285	石鏃未成品		珪質頁岩	92.8	56.8	24.2	125	L291	
32-2	LK62	1376	石鏃未成品		珪質頁岩	68.0	36.1	13.4	35	L225	
32-3	LI73	20073	石鏃未成品		珪質頁岩	68.7	51.6	15.2	54	L025	
32-4	LI78	20172	石鏃未成品		珪質頁岩	63.4	61.9	24.8	89	L032	
32-5	LI72	20055	石鏃未成品		珪質頁岩	43.3	22.1	10.4	8	L021	
32-6	LH57	20113	石鏃未成品		珪質頁岩	53.8	52.1	25.4	74	L022	
32-7	LH67	21451	石鏃未成品		珪質頁岩	68.2	50.4	24.6	83	L284	
33-1	LJ75	21338	石鏃未成品		珪質頁岩	63.8	27.4	19.4	33	L306	

第2表 報告書掲載石器観察表(3)

棟号 番号	出土 位置	取上 番号	器 種	分類	石 質	法量 (mm)			重さ (g)	委託 番号	備 考
						最大長	最大幅	最大厚			
33-2	LH61	20148	石槍未成品		珪質頁岩	81.3	38.4	17.4	48	L023	
33-3	LE73	21328	石槍未成品		珪質頁岩	73.5	40.0	19.2	57	L303	
33-4	L173	21292	石槍未成品		珪質頁岩	90.2	45.6	19.9	70	L308	
33-5	LE73	21306	石槍未成品		珪質頁岩	58.5	41.5	13.1	31	L304	
33-6	LE71	20262	石槍未成品		珪質頁岩	73.8	38.8	19.4	55	L024	
33-7	L174	21579	石槍未成品		珪質頁岩	63.5	31.9	11.4	25	L309	
34-1	L159	6358	石槍未成品		珪質頁岩	71.8	49.6	20.5	64	L226	
34-2	LJ74	21496	石槍未成品		珪質頁岩	80.2	40.7	13.2	36	L285	
34-3	LG65	3062	石槍未成品		珪質頁岩	108.5	50.6	26.4	126	L460	
34-4	LI62	7609	石槍未成品		珪質頁岩	36.8	28.7	11.8	11	L454	
34-5	LE75	11658	石槍未成品		珪質頁岩	86.2	30.1	22.7	67	L435	
34-6	LH71	21857	石槍未成品		珪質頁岩	97.6	37.9	14.5	66	L289	
35-1	LI73	20886	石 籠		玉髓質頁岩	48.3	16.2	7.8	5	L066	
35-2	表採	21366	石 籠		珪質頁岩	75.2	24.4	12.1	28	L316	
35-3	LH59	2525	石 籠		珪質頁岩	72.2	32.3	17.1	45	L072	
35-4	LK75	20131	石 籠		珪質頁岩	64.2	22.4	7.5	9	L075	
35-5	表採	20160	石 籠		珪質頁岩	45.8	31.1	14.3	22	L069	
35-6	LG56	11105	石 籠		珪質頁岩	82.7	33.1	10.8	35	L073	
35-7	表採	21706	石 籠		珪質頁岩	110.7	27.4	19.4	63	L311	
35-8	LF73	4104	石 籠		珪質頁岩	85.0	37.6	12.8	50	L070	
35-9	L173	12499	石 籠		珪質頁岩	118.7	37.2	25.1	100	L088	
36-1	L175	21627	石 籠		珪質頁岩	99.5	37.2	18.4	66	L323	
36-2	L172	21690	石 籠		珪質頁岩	86.2	34.5	20.9	67	L324	
36-3	LH58	6089	石 籠		珪質頁岩	91.8	38.0	19.1	71	L087	
36-4	LH58	21238	石 籠		珪質頁岩	94.5	33.5	20.4	56	L322	
36-5	LI71	9931	石 籠		玉髓質頁岩	82.0	32.5	19.2	52	L076	
36-6	LE71	20019	石 籠		珪質頁岩	77.0	34.5	16.8	47	L074	
37-1	LI59	20236	石 籠		珪質頁岩	64.3	33.2	10.8	24	L080	
37-2	LJ77	21518	石 籠		珪質頁岩	63.0	28.1	8.8	15	L320	
37-3	LI61	20237	石 籠		珪質頁岩	55.8	32.5	10.8	24	L071	
37-4	LK75	21730	石 籠		珪質頁岩	61.6	35.4	14.6	27	L319	
37-5	LH59	1302	石 籠		珪質頁岩	76.8	35.3	14.5	43	L068	
37-6	表採	21208	石 籠		珪質頁岩	64.8	36.7	12.5	29	L318	
37-7	LK76	20295	石 籠		珪質頁岩	74.5	42.0	13.8	43	L083	
37-8	LK70	9850	石 籠		珪質頁岩	70.3	44.0	13.8	38	L079	
37-9	LJ62	1269	石 籠		珪質頁岩	85.7	40.8	16.5	53	L067	
38-1	LJ76	21210	石 籠		珪質頁岩	85.7	35.1	15.9	48	L321	
38-2	LH66	8488	石 籠		珪質頁岩	45.0	38.8	16.3	36	L081	被熱
38-3	LJ59	20276	石 籠		珪質頁岩	90.0	49.0	16.8	66	L086	
38-4	LG72	20067	石 籠		珪質頁岩	81.5	40.2	17.4	60	L082	
38-5	LD71	20183	石 籠		珪質頁岩	91.9	41.0	22.2	64	L089	
38-6	LI78	20268	石 籠		珪質頁岩	88.0	49.9	18.5	77	L085	
39-1	LJ80	21296	石 籠		珪質頁岩	70.0	31.1	15.1	34	L317	
39-2	表採	21232	石 籠		珪質頁岩	72.0	28.3	9.8	19	L314	
39-3	LH58	21654	石 籠		珪質頁岩	59.5	43.2	11.1	28	L315	
39-4	LE70	20071	石 籠		珪質頁岩	79.1	37.4	14.7	42	L077	
39-5	表採	21351	石 籠		珪質頁岩	66.1	34.8	9.7	21	L312	
39-6	LK76	21317	石 籠		珪質頁岩	76.8	70.7	12.9	54	L313	
39-7	LH62	2974	石 籠		珪質頁岩	94.2	36.7	16.9	58	L084	
39-8	LH56	23266	トランシェ様石器		珪質頁岩	58.1	47.0	9.8	23	L447	
40-1	LH61	2697	石籠未成品		珪質頁岩	103.3	31.9	18.0	66	L215	
40-2	LJ60	21616	石籠未成品		珪質頁岩	89.2	39.1	11.5	50	L415	

第2表 報告書掲載石器観察表(4)

棟号 番号	出土 位置	取上 番号	器 種	分類	石 質	法量 (mm)			重さ (g)	委託 番号	備 考
						最大長	最大幅	最大厚			
40-3	LE73	11760	石籠未成品		珪質頁岩	84.8	24.4	21.2	45	L213	
40-4	LI61	2781	石籠未成品		珪質頁岩	98.6	35.6	24.6	74	L216	
40-5	LD71	21868	石籠未成品		珪質頁岩	122.3	39.6	14.7	63	L420	
40-6	LJ77	20212	石籠未成品		珪質頁岩	102.9	36.1	17.7	66	L038	
41-1	LI57	20395	石籠未成品		珪質頁岩	54.0	26.1	12.1	18	L210	
41-2	LJ64	6976	石籠未成品		珪質頁岩	70.5	30.6	12.1	27	L211	
41-3	LE69	20200	石籠未成品		珪質頁岩	69.3	35.5	17.0	48	L040	
41-4	LI59	20287	石籠未成品		珪質頁岩	84.3	44.5	14.9	62	L039	
41-5	LI58	1553	石籠未成品		珪質頁岩	86.7	38.9	20.4	62	L209	
41-6	表採	21297	石籠未成品		珪質頁岩	103.0	41.1	25.5	109	L419	
41-7	LG73	20053	石籠未成品		珪質頁岩	51.4	40.2	11.8	27	L042	
42-1	LJ74	20059	石籠未成品		珪質頁岩	93.8	32.7	9.2	27	L036	
42-2	LJ63	12027	石籠未成品		珪質頁岩	114.3	41.2	17.9	93	L217	
42-3	LK76	20124	石籠未成品		珪質頁岩	87.6	33.1	18.7	48	L035	
42-4	LE71	5527	石籠未成品		珪質頁岩	65.2	32.1	21.9	40	L207	
42-5	LH61	2712	石籠未成品		珪質頁岩	147.4	54.2	24.9	201	L221	
43-1	表採	21339	石籠未成品		珪質頁岩	82.5	41.0	15.3	41	L412	
43-2	LH57	20093	石籠未成品		珪質頁岩	60.4	33.2	16.6	36	L043	
43-3	LH58	6021	石籠未成品		珪質頁岩	100.7	51.9	38.6	172	L218	
43-4	LG80	4743	石籠未成品		珪質頁岩	81.0	41.7	9.9	39	L206	
43-5	表採	21558	石籠未成品		珪質頁岩	77.7	41.1	17.8	63	L411	
43-6	LK76	21556	石籠未成品		珪質頁岩	94.5	47.8	19.1	85	L418	
44-1	表採	21593	石籠未成品		玉髓質頁岩	83.3	54.9	21.6	107	L413	
44-2	LK74	21319	石籠未成品		珪質頁岩	79.9	46.5	13.9	51	L410	被熱後の加工
44-3	LG78	20149	石籠未成品		珪質頁岩	95.8	55.5	16.4	73	L037	
44-4	LD70	21559	石籠未成品		珪質頁岩	78.5	52.0	15.8	75	L414	
44-5	LL66	2030	石籠未成品		珪質頁岩	64.7	42.4	15.2	43	L270	
44-6	LI76	21693	石籠未成品		珪質頁岩	105.0	62.2	19.6	150	L416	
45-1	LK71	9889	石籠未成品		珪質頁岩	79.3	54.9	19.4	75	L212	
45-2	LK76	203	石籠未成品		珪質頁岩	100.9	45.0	22.1	91	L041	
45-3	表採	21486	石籠未成品		珪質頁岩	102.4	68.4	17.1	104	L417	
45-4	LG64	6755	石籠未成品		珪質頁岩	85.7	37.4	15.9	45	L208	
45-5	LK76	12398	石籠未成品		珪質頁岩	108.8	59.1	34.3	197	L219	
46-1	LE70	20088	石籠未成品		珪質頁岩	89.8	45.7	22.8	73	L078	
46-2	LG76	11624	石籠未成品		珪質頁岩	84.6	53.9	19.5	81	L271	
46-3	LK59	2291	石籠未成品		珪質頁岩	117.6	58.0	31.9	175	L220	
46-4	LH67	8684	石籠未成品		珪質頁岩	88.3	51.6	29.8	125	L214	
47-1	LJ61	20115	石 匙	A1	珪質頁岩	96.5	30.1	9.3	26	L060	
47-2	LL63	12521	石 匙	A1	珪質頁岩	93.3	29.9	9.4	25	L064	
47-3	LL59	21867	石 匙	A1	珪質頁岩	99.8	24.3	14.3	32	L409	
47-4	LK74	8985	石 匙	A1	鉄石英	75.3	37.8	14.8	42	L295	
47-5	LJ73	21220	石 匙	A1	珪質頁岩	72.0	11.6	5.7	5	L293	
47-6	LH59	2399	石 匙	A1	珪質頁岩	51.7	13.9	7.2	5	L057	
47-7	LF66	3081	石 匙	A3	珪質頁岩	72.7	46.3	10.5	27	L098	
47-8	LH73	20952	石 匙	A3	珪質頁岩	64.8	31.9	9.0	18	L091	
47-9	LI61	21386	石 匙	A1	珪質頁岩	95.2	41.9	18.3	55	L296	未成品?
48-1	表採	21064	石 匙	A3	珪質頁岩	62.5	49.6	7.7	24	L111	
48-2	LD73	10621	石 匙	A3	珪質頁岩	100.0	35.6	9.8	35	L106	
48-3	LI73	21097	石 匙	A3	珪質頁岩	84.8	31.0	12.0	30	L103	
48-4	LI80	10150	石 匙	A2	珪質頁岩	88.3	49.1	18.0	50	L105	
48-5	LG65	21020	石 匙	A2	珪質頁岩	75.2	66.2	14.9	63	L097	
48-6	LI64	6872	石 匙	A2	珪質頁岩	47.4	39.0	9.1	15	L101	



第2表 報告書掲載石器観察表(5)

棟号 番号	出土 位置	取上 番号	器 種	分類	石 質	法量 (mm)			重さ (g)	委託 番号	備 考
						最大長	最大幅	最大厚			
48-7	LK75	3491	石 匙	A3	黒曜石	41.0	20.6	6.0	5	L095	B3、深浦
48-8	LJ62	1213	石 匙	A3	珉質頁岩	70.6	22.9	7.5	13	L107	
49-1	LL60	5664	石 匙	A2	珉質頁岩	88.9	31.8	9.5	28	L090	
49-2	LJ64	21858	石 匙	A1	珉質頁岩	124.0	40.1	13.5	51	L297	
49-3	LH78	10230	石 匙	A3	珉質頁岩	68.9	39.2	9.8	18	L099	
49-4	表採	21106	石 匙	A1	珉質頁岩	91.8	40.0	8.4	30	L092	
49-5	LH58	11400	石 匙	A1	珉質頁岩	68.0	37.3	6.8	14	L093	
49-6	表採	20987	石 匙	A2	珉質頁岩	58.2	30.8	6.5	12	L100	
49-7	L175	21009	石 匙	A1	珉質頁岩	88.5	21.1	8.4	13	L096	
49-8	LJ63	7392	石 匙	AK	珉質頁岩	50.2	19.9	5.8	6	L059	
50-1	L159	20089	石 匙	A3	珉質頁岩	55.5	39.4	11.7	26	L058	
50-2	LJ64	20119	石 匙	AK	珉質頁岩	53.9	29.4	10.2	15	L054	
50-3	表採	20125	石 匙	A2	珉質頁岩	53.1	36.4	10.9	15	L055	
50-4	LK74	20190	石 匙	A1	珉質頁岩	65.2	46.6	10.4	22	L301	
50-5	LH58	20031	石 匙	AK	珉質頁岩	43.2	41.1	6.2	8	L061	
50-6	LD70	24608	石 匙	AK	珉質頁岩	43.4	28.8	8.9	9	L443	
50-7	LJ74	21752	石匙未成品		珉質頁岩	48.8	36.5	8.6	15	L294	
50-8	L180	10137	石 匙	A3	珉質頁岩	89.0	59.2	17.8	72	L062	
50-9	LE69	20180	石 匙	AK	珉質頁岩	28.6	14.0	6.7	3	L056	
51-1	LH59	20949	石 匙	B2	珉質頁岩	41.0	62.5	10.2	20	L109	
51-2	LJ73	21225	石 匙	B3	黒曜石	28.9	31.2	6.2	4	L298	B2、男鹿
51-3	LJ74	20926	石 匙	B2	珉質頁岩	54.0	75.5	9.2	32	L108	
51-4	LK61	7901	石 匙	B2	珉質頁岩	54.7	63.6	9.5	30	L110	
51-5	LK72	31581	石匙未成品		珉質頁岩	43.5	52.9	8.8	13	L448	
51-6	L174	31577	石匙未成品		珉質頁岩	51.1	60.1	13.7	30	L449	
52-1	LH56	21074	石 匙	C2	珉質頁岩	40.5	75.1	12.5	26	L094	
52-2	LK74	20972	石 匙	C2	珉質頁岩	39.5	65.3	12.7	32	L102	
52-3	LJ78	21032	石 匙	C2	珉質頁岩	59.6	82.7	12.1	49	L104	
52-4	LK76	21209	石 匙	C2	珉質頁岩	32.1	61.6	9.3	17	L302	
52-5	LJ59	20182	石匙未成品		珉質頁岩	37.8	58.0	15.1	31	L063	
53-1	LF75	21418	削 器		珉質頁岩	89.0	37.5	12.9	43	L353	
53-2	LK76	21457	削 器		珉質頁岩	95.5	39.1	16.2	73	L355	
53-3	表採	21207	削 器		珉質頁岩	37.3	21.2	5.5	5	L350	
53-4	LK72	20018	削 器		珉質頁岩	49.2	22.6	9.2	10	L175	
53-5	LJ59	20239	削 器		珉質頁岩	87.0	28.9	10.7	21	L182	
53-6	LK72	20060	削 器		玉髓質頁岩	54.7	22.9	6.3	9	L173	
53-7	表採	21218	削 器		珉質頁岩	73.5	24.4	6.5	11	L358	被熱で欠損
53-8	LH73	20076	削 器		珉質頁岩	82.8	27.4	17.2	30	L180	
53-9	L157	21391	削 器		珉質頁岩	62.1	32.6	9.7	21	L356	
53-10	LH80	20052	削 器		珉質頁岩	65.2	32.5	10.6	23	L172	
54-1	LK75	21691	削 器		珉質頁岩	90.2	33.6	15.8	32	L363	
54-2	LG81	21331	削 器		珉質頁岩	84.0	28.4	13.4	37	L349	
54-3	LK74	21861	削 器		珉質頁岩	105.5	39.5	12.5	54	L364	
54-4	表採	21645	削 器		珉質頁岩	107.3	43.3	19.8	86	L367	
54-5	LJ75	12509	削 器		珉質頁岩	106.3	43.2	14.3	54	L257	
54-6	L162	21497	削 器		珉質頁岩	100.1	31.3	15.6	51	L374	
55-1	LJ76	21633	削 器		珉質頁岩	74.8	27.2	12.9	26	L352	
55-2	L177	21516	削 器		珉質頁岩	91.0	26.9	17.2	41	L359	
55-3	LH62	20065	削 器		珉質頁岩	57.2	35.7	13.0	29	L181	
55-4	表採	21747	削 器		珉質頁岩	97.3	53.3	13.3	67	L373	
55-5	LJ63	12141	削 器		珉質頁岩	69.8	38.0	13.3	37	L255	
55-6	LK76	21433	削 器		珉質頁岩	105.7	52.1	18.4	97	L372	

第2表 報告書掲載石器観察表(6)

棟号 番号	出土 位置	取上 番号	器 種	分類	石 質	法量 (mm)			重さ (g)	委託 番号	備 考
						最大長	最大幅	最大厚			
55-7	LG56	21707	削器		珪質頁岩	105.8	38.9	25.3	116	L366	
56-1	LK59	2268	削器		珪質頁岩	94.0	39.0	14.3	55	L254	
56-2	表採	20171	削器		珪質頁岩	88.3	40.9	15.7	44	L252	
56-3	表採	21758	削器		珪質頁岩	126.2	49.5	34.9	129	L371	
56-4	LH60	11498	削器		珪質頁岩	107.0	35.1	14.7	52	L223	
56-5	LH57	20188	削器		珪質頁岩	67.5	38.1	12.7	31	L176	
56-6	LH57	20127	削器		珪質頁岩	56.9	41.8	17.4	54	L183	
57-1	LM77	20187	削器		珪質頁岩	43.6	23.1	5.5	7	L178	
57-2	LJ75	21514	削器		珪質頁岩	45.8	26.7	7.8	7	L351	
57-3	LI73	21757	削器		珪質頁岩	68.0	40.1	11.3	34	L361	
57-4	LJ59	21731	削器		珪質頁岩	67.3	50.5	11.2	34	L360	
57-5	表採	20090	削器		珪質頁岩	79.9	58.1	12.7	53	L184	
57-6	LH72	21320	削器		珪質頁岩	72.5	67.3	14.6	73	L354	
57-7	LJ75	20011	削器		珪質頁岩	82.7	57.9	22.8	94	L256	
57-8	LJ78	20107	削器		珪質頁岩	62.8	48.5	17.4	59	L185	
57-9	LG74	20191	削器		珪質頁岩	49.0	33.0	9.8	13	L177	
58-1	LI62	20209	削器		珪質頁岩	40.6	42.6	14.6	24	L253	石核転用
58-2	LD72	21323	削器		珪質頁岩	72.5	29.2	11.4	23	L348	
58-3	LI80	21284	削器		珪質頁岩	108.2	72.8	29.1	163	L370	石核転用
58-4	LH72	20095	削器		珪質頁岩	67.0	46.0	26.5	73	L179	
58-5	LH60	20224	削器		珪質頁岩	123.5	49.4	27.6	179	L258	
58-6	表採	20122	削器		珪質頁岩	90.0	31.6	12.4	38	L174	
59-1	LJ76	21504	横刃削器		珪質頁岩	31.1	79.5	14.2	37	L357	
59-2	LJ76	21221	横刃削器		珪質頁岩	20.5	44.4	11.1	7	L362	
59-3	LJ75	21261	削器		珪質頁岩	48.4	98.2	30.1	111	L365	
59-4	LJ61	20009	削器		珪質頁岩	61.9	110.5	22.9	118	L368	
59-5	LI74	21494	削器		珪質頁岩	65.4	122.1	30.6	180	L369	被熱
60-1	LK75	20284	撻器		珪質頁岩	28.8	23.9	8.0	4	L195	
60-2	表採	21303	撻器		珪質頁岩	41.0	27.3	7.2	8	L337	
60-3	LI61	2775	撻器		珪質頁岩	57.1	28.3	9.5	17	L186	
60-4	LK75	21304	撻器		珪質頁岩	44.5	30.4	7.7	11	L336	
60-5	LK58	5738	撻器		珪質頁岩	42.1	33.4	8.3	10	L188	
60-6	LH58	21540	撻器		珪質頁岩	52.5	32.9	12.7	21	L338	
60-7	LI71	20030	撻器		珪質頁岩	51.1	33.5	10.7	12	L192	
60-8	LJ78	20207	撻器		珪質頁岩	51.6	38.0	12.8	19	L198	
60-9	LH57	20240	撻器		珪質頁岩	54.8	44.0	16.1	35	L194	
60-10	LI75	21669	撻器		珪質頁岩	68.8	47.2	19.0	43	L342	
60-11	LE72	463	撻器		珪質頁岩	54.6	41.6	16.2	28	L190	
61-1	LG72	21428	撻器		珪質頁岩	60.3	52.5	15.9	46	L340	
61-2	LH58	5918	撻器		珪質頁岩	60.5	46.4	18.4	43	L200	
61-3	LK75	20243	撻器		珪質頁岩	72.0	39.5	11.8	35	L199	
61-4	表採	21325	撻器		珪質頁岩	69.8	34.8	11.7	29	L335	
61-5	LI61	7796	撻器		珪質頁岩	80.5	28.4	10.5	21	L264	
61-6	LJ65	21860	撻器		珪質頁岩	78.8	39.1	17.0	46	L344	
61-7	LI66	368	撻器		珪質頁岩	67.3	49.2	12.6	46	L187	
61-8	LH56	21524	撻器		珪質頁岩	62.6	48.3	18.8	58	L341	
62-1	LI59	20231	撻器		珪質頁岩	60.0	60.4	20.4	58	L193	
62-2	LH67	8685	撻器		珪質頁岩	81.2	46.0	16.2	62	L196	
62-3	LF66	3082	撻器		珪質頁岩	67.8	60.7	17.2	74	L263	
62-4	LK75	20298	撻器		珪質頁岩	49.4	63.2	16.1	46	L265	
62-5	LL72	21301	撻器		珪質頁岩	79.5	50.3	20.8	80	L343	
62-6	LK74	21318	撻器		珪質頁岩	78.0	56.4	22.4	98	L345	

第2表 報告書掲載石器観察表(7)

棟号 番号	出土 位置	取上 番号	器 種	分類	石 質	法量 (mm)			重さ (g)	委託 番号	備 考
						最大長	最大幅	最大厚			
63-1	LE67	3429	撻器		珉質頁岩	69.0	51.0	27.1	88	L189	
63-2	LF75	21548	撻器		珉質頁岩	57.2	39.2	20.3	52	L339	
63-3	LL75	20151	撻器		珉質頁岩	78.4	49.0	28.3	106	L197	
63-4	表採	21243	撻器		珉質頁岩	108.5	51.2	21.9	109	L347	
63-5	LD71	21649	撻器		珉質頁岩	85.8	47.8	20.6	98	L346	
63-6	LF80	12406	撻器		珉質頁岩	96.8	56.1	18.1	112	L191	
64-1	LH56	21215	石 錐		珉質頁岩	46.6	13.2	4.8	2	L408	
64-2	LI73	21219	石 錐		珉質頁岩	46.2	14.8	7.7	5	L331	
64-3	LH56	21236	石 錐		珉質頁岩	48.0	23.3	8.8	9	L332	
64-4	表採	21584	石 錐		珉質頁岩	42.2	28.6	7.8	8	L328	
64-5	LH72	21216	石 錐		珉質頁岩	47.4	27.3	6.0	6	L326	
64-6	LH57	20178	石 錐		珉質頁岩	47.9	23.4	8.8	9	L333	
64-7	LI62	20303	石 錐		珉質頁岩	60.5	44.7	14.7	34	L327	
64-8	LI72	21647	石 錐		玉髓質頁岩	56.4	43.1	11.7	28	L325	
64-9	LH76	21538	石 錐		珉質頁岩	60.0	44.0	12.8	27	L330	
64-10	LL72	21452	石 錐		珉質頁岩	78.1	65.5	23.3	98	L329	
65-1	LI59	20312	石 錐		珉質頁岩	35.8	23.1	8.3	6	L436	
65-2	LH58	21397	石 錐		珉質頁岩	50.6	33.8	7.4	10	L444	
65-3	LD72	3708	石 錐		珉質頁岩	73.2	38.1	11.1	31	L453	
65-4	LH75	21389	石錐未成品		珉質頁岩	47.7	14.6	8.6	6	L445	
65-5	表採	24597	石 錐		珉質頁岩	62.0	35.5	10.9	20	L446	
65-6	LT74	21380	石錐未成品		珉質頁岩	59.1	25.9	12.2	15	L395	
65-7	LJ76	21866	石 錐		珉質頁岩	114.8	31.7	14.7	37	L396	
65-8	LF75	21666	石錐未成品		珉質頁岩	54.0	53.6	13.3	29	L394	
65-9	LK74	21745	石 錐		珉質頁岩	100.2	39.5	14.2	39	L334	
66-1	LI58	812	ノッチ		珉質頁岩	55.5	31.5	7.2	12	L261	
66-2	LG57	23568	ノッチ		珉質頁岩	79.3	36.2	14.0	34	L471	
66-3	LK76	20314	ノッチ		珉質頁岩	105.7	38.3	19.9	54	L262	
66-4	LH60	20063	ノッチ		珉質頁岩	72.3	35.2	9.7	20	L259	
66-5	LG56	11213	ノッチ		珉質頁岩	97.7	54.5	25.6	90	L260	
66-6	LE70	25048	ノッチ		珉質頁岩	38.5	30.5	10.2	11	L472	
67-1	LJ75	12587	両面調整石器		珉質頁岩	114.3	65.2	24.0	154	L266	
67-2	LK76	21862	両面調整石器		珉質頁岩	135.1	90.0	42.3	489	L390	
68-1	LG73	21195	块状耳飾		瑪 瑙	32.9	21.0	5.2	4	L222	
68-2	LK74	21713	異形石器		珉質頁岩	50.9	28.1	10.6	13	L389	
68-3	LK74	23346	嘴形石器		珉質頁岩	40.5	21.0	5.7	5	L475	
68-4	LJ76	21345	楔形石器		珉質頁岩	39.0	17.6	12.1	9	L432	B7、男鹿
68-5	表採	20145	敲 石		珉質頁岩	59.9	58.5	29.4	115	L431	両極敲打痕
68-6	LH59	21400	削 器		珉質頁岩	86.3	33.2	10.0	27	L388	髓状剥離
68-7	LH65	8010	三脚石器		鉄石英	41.0	63.5	17.7	37	L571	
68-8	LG73	21501	三角錐形石器		珉質頁岩	101.3	24.1	20.5	50	L433	
68-9	LJ77	21536	打製石斧		珉質頁岩	91.7	36.9	22.4	72	L462	
69-1	LJ59	20238	二次加工		黒曜石	16.6	18.2	3.3	1	L017	B19、男鹿
69-2	LD71	544	二次加工		黒曜石	21.3	16.5	7.5	3	L013	B18、男鹿
69-3	LK75	20179	二次加工		珉質頁岩	57.2	44.1	9.5	21	L014	
69-4	LG65	3028	二次加工		珉質頁岩	96.5	35.4	16.9	55	L018	
69-5	表採	20309	二次加工		珉質頁岩	71.8	31.1	9.8	17	L012	
69-6	LI62	20166	二次加工		珉質頁岩	57.6	31.4	7.2	13	L016	
69-7	LJ78	20189	二次加工		珉質頁岩	50.4	42.9	10.7	13	L015	
69-8	LJ77	21864	二次加工		珉質頁岩	90.3	32.9	18.1	37	L392	
69-9	表採	21375	二次加工		珉質頁岩	49.6	54.1	10.2	38	L442	
70-1	LL76	20306	微細剥離		珉質頁岩	50.0	25.4	10.3	15	L008	

第2表 報告書掲載石器観察表(8)

棟号 番号	出土 位置	取上 番号	器 種	分類	石 質	法量 (mm)			重さ (g)	委託 番号	備 考
						最大長	最大幅	最大厚			
70-2	LI74	20244	微細剥離		珪質頁岩	58.0	34.5	10.8	20	L1010	
70-3	LH73	21863	微細剥離		珪質頁岩	85.8	25.3	9.3	18	L391	
70-4	LJ74	20186	微細剥離		珪質頁岩	64.8	36.0	10.4	24	L009	
70-5	LL74	20194	微細剥離		珪質頁岩	66.7	30.9	8.6	15	L1011	
70-6	LI72	21865	剥片		珪質頁岩	108.9	38.6	28.1	98	L393	
70-7	LG77	28688	剥片		珪質頁岩	55.1	22.8	25.4	29	L485	
71-1	LJ75	23243	石 核	A1	珪質頁岩	74.1	54.4	40.8	156	L482	
71-2	LJ78	21482	石 核	A1	珪質頁岩	55.8	60.6	40.0	148	L425	
71-3	表採	25044	石 核	A2a	珪質頁岩	56.1	49.0	48.5	162	L477	
72-1	LL59	1755	石 核	A2a	珪質頁岩	107.7	114.7	97.2	1225	L484	
73-1	LJ79	25146	石 核	A2b	珪質頁岩	44.8	83.0	24.9	93	L496	
73-2	LJ75	23162	石 核	A2c	珪質頁岩	86.5	104.2	85.7	892	L483	
74-1	LJ61	7877	石 核	A3	珪質頁岩	48.9	41.9	32.0	84	L242	
74-2	LI60	20010	石 核	A3	珪質頁岩	56.9	55.9	42.5	168	L232	
74-3	LG57	11223	石 核	A3	珪質頁岩	80.0	67.0	55.5	361	L428	
75-1	LK77	20008	石 核	A3	珪質頁岩	55.8	70.8	62.1	244	L248	
75-2	LF83	20235	石 核	A3	珪質頁岩	70.2	99.5	70.1	588	L251	
76-1	LJ77	21255	石 核	A3	玉髓質頁岩	63.4	80.4	55.1	228	L429	
76-2	LE75	11655	石 核	A3	玉髓質頁岩	45.8	68.0	48.6	174	L230	
76-3	LH58	27553	石 核	A4	鉄石英	52.5	74.3	28.0	128	L479	
77-1	表採	21251	石 核	A4	珪質頁岩	59.1	68.4	42.5	175	L491	
77-2	LJ75	21252	石 核	A4	珪質頁岩	64.0	70.2	41.0	163	L400	
77-3	表採	21272	石 核	A4	珪質頁岩	63.1	73.5	49.9	215	L397	
78-1	LD73	3878	石 核	A4	玉髓質頁岩	65.7	84.8	47.4	284	L235	
78-2	LI67	20332	石 核	A5	珪質頁岩	69.4	44.9	14.3	67	L478	
78-3	LL58	5709	石 核	A5	珪質頁岩	48.2	86.8	51.1	266	L249	
79-1	LI70	9701	石 核	A7	珪質頁岩	78.7	62.4	30.7	181	L476	
79-2	LK75	21746	石 核	A7	珪質頁岩	76.0	56.8	43.1	151	L481	
79-3	LH70	9682	石 核	B2b	珪質頁岩	82.0	97.3	25.2	243	L250	
80-1	LD71	622	石 核	B2b	珪質頁岩	42.0	63.8	14.4	37	L240	
80-2	LN65	170	石 核	B2b	珪質頁岩	50.2	100.8	25.9	138	L244	
80-3	LG80	4699	石 核	B2b	珪質頁岩	64.0	99.5	26.9	136	L495	
80-4	LH56	11273	石 核	B2b	玉髓質頁岩	73.0	117.8	25.8	233	L237	
81-1	LI61	21266	石 核	B2b	珪質頁岩	57.5	141.0	35.5	324	L430	
81-2	LF78	20249	石 核	B2c	珪質頁岩	56.9	44.9	11.1	31	L480	
81-3	LG73	23467	石 核	B4	珪質頁岩	72.2	75.2	20.9	129	L493	
81-4	LJ74	20004	石 核	B4	珪質頁岩	74.7	89.2	34.5	211	L236	
82-1	LI78	20003	石 核	B4	珪質頁岩	65.6	80.0	22.0	115	L246	
82-2	LF70	5256	石 核	B4	珪質頁岩	63.5	77.8	20.6	97	L233	
82-3	LK60	6637	石 核	B4	珪質頁岩	69.5	83.1	22.6	122	L245	
82-4	LH56	21289	石 核	B5	珪質頁岩	62.3	77.0	21.0	101	L423	
83-1	LI57	21274	石 核	B5	珪質頁岩	91.0	66.0	37.7	169	L427	
83-2	LF65	743	石 核	B7	珪質頁岩	65.8	50.8	25.0	102	L241	
83-3	LE72	21717	石 核	C2c	珪質頁岩	37.0	54.3	20.0	42	L399	
83-4	表採	21290	石 核	C4	珪質頁岩	71.6	61.2	32.0	133	L426	
84-1	LD70	26921	石 核	D1	珪質頁岩	61.1	44.8	32.9	92	L487	
84-2	LG57	27555	石 核	D3	珪質頁岩	68.8	32.0	37.2	99	L497	
84-3	LG81	24460	石 核	D3	珪質頁岩	56.6	54.1	33.4	100	L494	
84-4	LJ58	12287	石 核	D3	珪質頁岩	65.2	61.4	35.0	122	L231	
85-1	LH72	20128	石 核	D3	珪質頁岩	96.0	48.2	31.5	131	L488	
85-2	LG59	20103	石 核	D3	珪質頁岩	69.5	49.5	39.9	168	L239	
85-3	LH71	21478	石 核	D3	珪質頁岩	81.5	47.0	42.8	170	L489	

第2表 報告書掲載石器観察表(9)

棟号 番号	出土 位置	取上 番号	器 種	分類	石 質	法量 (mm)			重さ (g)	委託 番号	備 考
						最大長	最大幅	最大厚			
86-1	LH62	2947	石 核	D4	珪質頁岩	62.8	74.9	28.9	143	L243	
86-2	LK76	25679	石 核	D4	珪質頁岩	58.4	68.2	37.1	155	L490	
86-3	表採	20072	石 核	D5	珪質頁岩	67.7	57.2	36.5	139	L247	
87-1	LG71	21618	石 核	D5	珪質頁岩	38.9	68.1	24.4	58	L424	
87-2	LG58	5830	石 核	D5	珪質頁岩	80.8	83.4	49.8	330	L492	
87-3	LJ75	20005	石 核	D7	珪質頁岩	92.0	75.0	27.0	189	L234	
88-1	LD71	28660	石 核	D7	珪質頁岩	44.4	53.9	24.2	66	L486	
88-2	表採	21352	石 核	E2b	珪質頁岩	41.9	61.2	22.7	51	L421	
88-3	LI71	20028	石 核	E2c	珪質頁岩	64.0	42.5	23.3	85	L238	
88-4	LG56	21298	石 核	E6	珪質頁岩	74.9	45.9	22.5	90	L398	
88-5	LH56	21401	石 核	E6	珪質頁岩	51.5	77.6	18.9	69	L422	石籠転用
89-1	LI60	31892	石 鏃	D1	黒曜石	23.3	15.3	3.8	1	L541	B9、男鹿
89-2	LI74	21212	二次加工		黒曜石	13.8	23.2	4.6	2	L554	B30、男鹿
89-3	LH72	21223	二次加工		黒曜石	41.6	20.9	6.7	6	L555	B31、男鹿
89-4	LI65	8126	楔形石器		黒曜石	18.2	8.0	7.7	1	L543	B11、男鹿
89-5	LK57	23564	楔形石器		黒曜石	34.4	29.0	12.7	13	L552	B26、男鹿
89-6	LG81	21227	両極剥片		黒曜石	25.6	11.5	5.8	1	L547	B17、男鹿
89-7	LJ59	20316	剥 片		黒曜石	21.2	10.7	8.8	1	L551	B24、男鹿
89-8	LG56	4213	剥 片		黒曜石	25.1	10.4	9.9	3	L539	B1、深浦
89-9	表採	31254	剥 片		黒曜石	24.2	11.9	9.4	2	L553	B28、男鹿
89-10	表採	23436	剥 片		黒曜石	25.2	17.8	9.4	5	L540	B6、男鹿
89-11	LJ65	20153	剥 片		黒曜石	28.9	22.8	10.2	6	L546	B16、男鹿
89-12	LG74	21230	原 石		黒曜石	32.6	16.8	11.3	8	L549	B17、男鹿
89-13	表採	20102	剥 片		黒曜石	29.1	24.3	9.7	7	L550	B22、男鹿
89-14	表採	23583	二次加工		黒曜石	31.7	22.5	11.2	7	L548	B20、男鹿
89-15	LH72	21204	剥 片		黒曜石	26.8	25.8	14.5	9	L544	B13、深浦
89-16	表採	21226	剥 片		黒曜石	31.6	19.9	15.5	10	L545	B15、上土幌
89-17	LE71	21224	剥 片		黒曜石	45.1	35.0	15.6	23	L542	B10、出来島
90-1	LG69	5299	磨製石斧		透閃石岩	79.6	45.1	12.8	81	L137	
90-2	LJ59	20392	磨製石斧		透閃石岩	58.5	52.9	18.1	106	L134	
90-3	LK76	20394	磨製石斧		砂質凝灰岩	52.0	34.2	16.6	54	L144	
90-4	LH73	20390	磨製石斧		透閃石岩	70.1	51.4	29.8	174	L145	
90-5	LI75	20400	磨製石斧		緑色凝灰岩	90.8	39.1	16.3	87	L135	
90-6	表採	20387	磨製石斧		安山岩	104.6	59.7	28.5	253	L148	
91-1	LF67	3240	磨製石斧		透閃石岩	74.7	44.6	11.5	64	L138	
91-2	LK75	20391	磨製石斧		泥質片岩	93.0	46.6	18.3	129	L136	
91-3	LI57	20397	磨製石斧		透閃石岩	99.9	42.7	10.6	74	L142	
91-4	LF70	5238	磨製石斧		安山岩	70.7	47.3	21.2	83	L143	
91-5	LD71	20393	磨製石斧		凝灰岩	113.7	53.3	28.3	196	L139	
91-6	LH56	20410	磨製石斧		凝灰岩	58.1	18.9	11.8	14	L461	
92-1	LJ59	20389	磨製石斧		泥質片岩	110.6	51.5	25.9	200	L147	
92-2	表採	20319	磨製石斧		凝灰岩	164.5	48.5	28.6	205	L205	
92-3	LD72	20413	磨製石斧		透閃石岩	72.2	15.5	14.1	26	L140	
92-4	LK62	1403	磨製石斧		透閃石岩	90.8	26.4	14.0	57	L141	
92-5	LG72	20407	磨製石斧		透閃石岩	94.0	31.3	14.8	69	L146	
93-1	LJ64	20559	石 錘	A	デイサイト	40.0	39.0	12.0	28	L112	
93-2	LH57	20560	石 錘	A	流紋岩	45.0	43.0	14.0	39	L113	
93-3	LH81	20554	石 錘	A	泥 岩	60.0	45.0	11.0	38	L114	
93-4	LG72	20558	石 錘	A	泥 岩	65.0	57.0	19.0	92	L115	
93-5	LJ78	20557	石 錘	A	泥 岩	88.0	67.0	18.0	123	L116	
93-6	LD70	20552	石 錘	A	泥 岩	116.0	64.0	24.0	232	L119	
93-7	LH76	10680	石 錘	A	凝灰岩	76.1	41.5	16.2	62	L468	

第2表 報告書掲載石器観察表(10)

種図 番号	出土 位置	取上 番号	器 種	分類	石 質	法量 (mm)			重さ (g)	委託 番号	備 考
						最大長	最大幅	最大厚			
94-1	LL76	20548	石 錘	A	デイサイト	91.0	81.0	28.0	276	L118	
94-2	LG71	20549	石 錘	A	デイサイト	97.0	75.0	19.0	208	L120	
94-3	LJ74	20553	石 錘	A	デイサイト	128.0	75.0	21.0	289	L123	
95-1	LH72	20551	石 錘	A	デイサイト	136.0	111.0	29.0	597	L124	
95-2	LH57	4619	石 錘	A	泥 岩	115.3	81.9	26.1	323	L470	
96-1	LH72	20550	石 錘	A	泥 岩	60.0	69.0	25.0	106	L117	
96-2	LJ74	20556	石 錘	B	泥 岩	72.0	85.0	25.0	123	L122	
96-3	LF72	20555	石 錘	B	デイサイト	83.0	98.0	23.0	262	L121	
97-1	dLG58	5855	石 錘	C4	デイサイト	84.7	67.0	20.0	168	L466	
97-2	LF66	3206	石 錘	C3	デイサイト	97.4	64.7	17.2	136	L469	
97-3	LD71	689	石 錘	C4	流紋岩	100.0	67.6	31.1	209	L467	
98-1	LH73	20565	半円状扁平 打製石器	A-E1	安山岩	122.0	137.0	33.0	712	L126	
98-2	LJ75	20568	半円状扁平打 製石器	A-E2	デイサイト	85.0	126.0	32.0	507	L130	
98-3	LE72	20562	半円状扁平打 製石器	A-E2	デイサイト	75.0	144.0	33.0	565	L128	
98-4	LI72	20563	半円状扁平打 製石器	A-E2	デイサイト	88.0	131.0	24.0	397	L125	
99-1	表採	20564	半円状扁平打 製石器	B-E1	安山岩	117.0	171.0	27.0	771	L129	
99-2	LH73	20567	半円状扁平打 製石器	B-E2	安山岩	94.4	160.3	27.5	688	L132	
99-3	LH70	20222	半円状扁平打 製石器	C-E1	珪質頁岩	80.8	138.1	32.5	390	L456	
99-4	LJ75	21248	半円状扁平打 製石器	C-E1	珪質頁岩	74.5	131.4	26.6	303	L434	
100-1	LI73	20566	半円状扁平打 製石器	C-N1	泥 岩	69.3	125.0	30.8	318	L131	
100-2	LI57	21392	半円状扁平打 製石器	C-N1	珪質頁岩	25.9	63.0	11.8	24	L387	
100-3	LJ75	20561	半円状扁平打 製石器	D	安山岩	94.0	170.0	44.0	959	L127	
100-4	LI74	20569	半円状扁平打 製石器	D	安山岩	107.0	185.5	37.8	954	L133	
101-1	LJ61	1176	敲 石		珪質頁岩	64.3	77.6	48.0	247	L273	
101-2	LL58	5700	敲 石		珪質頁岩	34.3	47.5	37.0	71	L269	
101-3	LJ59	6494	敲 石		珪質頁岩	36.2	73.8	18.9	63	L267	
101-4	LK61	7934	敲 石		珪質頁岩	52.5	82.0	44.3	174	L268	
101-5	LG72	10957	敲 石		凝灰岩	132.3	47.7	29.6	285	L272	
102-1	LK77	21262	敲 石		珪質頁岩	72.9	57.5	49.8	258	L459	
102-2	表採	21268	敲 石		珪質頁岩	67.2	51.8	42.4	179	L458	
102-3	表採	21267	敲 石		珪質頁岩	70.0	72.7	54.9	288	L457	
102-4	LE72	23565	敲 石		珪質頁岩	60.1	62.0	39.1	180	L464	
102-5	LJ78	21615	礫 器		珪質頁岩	84.8	61.2	20.9	139	L463	
103-1	LK60	12275	凹 石		凝灰岩	134.8	72.6	35.8	275	L045	
103-2	LK58	1915	凹 石		凝灰岩	108.1	67.4	39.0	353	L044	
103-3	LJ78	20887	凹 石		凝灰岩	93.6	103.0	21.7	208	L046	
103-4	LH62	2945	凹 石		凝灰岩	91.0	64.0	23.6	125	L455	
103-5	LG80	4710	凹 石		凝灰岩	111.3	75.9	45.8	219	L047	
103-6	LG71	21750	砥 石		凝灰岩	82.4	56.4	20.1	100	L465	

## (2) 縄文土器 (第105～112図、第3表)

出土した縄文土器は、2,200点、重量にして61,097gを確認した。接合を試みたが、ほぼ完全な形に復元された個体は106-1のみであった。土器片を施文手法に着目して大別すると次のようになる。施文や器面調整等は第3表にまとめた。

A類(105-1～105-3):内面に条痕をもつもの。外面は燃糸・縄文となる。105-3は揚底気味の底面にも縄文が回転施文される。

B類(105-4～107-6、108-1):外面に縄文を施文されるもの。B類以降の内面はミガキやナデで仕上げている。また、いわゆる羽状縄文となる個体が一定数存在するが、同一の原体で回転方向を変えているもの(105-9など)、二種の原体を利用する(107-2など)ものの別がある。107-1・3・5・6は頸部に隆帯が貼付される。

C類(107-7、108-2～112-1):外面に燃糸文が施文されるもの。107-7は、口縁直下と頸部(隆帯貼付、欠落)下に横位の縄圧痕が認められる。112-1は網目状燃糸となる。

D類(112-2～112-4):外面に沈線文が表出されるもの。112-2は竹管状工具による縦位波状に、112-3は直線的な沈線が認められる。112-4はL R縄文のち渦巻状の沈線と円形刺突が加えられる。

なお、112-5は深鉢形土器胴部片を再加工した円盤状土製品である。

## (3) 古代以降の遺物 (第117～120図、第4表)

縄文時代以外の出土遺物には、古代の須恵器・土師器、中世の白磁・青磁・陶器・銭貨、近世・近代の陶磁器・銭貨がある。土製品、鉄・銅製品、鉄滓類については、帰属時期を特定することができず、古代以降として次に報告する。

### ① 須恵器 (第113図、第117図・第118図1～3)

988点(重量29,004g)出土した。器種は坏(117-1)、台付坏(117-2)、台坏皿(117-3・4)、壺(117-5・6)、横瓶(117-7)、甕(117-8～12、118-1～3)がある。点数比で見れば全体の75% (745÷988×100≒75.4) が甕・壺類で占められる。

117-5は、推定頸部径(4.4cm)から長頸壺ではなく水瓶の可能性もある。117-7は横瓶の依形に張り出す胴部端、閉塞部分の破片である。横瓶は別個体の破片も確認された。甕類の器面調整は、外面が平行・格子目タキ、内面が同心円・格子目・平行アテ具やナデがある。詳細は第4表の遺物観察表を参照されたい。

時期的には、横瓶や内面に同心円タテ具を残す甕は新しくとも9世紀第1四半期、一方の台付皿は9世紀後半であり、概ね8世紀後半から9世紀後半代に位置づけられる。

### ② 土師器 (第114図、第118図4～7)

985点(重量16,399g)出土した。器種は、坏・台付坏・甕類(小片や摩耗のため未図化)、柱状高台坏(118-5)、羽釜(118-6)、把手付土器(118-7)がある。点数比で見れば、全体の76% (750÷985×100≒76.1) が小型の坏類で占められている。

118-4は土師質の土製品(完形)である。表裏に押圧痕が見られるが、使用の工具は不明である。

柱状高台坏は10世紀に入ってから認められるようであり、須恵器の時期より後出となる。

### ③白磁・青磁（第118図1・2）

中国産の白磁は1点、青磁4点確認された。18-1は、白磁碗であり口縁上部に大きな玉縁を有する。118-2は青磁碗であり、外面に鎬蓮弁の彫刻文が認められる。118-3は無文の青磁碗であり、口縁上部に玉縁が見られる。白磁は12世紀後半～13世紀、青磁は末実測分も含め13～15世紀代であろう。

### ④須恵器系陶器・瓷器系陶器（第119図3）

国産の中世陶器である須恵器系陶器は8点、瓷器系陶器は7点を確認した。両者は数は少ないものの、出土位置は全て68ライン以北であり、調査区南寄りでは未確認である。須恵器系では1点（甕）を除き摺鉢片である。片口部や底部に静止糸切り痕が見られる。瓷器系は摺鉢、甕・壺がある。図示したのは瓷器系陶器の摺鉢である。

### ⑤近世陶磁器（第119図4～8）

国産の近世陶磁器は、陶器45点、磁器50点を確認した。碗・皿類、瓶類、摺鉢がある。119-5は、美濃産（志野焼）の長石軸菊皿である。一方の119-6～8は肥前産（唐津系）陶器の皿・小皿である。砂目積痕や全面施釉（119-7）から肥前陶器編年Ⅱ期（1610年代～1650年代）となるものであろう（九州近世陶磁学会2000。）

### ⑥土製品

土製品は土師質の土錘が5点出土した。太管形3点（外径2.8～4.6cm、長さ4.3～5.4cm）、細管形2点（外径1.5～1.8cm、長さ4.4～5.2cm）に分けられる。帰属時期は古代あるいは中世以降か不詳。

### ⑦金属製品（第120図）

出土した金属製品には鉄製品、銅製品、銭貨がある。鉄製品は種別不明（120-1）であるが、長さ9.7cm、幅1.0cm、厚0.3cmの細長い板状を呈する。銅製品は銅鏡片である。121-2は、鏡の外縁（鏡縁）と鏡面（外区）のごく一部が残る。推定径は14cm、鏡面を含め歪みが著しい。

銭貨は7点出土した。120-3は、天聖元寶（北宋、初鑄1023年、篆書体）、120-4は、寛永通寶（背：文、初鑄1668年）、120-5は寛永通寶（真鍮四文銭、背：11波、初鑄1769年）、判読不能4点である。

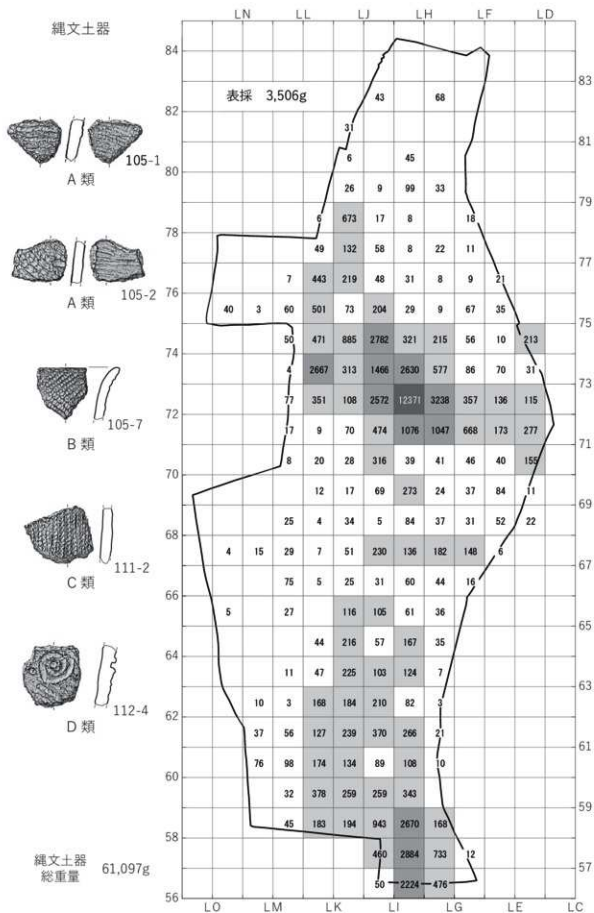
### ⑨鉄生産関係（第116図）

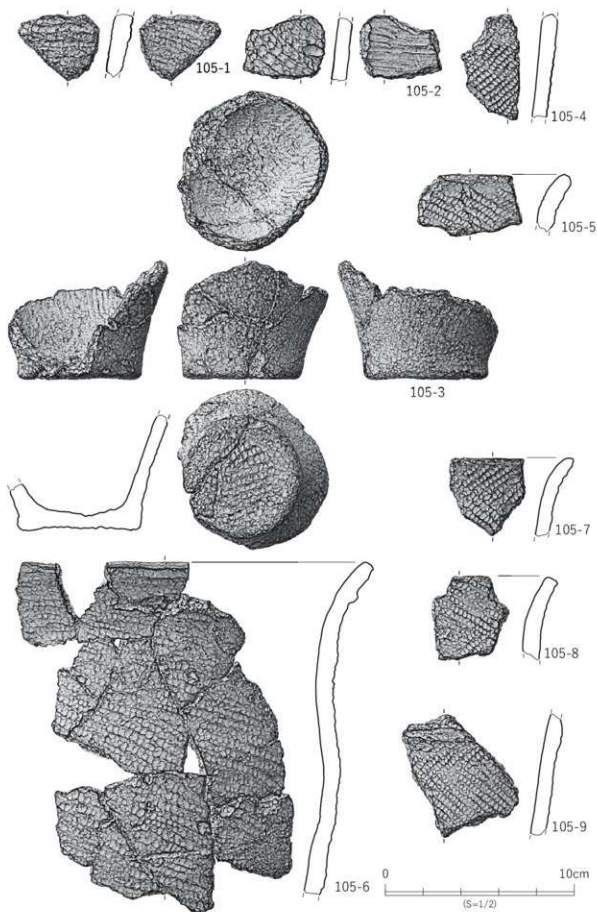
出土した鉄生産関係遺物は45点、重量にして2,056gであった。多くは鉄滓であり、うち3点はフイゴ羽口片のようである。116-3は調査区南端、LH57グリッド出土の椀形鍛冶滓である。

### ⑩自然遺物

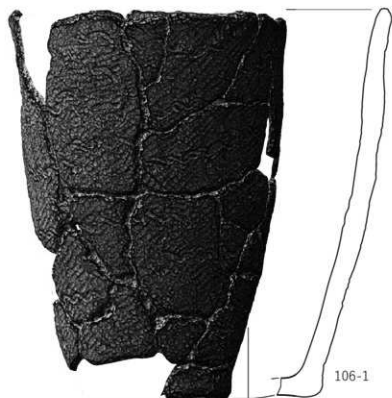
その他、自然遺物として馬歯（白歯）がある。7点確認された。



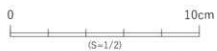




第 105 図 出土縄文土器 (1)

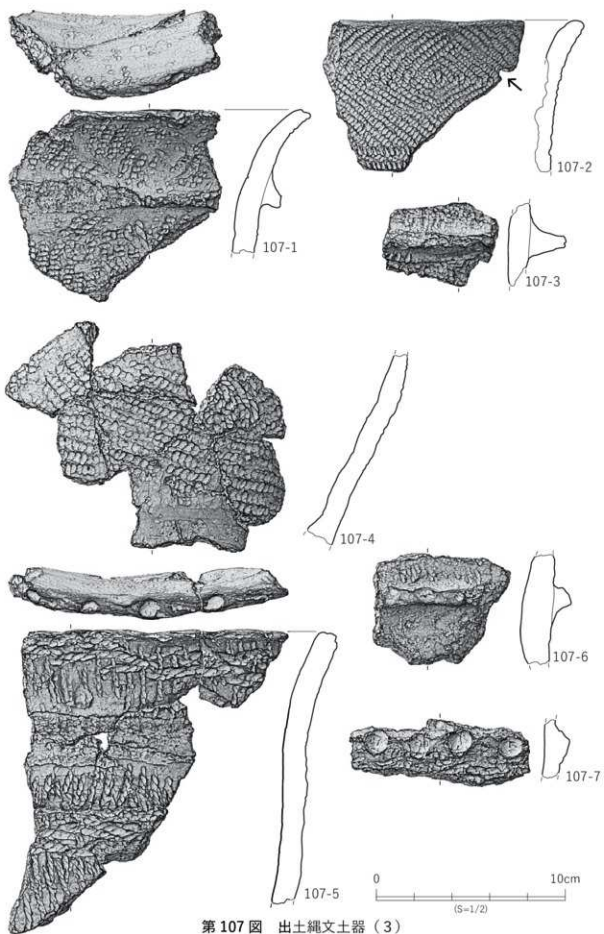


PEAKIT 画像

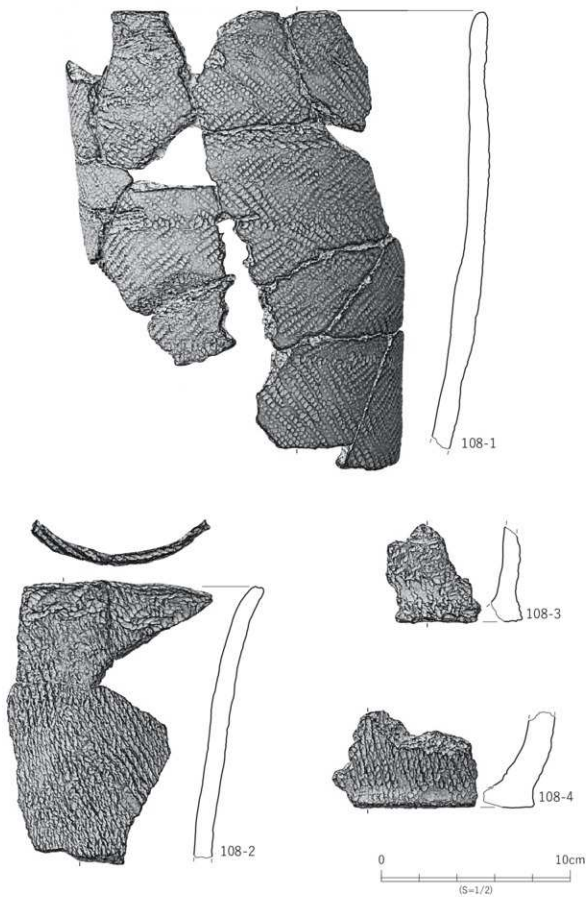


遺物出土状況

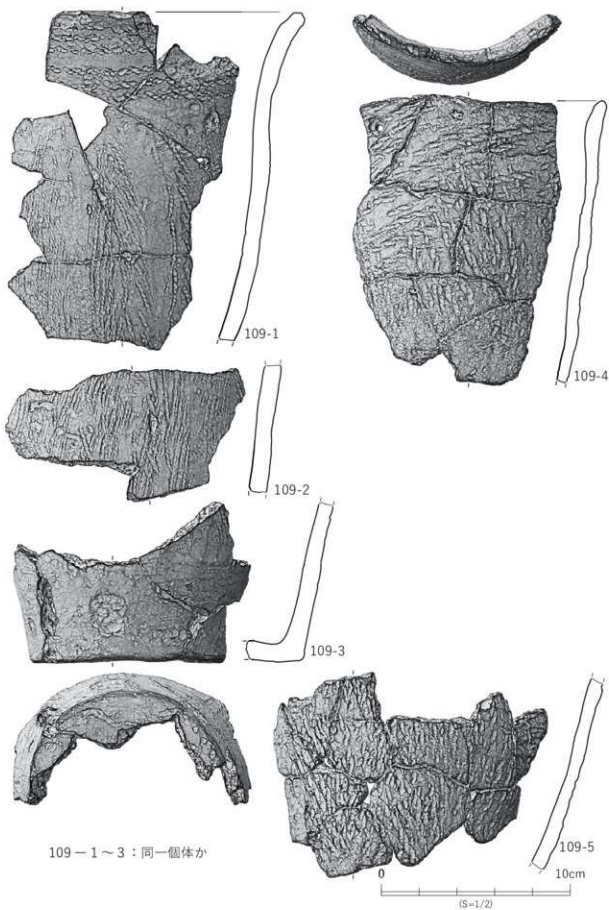
第 106 図 出土縄文土器 (2)



第 107 図 出土縄文土器 (3)

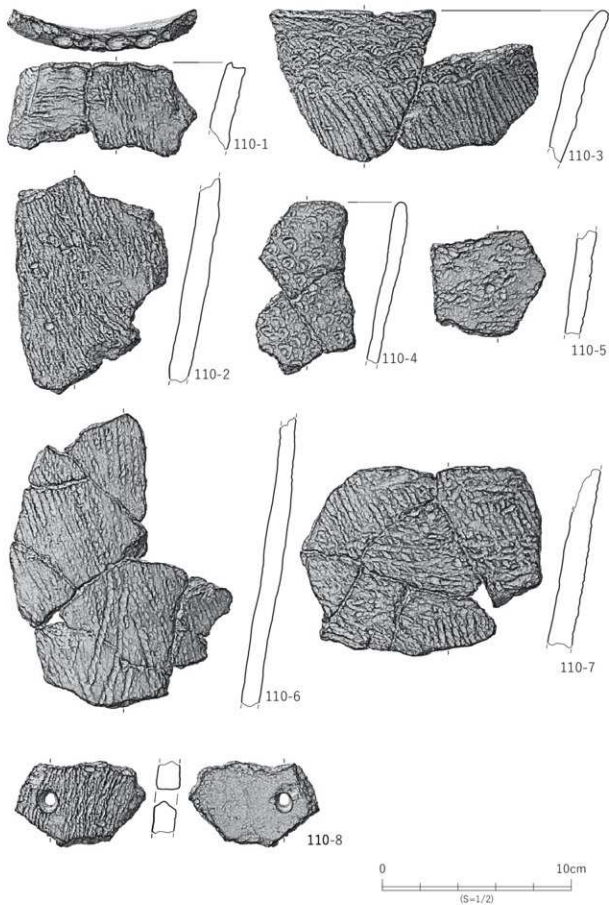


第 108 図 出土縄文土器 (4)

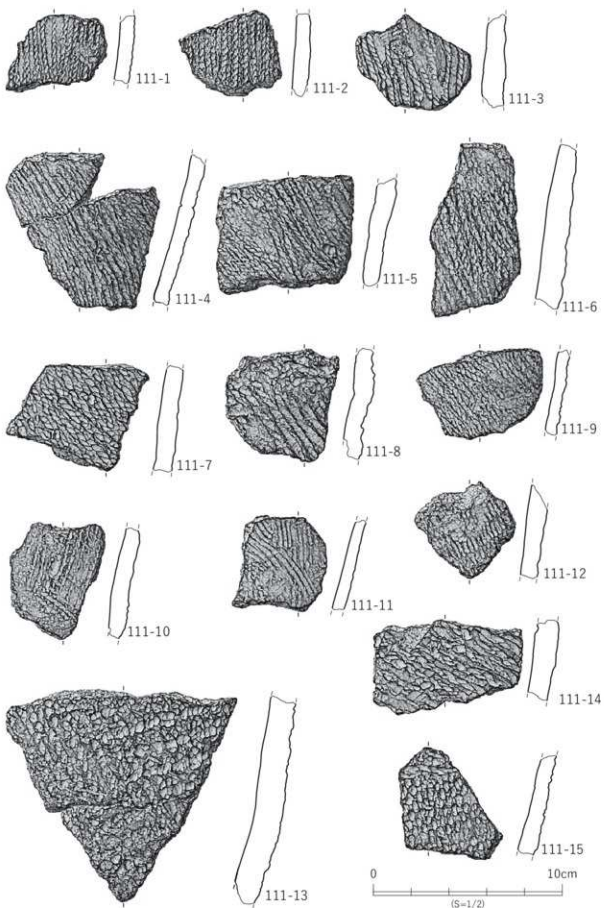


109-1 ~ 3 : 同一個体か

第109図 出土縄文土器(5)

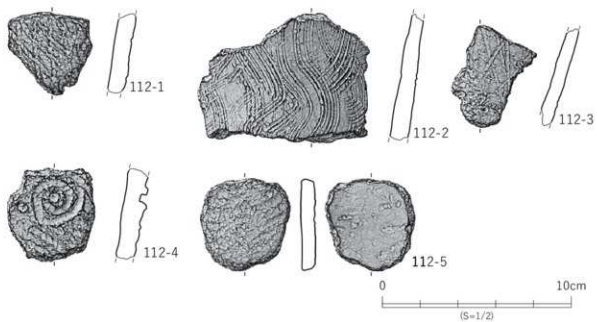


第110図 出土縄文土器(6)



第 111 図 出土縄文土器 (7)





第 112 図 出土縄文土器 (8)

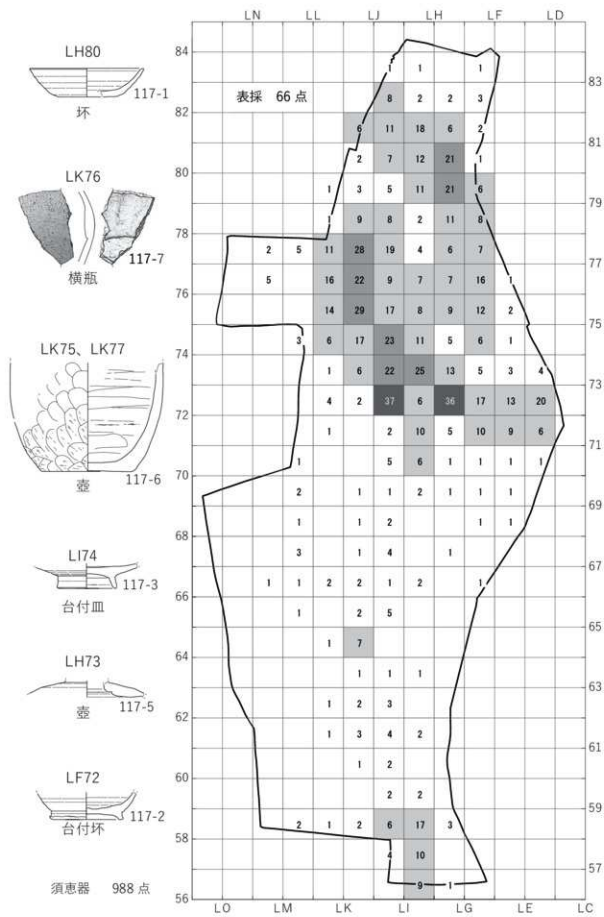


調査風景〔220805撮影、南東→〕

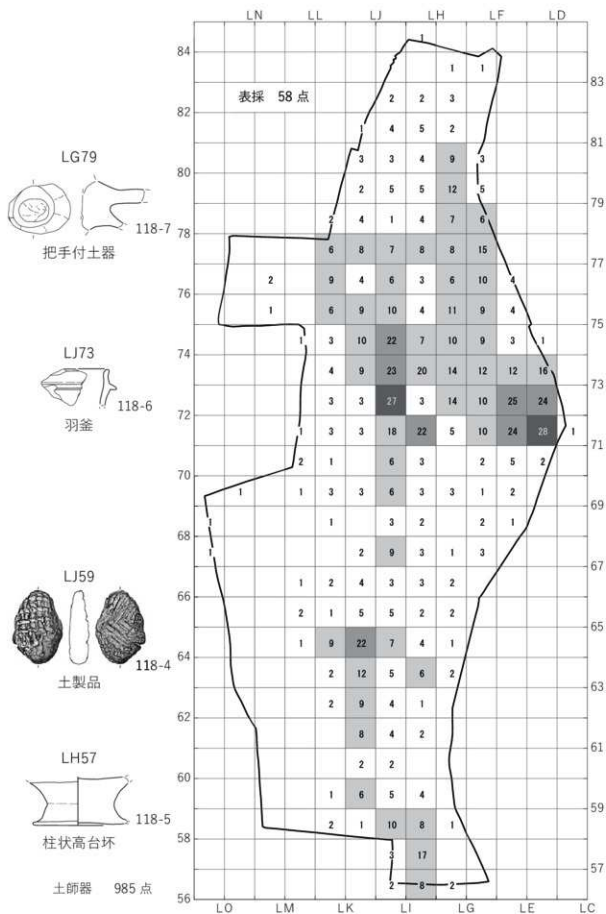
第3表 報告書掲載縄文土器観察表

報告書掲載番号	出土位置	遺物取上番号	器面調整	備考	委託番号
105-1	LK76	60	(外)R燃系か(内)条痕、織維含		L506
105-2	LK74	23033	(外)復節縄文か(内)条痕		L519
105-3	LG72	10401	(外)(底)L R縄文(内)条痕、織維含	底径6.4cm	L536
105-4	LH73	26196	(外)L R縄文(内)ナデ		L528
105-5	LH57	22998	(外)L R縄文→縄文原体縦位圧痕(内)ナデ、織維含		L501
105-6	LH72	12440-2	(外)R L縄文(内)ミガキ、織維含		L568
105-7	LI72	26219	(外)L R羽状縄文(内)ミガキ、織維含		L533
105-8	LK76	26223	(外)R L・L R羽状縄文(内)ミガキ		L507
105-9	LK73	23130-3	(外)降帯貼付(欠落)、L R・R L羽状縄文(内)ミガキ、織維含		L518
106-1	LH72	12612	(外)L R縄文、結節回転(内)ナデ、織維含		L586
107-1	LH73	12456	(外)降帯貼付→R L縄文(内)ミガキ(口)縄文原体末端圧痕、織維含		L525
107-2	LK73	31516-4	(外)R L・L R羽状縄文→補修孔(内)ミガキ		L503
107-3	LI71	9933	(外)降帯貼付→縄文? (内)ミガキ、織維含		L537
107-4	LH72	12611-5	(外)L R縄文→底部近くミガキ(内)ナデ、織維含		L562
107-5	LK72	26433-3	(外)降帯貼付→圧痕、燃系(内)ミガキ、織維含		L500
107-6	LH72	22906	(外)降帯貼付→棒状工具先端圧痕(内)ミガキ		L532
107-7	LH72	12445	(外)降帯貼付(欠落)、R燃系→縄文圧痕(内)ミガキ(口)縄文原体圧痕→棒状工具圧痕、織維含		L559
108-1	LK73	31518	(外)R L・L R羽状縄文(内)ミガキ、織維含		L570
108-2	LI74	23067-1	(外)L燃系→口縁上部結節縄文(内)ナデ(口)縄文圧痕、織維含		L508
108-3	表採	26410	(外)L燃系(内)ナデ、織維含		L530
108-4	LH72	12611-4	(外)L燃系(底)ナデ(内)ミガキ、織維含		L561
109-1	LK73	31516-1	(外)R燃系、口縁上部結節縄文(内)ミガキ	109-1・2・3 同一個体か、 底部径10.4cm	L505
109-2	LK73	23130-2	(外)R燃系(内)ミガキ		L517
109-3	LK73	23130-1	(外)R燃系→ミガキ(内)ミガキ		L516
109-4	LH72	12611-3	(外)燃系か、口縁上部結節縄文(内)ミガキ、織維含	推定口径16cm	L558
109-5	LH72	12611-6	(外)L燃系(内)ナデ	胴部径約18cm	L569
110-1	LI74	23067-2	(外)R燃系(内)ナデ(口)棒状工具圧痕、織維含	110-1・2 同一個体か	L509
110-2	LI74	12623	(外)R燃系か(内)ナデ、織維含		L510
110-3	LH72	12613	(外)R燃系→口縁上部結節縄文(内)ミガキ、織維含		L535
110-4	LH72	12440-1	(外)結節縄文(内)ナデ、織維含		L534
110-5	LH72	12599	(外)R燃系か(内)ナデ、織維含		L566
110-6	LH72	12611-2	(外)L燃系→R燃系か(内)ナデ、織維含		L557
110-7	LH72	12611-1	(外)R燃系(内)ミガキ、織維含		L556
110-8	LI74	10727	(外)R燃系→穿孔(内)ナデ、織維含		L512
111-1	LI72	10782	(外)L燃系(内)ミガキ、織維含		L563
111-2	LI72	10781	(外)L燃系(内)ミガキ、織維含		L538
111-3	LI73	10764	(外)R燃系(内)ナデ、織維含		L565
111-4	LG72	22958	(外)R燃系(内)ナデ、織維含		L524
111-5	LI72	22841	(外)R燃系(内)ナデ、織維含		L564
111-6	LH73	12457	(外)L燃系(内)ミガキ、織維含		L529
111-7	LI74	26409	(外)R燃系(内)ミガキ、織維含		L515
111-8	LH73	10840	(外)R燃系(内)ナデ、織維含		L526
111-9	LK74	22836	(外)L燃系(内)ナデ、織維含		L521
111-10	LG72	26146	(外)R燃系(内)ミガキ		L523
111-11	LI74	12622	(外)燃系(内)ミガキ		L520
111-12	LI74	12506	(外)R燃系(内)ミガキ、織維含		L511
111-13	LK73	31516-3	(外)R燃系を交差させ回転施文か(内)ミガキ、織維含	器厚15mm	L502
111-14	LI74	12503	(外)R燃系か(内)ミガキ、織維含		L513
111-15	LH73	26195	(外)L燃系→絡糸横位圧痕(内)ミガキ、織維含		L527
112-1	LH72	12447	(外)網目状燃系(内)ナデ、織維含		L567
112-2	LK73	31516-2	(外)波状沈線(内)ミガキ	胴部径約12cm	L504
112-3	LI73	12495	(外)沈線(内)ナデ、織維含	底部近く	L560
112-4	LG72	26319	(外)R L縄文→渦巻沈線・刺突(内)ナデ	円盤状に再加工か	L522
112-5	表採	23025	(外)L R縄文(内)ミガキ、径2.4cm	円盤状土製品	L531

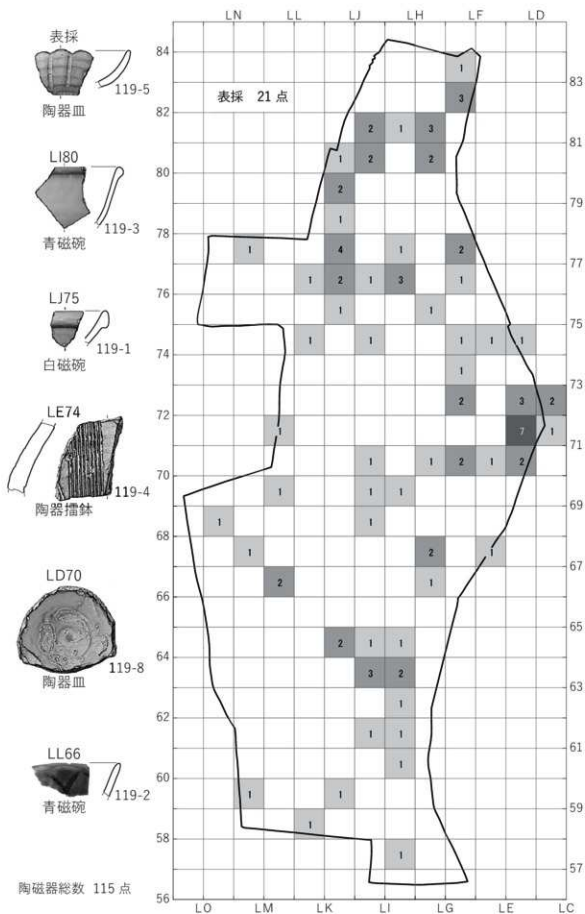
(外)外面、(内)内面、(口)口唇部、(底)底部、「織維含」は粘土に織維を含む



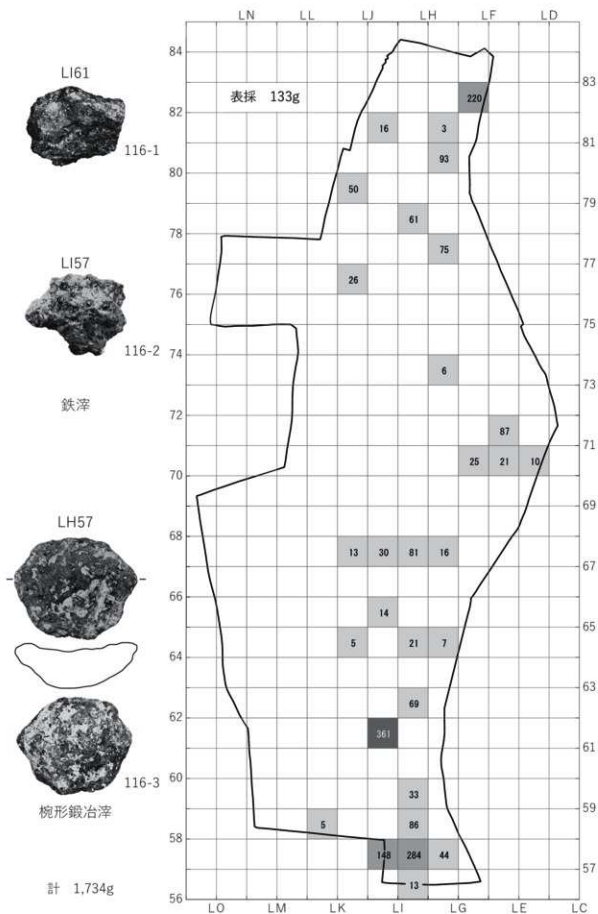
第113图 遺物出土分布图 (14) 須惠器点数



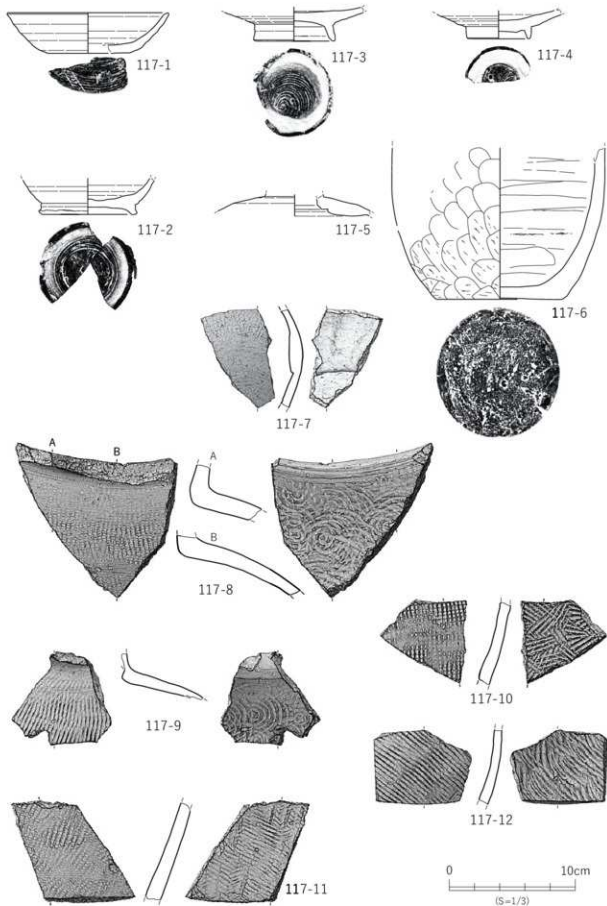
第 114 图 遺物出土分布图 (15) 土師器点数



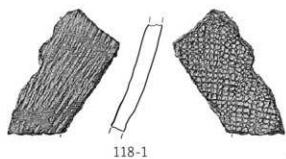
第115图 遺物出土分布図 (16) 陶磁器点数



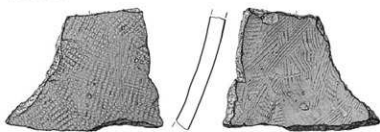
第 116 図 遺物出土分布図 (17) 鉄滓類重量



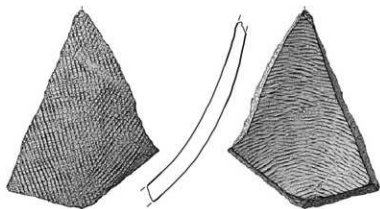
第117図 古代以降の出土遺物（1）須恵器



118-1



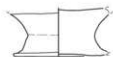
118-2



118-3



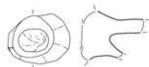
118-4



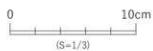
118-5



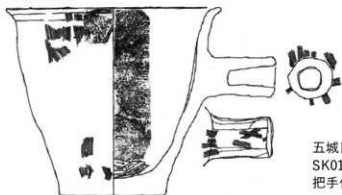
118-6



118-7



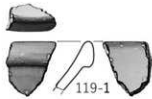
〔参考資料〕



五城目町開防遺跡  
SK01 土坑出土  
把手付土器（五城目町教委 2002）

第 118 図 古代以降の出土遺物（2）須恵器、土師器

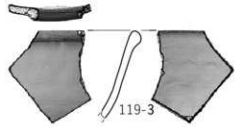




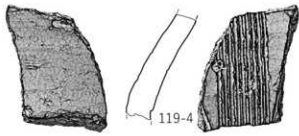
119-1



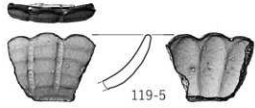
119-2



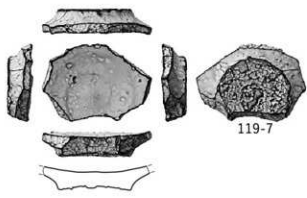
119-3



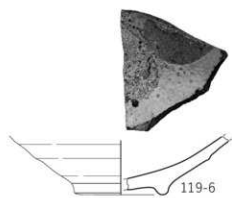
119-4



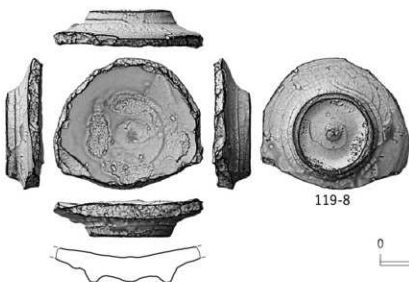
119-5



119-7



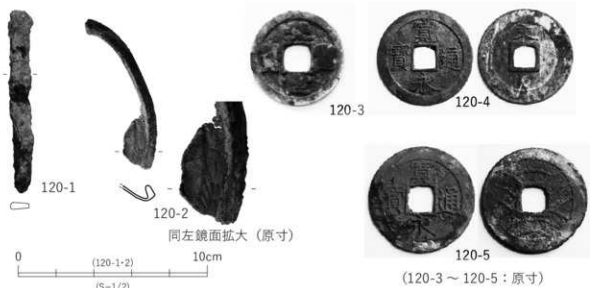
119-6



119-8



第119図 古代以降の出土遺物(3) 陶磁器



第 120 図 古代以降の出土遺物 (4) 金属製品



調査後の状況[221003撮影、南東→]中央奥が高岳山、右奥が浦城跡、右手前が現在の館ノ下集落

第4表 古代以降の報告書掲載遺物観察表

報告書 掲載番号	出土 位置	遺物取上 番 号	種 別	器 種	器 面 調 整		備 考	委託 番号
					外 面	内 面		
116-3	LH57	22214	鉄滓類	梔形滓	長さ9.6cm、幅8.0cm、厚さ3.6cm、重量266g			
117-1	LI80	4801	須恵器	坏	底部:回転糸切、内外面ロクロ/口径12.0cm、器高3.1cm、底径6.0cm			
117-2	LF72	22479	須恵器	台付坏	底部:回転糸切一付高台、内外面ロクロ/台部径5.0cm			
117-3	LI74	22458	須恵器	台付皿	底部:回転糸切一付高台、内外面ロクロ/台部径7.6cm			
117-4	LJ75	22455	須恵器	台付皿	底部:回転糸切一付高台、内外面ロクロ/台部径6.2cm			
117-5	LH73	26024	須恵器	壺	ロクロ成形、胴部・肩部・頸部三段成形/頸部径4.4cm		水瓶か	
117-6	LK77 LK75	4969 12575	須恵器	壺	斜位方向ケズリ	横ナデ	底面ナデ、 底部径9.6cm	
117-7	LK76	26038-1	須恵器	横瓶	平行タタキ→ナデ	ナデ	閉塞部破片	L498
117-8	LK77	25970	須恵器	大甕	平行(格子目状)タタキ→横位ナデ	同心円アテ具		L584
117-9	LH72	26001-3	須恵器	甕	平行タタキ→カキ目状ナデ	同心円アテ具		L581
117-10	LG80	10190	須恵器	甕	格子目タタキ→カキ目状ナデ	矢羽根状アテ具		L578
117-11	LK76	37	須恵器	甕	平行(格子目状)タタキ→ナデ	平行アテ具		L582
117-12	LI72	25898	須恵器	甕	平行タタキ	半円状アテ具		L579
118-1	表採	22571	須恵器	甕	平行タタキ→カキ目状ナデ	格子目状アテ具		L580
118-2	LF71	22607-1	須恵器	甕		平行アテ具?→カキ目		L583
118-3	LH73	25974	須恵器	甕	平行(格子目状)タタキ	平行アテ具	胴部下半部	L585
118-4	LJ59	1437	土師質	土製品	表裏とも工具不明の押圧文			L499
118-5	LH57	25251	土師器	柱状高台杯	摩滅のため不明、台部径7.4cm、台部厚3.5cm		高台部中実	
118-6	LJ73	226632-1	土師器	羽釜	ナデか	ナデか	被熱	
118-7	LG79	11650	土師器	把手付土器	ケズリ、把手部中空	ナデか	被熱	
119-1	LJ75	22151	白磁	碗	口縁上部肉厚な玉縁、大宰府編年：白磁碗IV類			L572
119-2	LL66	242	青磁	碗	竊蓮弁文			
119-3	LI80	22152	青磁	碗	無文、口縁上部小玉縁			L573
119-4	LE74	4006	陶器	播 鉢	壺器系、産地不詳			L574
119-5	表採	25032	陶器	菊 皿	長石釉、いわゆる志野焼			L575
119-6	表採	31513	陶器	皿	残存部では無釉	灰釉、砂目積痕	台部径4.6cm	
119-7	LF72	25039	陶器	小皿	全面施釉(透明釉)、底面に砂目痕		底部径3.8cm	L577
119-8	LD70	31512	陶器	皿	灰釉、高台は露胎・砂目	砂目積痕	台部径4.4cm	L576
120-1	LH76	21778	鉄製品	板状	長さ9.7cm、幅1.0cm、厚さ0.3cm、重量13g			
120-2	LH81	21781	銅製品	銅鏡	推定径14cm、鏡縁の高さ0.7cm、重量18g			
120-3	LK76	8983	銭貨	天聖元貨	外径26mm、銭厚1mm、重量2.9g			
120-4	LI75	21776	銭貨	寛永通寶	外径26mm、銭厚1mm、重量3.3g		背：文	
120-5	表採	21775	銭貨	寛永通寶	外径28mm、銭厚1mm、重量3.8g		背：11波	

## 第4節 黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

南秋田郡八郎潟町浦大町字脇平に所在する館ノ下遺跡の第2次調査で出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

### 2. 試料と方法

分析対象は、表1に示す黒曜石製石器31点(委託番号B1～B31)である。時期は、いずれも縄文時代とみられている。試料は、測定前に超音波洗浄器やメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 $\mu$ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月, 1999など)。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps: count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

$$1) \text{ Rb分率} = \text{Rb強度} \times 100 / (\text{Rb強度} + \text{Sr強度} + \text{Y強度} + \text{Zr強度})$$

$$2) \text{ Sr分率} = \text{Sr強度} \times 100 / (\text{Rb強度} + \text{Sr強度} + \text{Y強度} + \text{Zr強度})$$

$$3) \text{ Mn強度} \times 100 / \text{Fe強度}$$

$$4) \log(\text{Fe強度} / \text{K強度})$$

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度 $\times$ 100/Fe強度の判別図、横軸Sr分率-縦軸log(Fe

表1 分析対象

委託番号	遺物番号	グリッド	重量(g)	器 種
B1	4213	LG56	3	剥片
B2	21225	LJ73	4	石 毬
B3	3491	LK75	5	石 毬
B4	21315	表採	1	石織未成品
B5	9763	LI70	1	石織未成品
B6	23436	表採	5	剥片
B7	21345	LJ76	9	楔形石器
B8	21202	表採	3	剥片
B9	31892	LI60	1	石 織
B10	21224	LE71	23	剥片
B11	8126	LI65	1	楔形石器
B12	21361	LI73	3	剥片
B13	21204	LH72	9	剥片
B14	23662	表採	4	剥片
B15	21226	表採	10	剥片
B16	20153	LJ65	6	剥片
B17	21227	LG81	1	剥片・両極
B18	544	LD71	3	二次加工剥片
B19	20238	LJ59	1	二次加工剥片
B20	23583	表採	7	剥片
B21	21230	LG74	8	原 石
B22	20102	表採	7	剥片
B23	1615	LI58	1	剥片
B24	20316	LJ59	1	剥片
B25	24621	LI73	1	剥片
B26	23564	LH57	13	楔形石器
B27	22779	表採	1	石織未成品
B28	31254	表採	2	剥片
B29	31515	表採	2	剥片
B30	21212	LI74	2	二次加工剥片
B31	21223	LH72	6	二次加工剥片



図1 黒曜石産地分布図(東日本)

1. 白滝
2. 赤井川
3. 上土幌
4. 鹿戸
5. 豊浦
6. 旭川
7. 名寄
8. 樺太
9. 遠軽
10. 生田原
11. 留辺蘂
12. 網走
13. 本道
14. 深浦
15. 青森
16. 男鹿
17. 北上川
18. 宮崎
19. 色麻
20. 仙台
21. 塩竈
22. 羽黒
23. 新発田
24. 新津
25. 佐渡
26. 高路山
27. 和田
28. 新潟
29. 豊科
30. 扇根
31. 天城
32. 神津島
33. 越後

強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせ、指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log (Fe強度/K強度)の値が減少する点に注意が必要である(望月, 1999)。試料の測定面には、なるべく平滑面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図1に各原石の採取地の分布図を示す。

### 3. 分析結果

表3に石器の測定値および算出した指標値を、図2と図3に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を枠円で取り囲んだ。

分析の結果、1点が上士幌群(北海道、上士幌エリア)、2点が出来島群(青森県、木造エリア)、4点が八森山群(青森県、深浦エリア)、19点が金ヶ崎群(秋田県、男鹿エリア)の範囲にプロットされた。B29は、図2では赤井川群の範囲にプロットされたが、図3では赤井川群の範囲の下方にプロットされた。これは、先述したように遺物の風化による影響と考えられ(望月, 1999)、赤井川群(北海道、赤井川エリア)に属する可能性が高い。同様に、B4は出来島群に、B13は八森山群に、B11とB22は金ヶ崎群に属する可能性が高い。

また、図2、3の判別図では、赤井川群と上士幌群の一部に重複があるため、区別が困難な場合がある。そのため、以下に示すY分率を算出している。

表2 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地	
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43)、八号沢遺跡(15)	
		白滝2	7の沢川支流(2)、IK露頭(10)、十勝石炭露頭直下河床(11)、アジナイの滝露頭(10)	
	赤井川	赤井川	曲川・土木川(24)	
	上士幌	上士幌	十勝三股(4)、タウシュベツ川右岸(42)、タウシュベツ川左岸(10)、十三ノ沢(32)	
	置戸	置戸山	置戸山(5)	
		所山	所山(5)	
		豊浦	豊浦(10)	
		旭川	旭川	近文台(8)、雨粉台(2)
		名寄	名寄	忠烈布川(19)
		秩父別	秩父別1 秩父別2 秩父別3	中山(65)
		遠軽	遠軽	社名淵川河床(2)
	青森	生田原	生田原	仁田布川河床(10)
		留辺蘂	留辺蘂1 留辺蘂2	ケシヨマップ川河床(9)
		鶴路	鶴路	鶴路市買スキー場(9)、阿寒川右岸(2)、阿寒川左岸(6)
木造		出来島	出来島海岸(15)、鶴ヶ坂(10)	
深浦		八森山	岡崎浜(7)、八森山公園(8)	
青森		青森	天田内川(6)	
秋田	男鹿	金ヶ崎 脇本	金ヶ崎温泉(10) 脇本海岸(4)	
	北上川	北上新田1 北上新田2 北上新田3	北上川(9)、真城(33)	
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉(40)	
	色麻	根岸	根岸(40)	
	仙台	秋保1 秋保2	土蔵(18)	
	塩竈	塩竈	塩竈(10)	
山形	羽黒	月山 引	月山荘前(24)、大感沢(10) たらのき代(19)	
	新発田	板山	板山牧場(10)	
新潟	新津	真光寺	金津(7)	
	佐渡	真光寺	追分(4)	
栃木	高原山	甘湯沢 七尋沢	甘湯沢(22) 七尋沢(3)、宮川(3)、枝持沢(3)	
	和田	西餅屋	芙蓉パーライト土砂集積場(30)	
		鷹山	鷹山(14)、東餅屋(54)	
		小深沢	小深沢(42)	
		土屋橋1	土屋橋西(10)	
		土屋橋2	新和田トンネル北(20)、土屋橋北西(58)、土屋橋西(1)	
		古峠	和峠トンネル上(28)、古峠(38)、和峠スキー場(28)	
		ブドウ沢	ブドウ沢(20)	
	牧ヶ沢	牧ヶ沢下(20)		
	高松沢	高松沢(19)		
諏訪	星ヶ台	星ヶ台(35)、星ヶ塔(20)		
蓼科	冷山	冷山(20)、麦草峠(20)、麦草峠東(20)		
神奈川	箱根	芦ノ湯 畑宿 鍛冶屋 上多賀	芦ノ湯(20) 畑宿(51) 鍛冶屋(20) 上多賀(20)	
	静岡	天城	柿峠 恩馳島	柿峠(20) 恩馳島(27)
		神津島	砂籬崎	砂籬崎(20)
東京	島根	久見	久見パーライト中(6)、久見採掘現場(5)	
		箕浦	箕浦海岸(3)、加茂(4)、岸浜(3)	



表3 測定値および産地推定結果

分析No.	K強度(cps)	Mn強度(cps)	Fe強度(cps)	Rb強度(cps)	Sr強度(cps)	Y強度(cps)	Zr強度(cps)	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	log <sub>10</sub> K/K	Y分率	判別群	エリア	分析No.
B1	244.1	90.9	3140.5	579.5	65.0	543.8	3668.3	11.93	2.90	1.34	1.11	11.20	八森山	深浦	B1
B2	280.6	185.6	1144.9	1027.0	643.6	456.5	876.9	34.19	16.21	21.42	0.61	15.20	金ヶ崎	男鹿	B2
B3	225.9	87.4	2996.5	482.4	60.2	446.6	3084.7	11.84	2.92	1.48	1.12	10.96	八森山	深浦	B3
B4	280.5	178.7	1350.6	584.1	647.2	411.7	769.0	24.22	13.23	26.83	0.68	17.07	出来島?	木造?	B4
B5	216.6	85.9	2946.0	450.0	60.4	415.0	2892.1	11.79	2.92	1.58	1.13	10.87	八森山	深浦	B5
B6	249.0	161.9	1004.0	888.3	558.2	390.9	732.6	34.56	16.12	21.72	0.61	15.21	金ヶ崎	男鹿	B6
B7	309.2	200.1	1238.6	1088.2	682.6	477.4	888.9	34.69	16.15	21.76	0.60	15.22	金ヶ崎	男鹿	B7
B8	221.3	82.9	2829.4	487.1	67.1	460.8	3115.2	11.79	2.93	1.62	1.11	11.16	八森山	深浦	B8
B9	212.4	135.2	838.4	758.9	478.9	339.2	645.7	34.14	16.12	21.55	0.60	15.26	金ヶ崎	男鹿	B9
B10	251.8	177.7	1336.8	564.9	638.1	407.4	764.0	23.79	13.30	26.87	0.73	17.16	出来島	木造	B10
B11	225.2	123.0	789.5	683.2	416.4	297.9	548.9	35.10	15.58	21.39	0.54	15.30	金ヶ崎?	深浦?	B11
B12	291.5	192.0	1170.5	1013.9	640.1	447.5	825.9	34.63	16.41	21.87	0.60	15.29	八森山?	男鹿?	B12
B13	392.5	100.4	3365.3	707.8	75.6	639.4	4345.8	12.27	2.98	1.31	0.93	11.08	八森山?	深浦?	B13
B14	289.7	188.3	1143.4	1032.3	648.5	458.7	848.1	34.56	16.47	21.71	0.60	15.35	金ヶ崎	男鹿	B14
B15	256.5	77.6	1580.6	753.6	333.4	413.0	771.4	33.18	4.91	14.68	0.79	18.18	上土幌	上土幌	B15
B16	246.1	157.6	975.3	781.3	490.0	338.6	618.6	35.06	16.16	21.99	0.60	15.19	金ヶ崎	男鹿	B16
B17	284.2	181.6	1162.7	1021.6	639.4	445.9	831.4	34.77	15.62	21.76	0.61	15.18	金ヶ崎	男鹿	B17
B18	299.2	193.7	1176.6	1029.3	644.1	453.4	839.8	34.70	16.47	21.71	0.59	15.28	金ヶ崎	男鹿	B18
B19	276.3	184.7	1139.7	1022.1	635.3	450.1	823.7	34.87	16.20	21.67	0.62	15.36	金ヶ崎	男鹿	B19
B20	291.0	186.7	1151.0	1015.4	638.7	456.0	873.6	34.03	16.23	21.41	0.60	15.28	金ヶ崎	男鹿	B20
B21	289.3	186.3	1179.0	1035.1	650.5	462.8	888.2	34.09	15.80	21.42	0.61	15.24	金ヶ崎	男鹿	B21
B22	390.8	195.7	1210.2	1046.4	642.9	456.9	834.9	35.10	16.17	21.57	0.49	15.33	金ヶ崎?	男鹿?	B22
B23	286.2	190.5	1201.9	1035.0	639.3	453.9	873.5	34.48	15.85	21.30	0.62	15.12	金ヶ崎	男鹿	B23
B24	282.3	182.1	1122.4	972.5	613.4	431.6	802.6	34.48	16.22	21.75	0.60	15.31	金ヶ崎	男鹿	B24
B25	283.5	183.7	1122.0	1026.0	640.2	459.7	848.4	34.50	16.37	21.52	0.60	15.45	金ヶ崎	男鹿	B25
B26	237.8	155.2	944.4	800.2	504.5	357.0	661.3	34.45	16.43	21.72	0.60	15.37	金ヶ崎	男鹿	B26
B27	215.6	156.8	1206.9	497.0	554.6	347.9	667.3	24.05	13.00	26.83	0.75	16.83	出来島	木造	B27
B28	269.0	174.4	1070.9	935.0	587.2	420.7	772.7	34.43	16.29	21.62	0.60	15.49	金ヶ崎	男鹿	B28
B29	260.7	78.0	1389.5	617.7	284.9	307.6	650.6	33.19	5.62	15.31	0.73	16.53	赤井川?	赤井川?	B29
B30	281.1	184.0	1143.2	978.3	617.6	430.9	813.9	34.44	16.09	21.74	0.61	15.17	金ヶ崎	男鹿	B30
B31	318.6	201.9	1252.7	1075.7	674.8	472.0	862.1	34.87	16.12	21.88	0.59	15.30	金ヶ崎	男鹿	B31

Y分率=Y強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)

赤井川群と上土幌群、上土幌群と一部重複のある青森群の原石および石器について、横軸にY分率、縦軸にMn強度×100/Fe強度をプロットした判別図を図4に示す。図4においても、B29は赤井川群、B15は上土幌群の範囲にプロットされた。

表3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

#### 4. おわりに

館ノ下遺跡より出土した縄文時代の黒曜石製石器31点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、21点が男鹿、5点が八森山、3点が木造、1点が赤井川、1点が上土幌エリア産と推定された。

#### 引用文献

望月明彦(1999) 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定。大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡篇—」:172-179、大和市教育委員会。

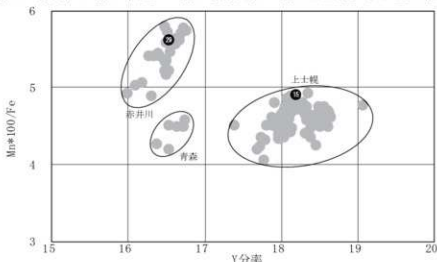


図4 黒曜石産地推定判別図(3)

## 第4章 総括

五城目町と八郎潟町に位置する館ノ下遺跡は、高岳地区農地集積化基盤整備事業、いわゆる圃場整備に伴い二度の発掘調査が行われた。それは令和3年に、五城目町が遺跡の南半部に当たる浦横町字大堰西地内で、令和4年には八郎潟町が遺跡の北半部に当たる浦大町字脇平地内において第2次となる調査を実施した。

本遺跡で検出された遺構は、時期不明を除くと縄文時代に限定される。一方で出土遺物は、縄文時代、弥生時代、平安時代、古代、中世、近世と各時代・時期に及ぶ。本章では、主として第2次調査の総括を行うが、適宜第1次調査の成果も加えたい。

### 第1節 縄文時代

#### 1 検出遺構と出土土器

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡（S101）1軒、土坑（SK11・13・15・16）4基、土器埋設遺構（SR17）1基であった。

第1次調査で確認のS101（位置は第3図参照）は、北側に埋設土器、南側に石組部と前庭部を設けた複式炉と柱穴2本のみが検出され、住居規模や形状は不明である。住居の構築時期は、埋設土器の文様構成から中期後半（大木9式期）に特定された。

一方の土坑4基と土器埋設遺構は第2次調査区内で確認され、いずれも前期に属すると推測した。遺構の性格はSK13が墓、SR17も焼面や焼土がなく、周辺に柱穴等の遺構が未確認であることから土器棺墓の可能性を想定したい。SK13については次項で詳述する。

遺構外を含む出土の縄文土器は、一定数（2,200点、約61kg）抽出できたが、摩耗・小片が圧倒的に多く、ほぼ完全な形に復元されたのは1個体（第106図1）に留まる。施工手法で4分類（A～D類）したうち、内面に条痕をもつA類は図示した3点のみの確認である。時期的には早期後葉～末葉段階に取まる。館ノ下遺跡の北約7km、秋田自動車道琴丘森岳IC近辺に位置する三種町鹿渡の狐森遺跡でも外面条痕、内面条痕の土器片が少量出土している（秋田県教委2000）。

B～D類は、いずれも前期の枠内に取まり、明確に中期以降となる土器片は見いだせなかった。数量的にみれば、感覚的ではあるが全体の8割程度がC類、次いでB類、D類は少量のみである。

B・C類のうち、107-5・6などのように、頸部隆帯に指頭圧痕状刺突をもつ個体は円筒下層b式に、107-2などのように、頸部に2段の縄圧痕による区画をもち、口縁部文様帯に羽状縄文を施す個体は円筒下層c式と見られる。また、112-1には網目状燃系が認められることから大木4式併行期か。沈線文が認められるD類は、C類より一段階新しく大木5式となるものであろう。

B・C・D類は前期の中葉から後半にかけての土器群であり、本遺跡の南約8km、井川町坂本に所在する大野地遺跡（井川町教委1988）で出土の土器群と対比が可能である。同遺跡は標高45m前後の丘陵地に立地する前期の集落跡であり、調査地区は集落に付随する「生活用具の廃棄場所」と報告がある。円筒下層b式と大木3～4式が中心である。



## 2 石器からみる縄文時代の館ノ下

本遺跡から出土した縄文時代の遺物は、総数の96%（土器2,200点+石器54,879点=57,079点/総数59,231点×100≒96.3）、重量比でも96%を越す（土器61.097kg+石器1,203.087kg=1,264.184kg/総重量1,314.806kg×100≒96.1）。このように石器が出土品の中心であることが本遺跡の特徴である。その内訳について、製品（敲石・磨石・台石などの使用痕系列の石器（大工原豊他2020）、未成品を除く）と残滓（石核・剥片）の数量を見てみると、製品2,904点（89,890g）：残滓48,385点（836,665g）となり、石器群全体に占める製品の割合は0.06%と非常に少ない。

こうした比率は石器製作地に特有のものであり、本遺跡の調査区もそうした位置づけで評価されるものである。ただし、遺物の出土状況と基本土層からは、本遺跡出土品は自然の二次的移動を被ったものと考えられ、本来の石器製作地を含む居住域は、調査区より東側の一段高位の面にあったものと推定される。

### (1) 珪質頁岩産地とその特徴

館ノ下遺跡の東側にあたる丘陵部の基盤となる地層は、第4図に示したように泥岩を主とする船川層（msF）であり、その東側には珪質頁岩の女川層（ShO）が縦走し、北側にも一部確認される。出土した石器類は、礫石器を除くと黒曜石が31点、鉄石英が13点、玉髓質頁岩650点の他は、珪質頁岩で占められる。

遺跡地周辺から採取される原石は亜角礫～亜円礫～円礫と多様である。亜円礫～円礫は女川層から産出された珪質頁岩が、タライ沢や子持沢などの小河川の開析により洗い出された結果、脆弱部が削り落とされて転石となったものが選択的に入手された可能性を指摘できる。このほかに一定量みられる亜角礫は露頭（未確認）周辺から採集されたものであろう。それらを石器原料として集中的な石器製作が行われているようである。

秋田県内の珪質頁岩は、肉眼観察によりおおそ三種類の石質に分けられる。

**A類**：地殻変動や熱流の影響により石質内部が変成作用の結果オパール化し玉髓質となるもの。

**B類**：珪化作用が進行し、肌理が滑らかになるもの。

**C類**：珪化作用が進行せず、肌理が粗いもの。

このうちA類は、鹿渡沙II遺跡、樋向I・II・III遺跡、大沢I・II遺跡の6遺跡からなる三種町上岩川遺跡群（秋田県教委2008）のある三種川支流小又川流域で、人頭大～直径1m以上の巨礫まで産出することが知られている（吉川2012）。上岩川遺跡群は珪質頁岩原産地遺跡群として知られ、珪質頁岩原石の採掘から石器製作までが行われていることが確認されている。

A類は、直径5cmほどの小礫であれば他にも、米代川・子吉川流域や男鹿半島、田沢湖東岸などでも分布が確認される。B類も秋田県内では分布が県北沿岸部を中心に、米代川中下流域、三種川流域、子吉川下流域、雄物川中流域、田沢湖東岸などでまとまった分布域がある。C類はより広く全県的に分布が確認される。本遺跡の石器群ではA～C類の珪質頁岩が確認される。本県では数少ないA類の大型原石を素材とした石核や石槍が存在することから、上岩川遺跡群同様に露頭が周囲に眠っている可能性がある。

また、礫面の特徴の中で、とくにB類中にはクレーター状になるものがある。これは凝灰岩層中で

形成されたノジュールである場合が多い。ラミナの発達しているものも一定量認められる。ラミナの発達には外からの流れの影響をあまり受けない静かな海底で形成されたと推定される珪質頁岩に見られ、秋田県沿岸部における珪質頁岩の特徴であるという。こうした礫面がクレター状になりラミナが発達したB類は館ノ下遺跡の北東約1kmに位置する白ケ口V遺跡（第5図6、八郎潟町教委2021）でもまとまって確認された。A類同様、遺跡周辺に露頭のある可能性が高い。

## （2）剥片剥離技術の特徴

本遺跡は原産地遺跡的な性格が強いため、石核のパラエティが豊富で、礫面を残すものが多い。ここでは石核と剥片から本遺跡の剥片剥離技術の特徴を検討する。

石核の分類と点数で示したように（29頁）、出土した石核の類型で最も多いのはB-4類（208点）、ついでD-3類（116点）、A-3類（115点）、D-4類（111点）の一群があり、これらが過半数となる。点数的には5群に区分できる。つまり、1群：200点以上のB-4類、2群：100点代のA-3・D-3・D-4類、3群：40～70点のD-5・B-5・B-3類、4群：10～30点代のA-4・A-5・B-2b・B-2c・C-3・C-4類、5群10点以下のその他の類型である。なお、本遺跡と同様の性格を持つと考えられる白ケ口V遺跡ではA-3類（87点）とB-3類（83点）が群を抜いて、ついでD-3類（37点）、B-6類（29点）、B-5類（28点）、C-3類（26点）、B-4類（25点）と続き、本遺跡とは様相を異にする。

剥片剥離技術別（1～7類）に石核をみてみると、両設打面により石刃状もしくは縦長剥片を剥離する1類は2点、単設打面により矩形～横長幅広剥片もしくは貝殻状剥片を剥離する2類は74点、90度打面転位により矩形～横長幅広剥片を剥離する3類は316点、求心状剥離により横長幅広剥片を剥離する4類は358点、打面と作業面を交互に入れ替えて矩形～横長幅広剥片を剥離する5類は123点、原石や剥片素材石核に1回のみ剥片剥離を行う6類は6点、両極打法による7類は18点となる。白ケ口V遺跡では原石もしくは部厚な剥片を石核素材として90度打面転位を頻繁に繰り返して、矩形～横長幅広剥片を連続的に生産する剥片剥離技術3類が主体となっていた（八郎潟町教委前掲）。本遺跡では、大形部厚な剥片を石核素材とした求心剥離技術4類が中心となり、生産される剥片は、端部がやや肥厚する矩形～横長幅広剥片が主体となる。次いで3類による剥片剥離が多い。

本遺跡からは剥片石器の未成品が一定量出土している。これらを観察すると上記3・4類を中心とした剥片剥離により得られた剥片を素材としていることが分かる。ただし、これら石核の素材形態や剥片剥離技術は排他的・独立的なものではなく、原石の形状やサイズ、剥片剥離の進行に伴い、類型間をまたいで遷移していくものであることに注意が必要である。この点については白ケ口V遺跡の報告でも述べたところである（八郎潟町教委前掲：100頁）。技術間の連関性について接合資料を通して実証的に示しうるものであるが、本遺跡では膨大な石器出土量と限られた整理期間内で接合作業までは果たすことができなかった。

## （3）出土石器の特徴

本石器群の主体は石鏃・石槍・石筈・石匙・削器・搔器である。このうち、前4者の定形石器を見てみると、石鏃はC・D類を中心とし、2cmを越えるものが目立つ。石槍は大・中・小型品があるが、総じて大型品が目立つ。両面調整が中心で、基部に非常に軽微ながら抉り状の加工がみられるもの

(26-7・8) が特徴的に存在する。石筥も10cmを越える大型品が顕著であり、形態は前述のように短冊形・楕円形・撥形を中心に多様である。両面調整を基本に、剥片素材のものには片面調整のものも認められる。石匙はA類(縦型)が82%と中心的でとくに下端部が尖るA1類が特徴的である。

また、小型の石匙のなかには刃部を作り出していない模造品様のもの(48-7-51-2、いずれも黒曜石)がある。模造品様を示す黒曜石製の小型石匙は、前期後半の集落跡である大館市池内遺跡(秋田県教委1998)からもまとまって出土しており、その用途は明らかではないが特殊な事例として注意しておきたい。

この他、68-2は扶入尖頭器(田中1995)の範疇として捉えることも可能な異形石器である。磨製石斧では擦切技法が顕著であり、長軸10～20cmの中形ものは大館市上ノ山II遺跡(扶状耳飾文献17)などでまとまって見られる。

以上の定形石器の形態や法量を見ると、石鏃のB・C・D類や大型の石槍・石筥、縦型石匙(とくに尖端部をもつ両面調整石匙)、扶入尖頭器様の異形石器、擦切技法による中形磨製石斧のほか、扶状耳飾、直径10cm以上の石錘、半円状扁平打製石器などは縄文時代前期の特徴を有するものである。

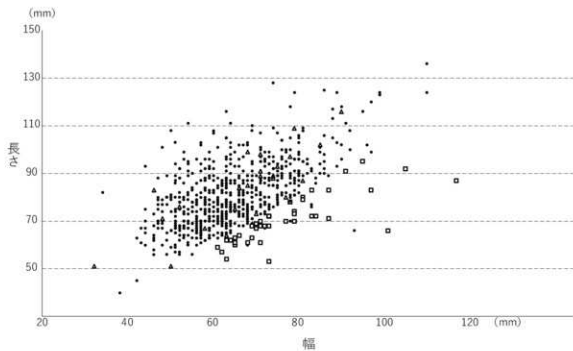
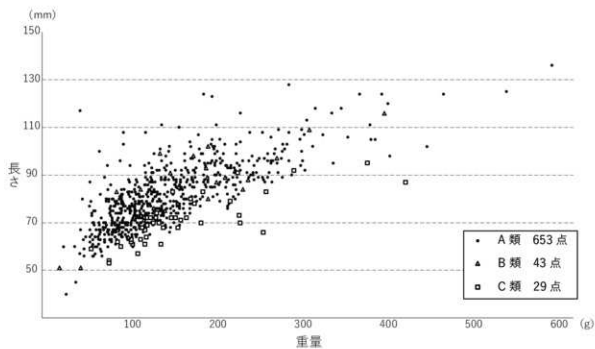
また、以上のほかに他時期の指標となる石器も散見される。剥片石器の中では、一つは横刃削器(59-1・2)である。本県では横手市平鹿遺跡(秋田県教委1983)や秋田市戸平川遺跡(扶状耳飾文献11)でまとまって見られる。もう一つは、嘴状石器(68-3)である。横手市八木遺跡(秋田県教委1989)で多く出土している。また、礫石器の中では虫内型(吉川2012)に類する打製石斧(68-9)がある。これらは縄文時代晩期に多く見られるタイプで、縄文時代前期では確認されない。このほかに、加工はあまりなされていないものの、三脚石器がある(68-7)。これは縄文時代後期前葉に帰属するものであろう。

なお、31点の出土した黒曜石は、石鏃1点、石鏃未成品2点、石匙2点、楔形石器3点、二次加工ある剥片5点、剥片17点、原石1点であった。産地推定の結果では、地元の男鹿(金ヶ崎海岸)21点、青森県深浦(八森山)5点、青森県木造(出来島)3点、北海道の赤井川・上土幌各1点と示された(前章参照)。赤井川産の黒曜石は、館ノ下遺跡の東北東約17kmに位置する上小阿仁村大林の小袋岱遺跡(秋田県教委1999b)でも確認されている。同遺跡は、縄文時代中期中葉～後期初頭の集落跡である。上土幌産は、横手市雄物川町の神谷地遺跡(横手市教委2015)で出土例がある。同遺跡は主に縄文時代中期の集落跡である。

#### (4) 石錘から読み取れること

漁網錘あるいは編物石と推測される打欠による抉りが見られる、いわゆる打欠石錘は776点確認できた。礫石器のなかでは飛び抜けて多い出土である。使用されている石材は、デイサイト307点、安山岩258点であり、全体の73%を占めている。当地のデイサイトは、森山デイサイトとも呼ばれるように、遺跡の東側に位置する森山あるいは北側にあたる高岳山の基盤層(第4図下、Da:石英安山岩)に由来する岩石であり、まさしく地元の石材を利用していることが明確である。この傾向は半円状扁平打製石器など他の礫石器でも同様である。

出土した石錘のうち長軸端2辺に抉りが入るA類653点は、分類不能(K類51点)を除くと全体の90%(653点/776点-51点×100=90)に達している。A類は長さ40～136mm(平均81mm)、幅35～



第 121 図 石錘散布図

111mm (平均65mm)、厚さ10～37mm (平均19mm)、重量25～597g (平均147g) の幅をもつ。短軸端2辺に抉りをもつB類43点は、長さ53～95mm (平均70mm)、幅62～118mm (平均78mm)、厚さ12～38mm (平均21mm)、重量57～426g (平均161g) であり、平均重量で見ればA類より重いことになる。抉りが3・4辺に及ぶC類29点は、長さ51～116mm (平均85mm)、幅33～91mm (平均68mm)、厚さ12～31mm (平均21mm)、重量20～401g (平均169g) となり、A・B類より大きく重い数値を示している。

また、第121図に示した散布図をもとに見れば、石鍾の長さは60～110mmを示す個体が688点となり全体(K類を除く725点)の95%を占めている。重量では50～199gが604点、200～399gが100点であり、50g未満が13点、400g以上が8点となり、50g以上200g未満が全体の83%を占めている。

石鍾の長さとの関係で見れば、長さが50～110mmかつ幅40～80mmに収まるのは635点であり、全体の88%となる。

なお、考古資料に文献史料・民具資料による検討を行った山本直人氏によると「8g～110gの打欠石鍾は漁網鍾になる可能性がある」とし、「110gをこえて880gまでの打欠石鍾は第2～4群製品の編物石になる可能性がある」とする(山本2011)。第2～4群製品とはコモ・カゴ・ムシロなどの編物(もじり編み)を指す(渡辺1981)。

本遺跡から出土した石鍾は、その立地を考慮すれば漁網鍾と見てしまうが、上記の文献を参照すれば単純に断ずることはできないのかもしれない。

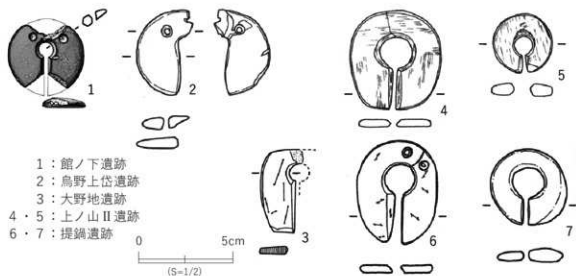
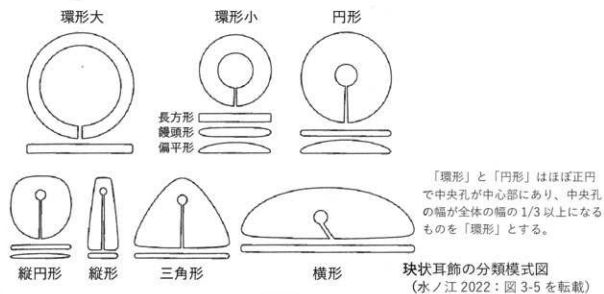


石鍾集合写真(石鍾A類を532点抽出して撮影)

#### (5) 玦状耳飾

玦状耳飾とは、「古代中国の玉器「玦」が祖型と想定され、呼称された」(川崎2019)のものであり、本遺跡から遺構外、小片ではあるものの、瑪瑙質の1点が出土した。当該石製品は、縄文時代早期末葉に出現し中期中葉まで、分布範囲は北海道から九州まで及ぶ。水ノ江和同氏が示した「玦状耳飾の分類模式図」(第122図上、水ノ江2022)に従えば、本遺跡出土は「円形」タイプとなるようである。

秋田県内でも第5表に示したように、管見ではあるものの26遺跡から未成品を含め111点の出土がある。このなかで、円形タイプを示す製品の出土は多くはなく、まとまっているのは大仙市上ノ山Ⅱ遺跡(玦状耳飾文献17)と由利本荘市の提鍋遺跡(同文献13)にある。上ノ山Ⅱ遺跡は縄文時代前期(主として大木4・5式期)の集落内で玦状耳飾を製作・加工している。ただ、提鍋遺跡を含めた2者(第122図5・7)とも中央の孔が比較的大きく、館ノ下遺跡と同様の円形かつ中央孔が小さいタイプは、能代市ニツ井町の鳥野上岱遺跡(同文献3)のみのようである。同遺跡の玦状耳飾は遺構外での確認ではあるものの、遺跡内出土の縄文土器は早期末葉、前期初頭～前葉の時期となる。



第122図 玦状耳飾の分類模式図と秋田県内出土の円形・縦円形をなす玦状耳飾

第5表 秋田県内における石製球状耳飾出土遺跡一覧

遺跡名	回数	所在地	点数	平面形状	石質・備考	文献
1 池内遺跡		大館市	1		未成品	1
2 深渡遺跡		北秋田市	1	不明	折損後再加工	2
3 烏野上岱遺跡		能代市	1	円形(径44mm)	滑石	3
4 茱萸ノ木遺跡		能代市	1	三角形	中期前葉	4
5 館ノ下遺跡	第2次	八郎潟町	1	円形	瑪瑙	本書
6 大野地遺跡		井川町	1	縦円形	緑色凝灰岩	5
7 北浦地区		男鹿市	1	三角形	翡翠	6
8 下堤遺跡	第4次	秋田市	1	縦円形	住居跡出土	7
9 片野Ⅰ遺跡		秋田市	1	縦円形		8
10 秋田城跡	第48次	秋田市	1	縦円形	政庁地区	9
	第49次		1	縦円形	鶴ノ木地区	
11 上新城松木台		秋田市	1	縦円形		10
12 戸平川遺跡		秋田市	1	縦円形		11
13 龍門寺茶畑遺跡		由利本荘市	2	環形小か	未成品1	12
14 提鍋遺跡		由利本荘市	14	円形・縦円形		13
15 ヲフキ遺跡	第1次	にかほ市	3	縦円形	緑色凝灰岩・凝灰岩	14
	第3次		4	環形小・円形・縦形		15
	第4次		5	環形小・円形	うち4点は土坑内出土	16
16 上ノ山Ⅱ遺跡		大仙市	52	円形・縦円形・環形小・縦形	蛇紋岩・滑石・緑色凝灰岩・凝灰岩、未成品あり	17
17 小出Ⅱ遺跡		大仙市	1	環形小か	凝灰岩	18
18 弘田柵跡	第120次	大仙市	2	円形か		19
19 湯前遺跡	第1次	仙北市	4	円形・縦円形・縦形		20
	第2次		1	縦円形	蛇紋岩、竪穴住居跡出土	21
20 高野遺跡		仙北市	1	縦形	緑色凝灰岩、中期初頭か	22
21 根羽子沢遺跡		横手市	1	縦円形	石組遺構内出土	10
			1	円形、個人蔵(横手市雄物川郷土資料館寄託)		
22 雄物川町深井		横手市	1	環形小、横手市雄物川郷土資料館蔵(「36年/10雄物川橋」日記あり)		
23 下田遺跡		横手市	1	円形か	頁岩	23
24 白館跡		湯沢市	1		未成品	24
25 立浪遺跡		湯沢市	2	円形・環状小	遺構外出土(未報告)	25
26 上掬遺跡		東成瀬村	2	縦円形・縦形	1点は土坑内出土	26

## (6) 出土石器から見た館ノ下遺跡の性格

石器は原位置を保っておらず、二次的堆積物中の出土であることから、調査区より標高の高い場所から流されてきたものである。その中でもS K13土坑は数少ない遺構である。石鏃B類や玉髄製石筥、周辺加工の石匙などが出土しているが、こうした特徴は、大館市池内遺跡(秋田県教委前掲)や青森市石江遺跡(青森県教委2008)、同新町野遺跡(青森市教委2006・2008)など、東北地方北部の円筒下層c・d式期の土坑墓にしばしばみられる特徴である。八郎潟付近までそうした土坑墓が分布することが本遺跡の調査で明らかとなった。

さて、本遺跡の特徴となる石器は二次的移動を被っているものの、摩滅していないことから、すぐ上位の段丘面が原位置であったと考えられる。平面分布からの検討はできないものの石器群の内容から、遺跡の性格を吟味することは可能である。本石器群の特徴として、数多くの石核や剥片類に伴って、石槍や石筥、石鏃などの定形石器の未成品が非常に多い点がある。こうした特徴は石材原産地遺跡に見られるものである。本遺跡ではこれらの石器の製作が頻繁に行われていたであろうことは、調整剥片の多さからもうかがえる。上岩川遺跡群では石筥と石槍に、原位置を保っていないものの白ケ口V遺跡では石筥にほぼ限定した石器製作が確認されたが、本遺跡ではより多器種の生産がなされていることが大きな特徴といえる。

珪質頁岩の原石・石核の礫面の状態からは、亜角礫～円礫～亜円礫と多様であることから、前述のように露頭近辺で採集されたものと河川で採集されたものがあると推定される。露頭は未確認であるため、今後の石材環境調査が課題である。白ケロV遺跡では原石がまとまって確認され、原石保管の可能性を考えたが、本遺跡では分割礫のほかは原石が確認されておらず、原石保管行為の痕跡は認められない。上岩川遺跡群を参照にすると、段丘礫層中に転礫として包含される珪質頁岩の入手を目的とした採掘坑跡や、採掘した原石を一括保管した場が眠っている可能性も否定できない。

以上から本遺跡は、本来縄文時代前期の墓域であった場所に、一段高い中位段丘面からの流れ込みにより石器製作作業に伴う石器類に覆われて形成されたと考えられる。石器には石錘や半円状扁平打製石器、磨石、台石などもあることから、石器製作に特化した遺跡ではなく、土坑墓の存在からも集落遺跡でもあったといえる。

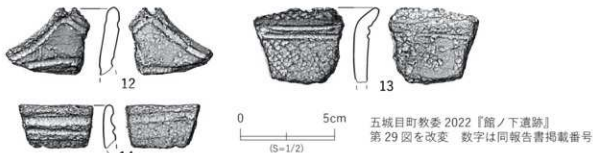
本遺跡は石器製作を中心としながらも、石鏝や石槍にみる狩猟、石錘にみる漁撈、磨石・台石類にみる植物加工など、多岐にわたる生業活動が営まれていたこともうかがえる。本遺跡を特徴づける大規模な石器製作作業は、おそらく豊富な珪質頁岩資源環境下において実現したのであろう。すなわち、本遺跡は県内でも事例の少ない原産地直下型の縄文時代前期集落と位置づけることができる。

馬場目川流域を含む本地域は石器原料となる珪質頁岩が分布することが近年分かってきている。館ノ下遺跡の発見は、そうした石材環境に対して縄文時代の人々が積極的に働きかけていたことを明らかにしたものとして重要である。本遺跡で確認されたことが特殊な事例であるのか、もしくは本来は本県においての常態であったのか、今後、周辺の縄文時代遺跡との比較や他石器群の再検討を通じて、本地域における石器石材としての珪質頁岩資源の利用実態を解明する必要がある。

## 第2節 弥生時代、古代、中世・近世

### 1 弥生時代

弥生時代に属する遺物は、第1次調査においてのみ8点出土し、五城目町教育委員会が刊行した報告書『館ノ下遺跡』（五城目町教委2022）には3点（同報告書第29図12～14）が図示されている（第123図に再録）。秋田県埋蔵文化財センターの大上立朗氏の教示によれば、うち12は浅鉢であり中期前葉、13は筒形頸部をもつ小型の甕であり、中期中葉に位置づけられそうである。前者は能代市寒川I遺跡（秋田県教委1988a）や男鹿市の横長根A遺跡（若美町教委1984）、後者は男鹿市三十刈I遺跡（秋田県教委1984）や三種町堂の下遺跡（秋田県教委2003）に類例がある。



第123図 館ノ下遺跡第1次調査出土の弥生土器



## 2 古代

古代に属する遺物には須恵器と土師器がある。須恵器は989点を確認しており、器種では坏・台付坏・台付皿、甕、壺、横瓶がある。点数比で見れば全体の75%が甕類で占められる。

### (1) 須恵器

須恵器の特徴的な器種として横瓶が挙げられる。これは横長・俵形の胴部をもつ特異な形状を示しており、本遺跡では胴部端の閉塞部片のみではあるものの少なくとも2個体の確認ができた。横瓶は、館ノ下遺跡の近隣では、北約4.5kmに位置する三種町鯉川の小林遺跡(秋田県教委1999c)と潟上市昭和豊川龍毛の後山遺跡(秋田県教委2002)で出土例がある。横瓶を焼成した須恵器窯跡は、秋田市下新城岩城の右馬之丞窯跡(伊藤1988)にあり8世紀第3四半期とされる。また、秋田市添川の古城廻窯跡第3号窯跡(秋田市史1997)では9世紀第1四半期である。両窯製品の供給先は秋田城(733年創建～10世紀中頃)や関連する官衙関連遺跡であることが示されていることから、小片の横瓶ではあるものの、古代の館ノ下とは何かを考える上で鍵を握る遺物となるはずである。なお、秋田城跡歴史資料館で収蔵している両窯跡出土の横瓶を実見したところ、館ノ下遺跡の2個体とは胎土が明らかに異なることを確認した。

また、須恵器台坏皿(第117図3・4)は、館ノ下遺跡の西北西約15km、男鹿市野石(旧若美町)に所在する海老沢窯跡・西海老沢窯跡の製品と判断される(若美町教委1975)。生産時期は9世紀第3四半期である。

### (2) 土師器

一方の土師器は985点出土しており、器種では坏・台付坏・柱状高台坏・甕・羽釜・把手付土器がある。このなかで把手付土器を取り上げたい。

把手付土器は小型の甕あるいは鉢の体部に1本の棒状把手が付される形状を示す。これは、青森県津軽地方や米代川上流域の鹿角地方(鹿角市太田谷地館跡・下沢田遺跡、小坂町はりま館遺跡など)における10世紀前半以降11世紀代に出現する地域色の強い遺物とされていた(秋田県教委1988b)。ところが、1990年代に入ると米代川下・中流域の能代市加代神館跡(ニツ井町教委1996)や北秋田市脇神館跡(秋田県教委1999a)でも出土例が報告され、八部潟東岸城の三種町小林遺跡(秋田県教委2004)や五城目町開防遺跡(第118図下、五城目町教委2002)でも分布が知られるようになった。秋田県内での南限資料は、横手市上猪岡遺跡(秋田県教委1991)にある。

把手付土器の用途については、鹿角市下沢田遺跡での類例調査と分析により「把手の反対側の残存部が二次焼成を受けて色調が変化し、破損していることから鍛冶施設及びその作業に使用される道具である」(鹿角市教委1984)と想定されている。館ノ下遺跡出土の鉄滓が古代となる傍証となるのかもしれない。

## 3 中世・近世

中世では、中国産の白磁・青磁、国産の須恵器系陶器・瓷器系陶器、銭貨が、近世では国産の陶器・磁器、銭貨(寛永通寶)の遺物が出土している。土製品(土錘)、鉄製品、銅製品(銅鏡)は古代以

降としか推測できない。

小片しかも1点のみであるが白磁碗の出土は注目しておきたい。口縁上部に大きな玉縁をもつ形状は、大宰府編年では11世紀後半～12世紀前半の標準磁器であり、12世紀後半まで一定量を占める白磁碗Ⅳ類(太宰府市教委2000)とされる。同類の白磁碗は、五城目町野田の北遺跡(第5図27)で青磁碗と共に出土している(秋田県教委2001)。また、潟上市昭和豊川に所在する手の上遺跡でも出土例がある(秋田県教委2020)。

同じ中国産の青磁は、館ノ下遺跡から4点出土している。本遺跡の北東約1kmに位置する白ケ口V遺跡でも7点の出土が報告されている(八郎潟町教委2021)。当地で白磁・青磁が発見された意義については、次のような想定をしておきたい。

『八郎潟町史』によれば、白ケ口V遺跡の東側に隣接する小字に「子持沢」(第5図4、白ケ口Ⅲ遺跡の近辺か)があり、ここに東谷寺があったとされる(八郎潟町1977)。現在、八郎潟町一日市にある清源寺(第5図内左下)は、寺伝によれば天正8年〔1580〕、脇本城主(鹿鹿市)の安東愛季〔1539～87〕が前年に不運の最期をとげた浦城(第5図9)城主、三浦盛永の嫡男である三浦盛季(押切城(第5図28)城主)を弔うために、押切村にあった草庵を「石頭院」として開創したとされる。草庵の前身とは「かつて森山の奥にあり、浦城と共に兵火で焼かれた真言宗盛区山東谷寺の瑞天上人が結んだ」とされる(大坂1996)。一方で高岳山麓、浦城下に位置する八郎潟町浦大町の常福院(第5図、館ノ下遺跡の北西約500m)は、三浦盛永の祈願所であったが、その開創は子持沢にあった東谷寺とされる。東谷寺に安置されていた慈覚大師の作と伝わる薬師如来を勧進して常福院の本尊したというのが、昭和20年の火災で焼失した(秋田魁新報社1997)。

いずれにしろ、白ケ口V遺跡の隣接地は東谷寺にまつわる霊地として昭和21年まで耕地化されなかったこと、いずれも信仰の山として知られる高岳山、森山の存在とその位置関係も考慮すれば、当時の高級品である中国産の白磁や青磁が出土する背景には、当地周辺に宗教施設あるいはそれに関連する施設が存在していた可能性は高いと見られる。

近世では美濃(志野)の菊歯や砂目痕が認められる肥前産(唐津系)陶器皿・小皿がある。いずれも1600年代前半、いわば近世初期にあたる点は当地の戦国期以降の動静を探る上でも特記しておきたい。

#### 【秋田県内における块状耳飾出土遺跡 文献一覧】

- 1 秋田県教育委員会1999『池内遺跡-遺物・資料編』秋田県文化財調査報告書第282集
- 2 森吉町教育委員会1997『深渡遺跡』『平成8年度埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 3 秋田県教育委員会2006『鳥野上岱遺跡』秋田県文化財調査報告書第406集
- 4 秋田県埋蔵文化財センター調査、報告書は2024年3月刊行予定
- 5 井川町教育委員会1988『大野地遺跡発掘調査報告書』
- 6 磯村朝次郎1955『秋田県における先史硬玉製品』『秋田考古学』第2号  
栗澤光男2015『秋田県出土のヒスイ製品集成』『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第29号
- 7 秋田市教育委員会1972『概観下堤遺跡-第4次-』
- 8 秋田県教育委員会1996『片野Ⅰ遺跡』『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』秋田県文化財調査報告書第265集

- 9 秋田市教育委員会1988『昭和62年度秋田城跡発掘調査概報』
- 10 豊島 昂1967『縄文式文化』『秋田県の考古学』吉川弘文館
- 11 秋田県教育委員会2000『戸平川遺跡』秋田県文化財調査報告書第294集
- 12 秋田県教育委員会2004『龍門寺茶畑遺跡 向山遺跡』秋田県文化財調査報告書第373集
- 13 島海町教育委員会1998『提鍋遺跡』
- 14 秋田県教育委員会1990『ヲフキ遺跡』『大砂川地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第199集
- 15 秋田県教育委員会2003『ヲフキ遺跡』秋田県文化財調査報告書第352集
- 16 秋田県埋蔵文化財センター 2023『ヲフキ遺跡』『令和4年度秋田県埋蔵文化財報告会資料』
- 17 秋田県教育委員会1988『上ノ山Ⅱ遺跡』『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ』秋田県文化財調査報告書第166集／秋田県教育委員会1989『上ノ山Ⅱ遺跡』『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ（補遺）』秋田県文化財調査報告書第186集
- 18 秋田県教育委員会1991『小出Ⅱ遺跡』『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅷ』秋田県文化財調査報告書第206集
- 19 秋田県教育委員会2002『第120次調査の概要』『弘田柵跡調査事務所年報2001』秋田県文化財調査報告書第343集
- 20 田沢湖町教育委員会1998『湯前遺跡－平成9年度発掘調査報告』
- 21 秋田県教育委員会2000『湯前遺跡（第2次）』秋田県文化財調査報告書第306集
- 22 秋田県教育委員会2004『高野遺跡』秋田県文化財調査報告書第372集
- 23 秋田県教育委員会1990『下田遺跡』『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ』秋田県文化財調査報告書第189集
- 24 秋田県教育委員会2012『白館跡』秋田県文化財調査報告書第474集
- 25 秋田県埋蔵文化財センターが令和5年に調査、報告書刊行年度は未定
- 26 東成瀬村教育委員会2022『上埴遺跡内容確認調査報告書－重要文化財「磨製石斧四箇」発見遺跡－』

#### 【参考文献】

- 若美町教育委員会1975『海老沢窪跡緊急調査報告書』  
八郎湯町1977『八郎湯町史』
- 渡辺 誠1981『編み物鎌具としての自然石の研究』『名古屋大学文学部研究論集（史学）』27
- 秋田県教育委員会1983『平鹿遺跡』秋田県文化財調査報告書第101集
- 若美町教育委員会1984『横長根A遺跡』
- 鹿角市教育委員会1984『花輪館跡試掘調査報告書 下沢田遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料27
- 秋田県教育委員会1984『三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第110集
- 秋田県教育委員会1988a『寒川Ⅰ遺跡』『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』秋田県文化財調査報告書第167集
- 秋田県教育委員会1988b『太田谷地館跡』『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』秋田県文化財調査報告書第172集

- 井川町教育委員会1988『大野地遺跡発掘調査報告書』
- 伊藤武士1988『秋田城跡周辺須恵器窯の動向について』『秋田考古学』第46号
- 秋田県教育委員会1989『八木遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第181集
- 秋田県教育委員会1991『上猪岡遺跡』『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書X』秋田県文化財調査報告書第208集
- 田中英司1995『挟入意匠の石器文化』『物質文化』59
- ニッ井町教育委員会1996『加代神館跡』『東北電力(株)北奥幹線新設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 大坂高昭1996『秋田県曹洞宗寺伝大要』無明舎出版
- 秋田魁新報社出版部1997『常福院』『心のふる里「秋田のお寺」』秋田魁新報社
- 秋田市史古代部会1997『古城廻窯跡発掘調査報告書』秋田市史叢書1
- 秋田県教育委員会1998『池内遺跡 遺構編』秋田県文化財調査報告書第268集
- 秋田県教育委員会1999 a『脇神館跡』秋田県文化財調査報告書第284集
- 秋田県教育委員会1999 b『小袋岱遺跡』秋田県文化財調査報告書第285集
- 秋田県教育委員会1999 c『小林遺跡』『秋田県遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第291集
- 太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡X V - 陶磁器分類編 -』太宰府市の文化財第49集
- 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会10周年記念
- 秋田県教育委員会2000『狐森遺跡』秋田県文化財調査報告書第302集
- 秋田県教育委員会2001『北遺跡』秋田県文化財調査報告書第315集
- 五城目町教育委員会2002『開防遺跡』五城目町埋蔵文化財調査報告書第8集
- 秋田県教育委員会2002『後山遺跡』秋田県文化財調査報告書第340集
- 秋田県教育委員会2003『堂の下遺跡 I 旧石器時代～弥生時代編』秋田県文化財調査報告書第356集
- 秋田県教育委員会2004『小林遺跡 II - 平安時代・中世編』秋田県文化財調査報告書第376集
- 秋田県教育委員会2005『柏子所 II 遺跡』秋田県文化財調査報告書第398集
- 青森市教育委員会2006『新町野遺跡発掘調査報告書 III』青森市埋蔵文化財発掘調査報告書第87集
- 青森市教育委員会2008『新町野遺跡発掘調査報告書 IV』青森市埋蔵文化財発掘調査報告書第98集
- 青森県教育委員会2008『石江遺跡・三内沢部(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第458集
- 秋田県教育委員会2008『鹿渡沙 II 遺跡・樋向 I 遺跡・樋向 II 遺跡・樋向 III 遺跡・大沢 I 遺跡・大沢 II 遺跡』秋田県文化財調査報告書第436集
- 山本直人2011『縄文時代の打欠石鍾の用途に関する一考察』『名古屋大学文学部研究論集(史学)』57
- 吉川耕太郎2012『縄文時代の有肩打製石斧—東北地方北部を中心に—』『季刊考古学』第119号
- 横手市教育委員会2015『神谷地遺跡・小出遺跡』横手市文化財調査報告書第32集
- 川崎 崎2019『玦状耳飾と前期の装身具』『身を飾る縄文人—副葬品から見た縄文社会—』雄山閣
- 秋田県教育委員会2020『手の上遺跡』秋田県文化財調査報告書第517集
- 大工原豊他2020『縄文石器提要』ニューサイエンス社
- 八郎潟町教育委員会2021『白ケロV遺跡』八郎潟町文化財調査報告書
- 水ノ江和同2022『日本列島の玦状耳飾』『縄文人は海を越えたか?』朝日新聞出版
- 五城目町教育委員会2022『館ノ下遺跡』

## 報告書抄録

ふりがな	たてのしたいせき だいにじちようさ							
書名	館ノ下遺跡 第2次調査							
副書名	高岳地区農地集積加速化基盤整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	Ⅲ							
シリーズ名	八郎潟町文化財調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	鎌田大輝・高橋 学							
編集機関	八郎潟町教育委員会							
所在地	〒018-1692 秋田県南秋田郡八郎潟町字大道80番地 TEL 018-875-5812 FAX 018-875-5950							
発行機関	八郎潟町教育委員会							
所在地	〒018-1692 秋田県南秋田郡八郎潟町字大道80番地							
発行年月日	2024年3月15日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
たてのしたいせき 館ノ下遺跡	あきたけんみなみあきたぐん 秋田県南秋田郡 八郎潟町浦大町 あびのやしろ 字脇平	363	27-56	39度 57分 56秒	140度 05分 41秒	20220511 / 20221014	3,130㎡	ほ場整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
館ノ下遺跡 第2次調査	集落跡 散布地	縄文時代	土坑 土器埋設遺構	縄文土器 石器 剥片 珠状耳飾		早期後葉～末 前期 (円筒下層 b・c式、 大木4・5式)		
		古代		須恵器 土師器		8世紀後半～10世紀代		
		中世		白磁 青磁 須恵器系陶器 瓷器系陶器 銭貨		13世紀～16世紀		
		近世・近代	溝跡	陶磁器 銭貨		17世紀以降		
要約	<p>五城目町・八郎潟町に所在する館ノ下遺跡は、縄文・古代・中世の遺物散布地として周知されている。令和3年に遺跡南側を五城目町教育委員会が、令和4年には遺跡北側を八郎潟町教育委員会が第2次調査として実施した。</p> <p>第2次調査では、時期が明確な遺構は縄文時代(前期)のみであるが、出土遺物は縄文(早期後葉～末、前期)・古代・中世・近世・近代に及ぶ。遺構は土坑4基、土器埋設遺構1基である。土坑のうち1基(SK13)と土器埋設遺構は、墓であった可能性がある。出土遺物の主体を占める石器・剥片類は55,000点近く確認されたが、基本的に原位置を保つものではない。このことから、今回の調査区は、本来縄文時代前期の墓域であった場所に、一段高い中段丘面からの流れ込みにより石器製作作業に伴う石器類に覆われて形成されたと考えられる。石器には石錘や半円状扁平打製石器、磨石、台石などもあることから、石器製作に特化した遺跡ではなく、土坑墓の存在からも石器製作に伴う集落遺跡でもあったといえる。</p> <p>なお、古代では須恵器横瓶の出土等から本遺跡の南側約3kmに位置する石崎遺跡(秋田郡銚子町)との関係が、中世の白磁・青磁等の出土は北側に近接する浦城跡との密接な関係が想起される。</p>							



遺物出土状況〔220617撮影、西→〕LJ73グリッド第Ⅲ層上面

八郎潟町文化財調査報告書

## 館ノ下遺跡 第2次調査

高岳地区農地集積加速化基盤整備事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

発行：2024年3月15日

編集：八郎潟町教育委員会

印刷：八郎潟印刷